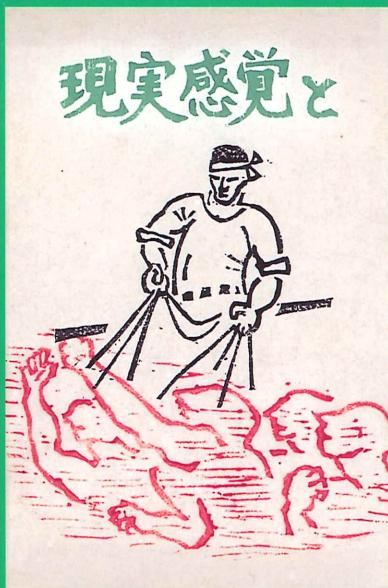


経済科学 通信

2002. 12 No.100

1981年5月20日第4種郵便物認可
ISSN 0385-065X

百号の歩みを振り返る



『通信』第Ⅱ世紀へ

21世紀の福祉社会をリードする総合辞典

社会福祉 辞典

絶賛
発売中

社会福祉辞典編集委員会編

[監修] 一番ヶ瀬康子・小川政亮・
真田 是・高島 進・早川和男

[A5判上製函入・640頁] 4800円

社会福祉 辞典

DICTIONARY OF SOCIAL WELFARE

社会福祉辞典編集委員会編

(著)一番ヶ瀬康子
小川政亮
真田 是
高島 進
早川和男

大月書店

社会福祉辞典

社会福祉辞典

[ケアマネジメント][シルバービジネス][支援費支給制度][リーチアウト][児童虐待]など、基本用語から最新の話題まで、充実の3400項目

[社会福祉辞典の特色]

1. 福祉をめぐる疑問や矛盾がすっきりわかる
2. 最先端の用語や国際的な動向も詳しく紹介
3. 社会福祉の学習や実践・実務・運動に役立つ
4. 第一線の研究者・実践者300人の英知を結集
5. わかりやすく明快、使いやすいハンディタイプ

●好評の新刊から

戦争か、平和か 「9月11日」以後の世界を考える

小田実著 今こそ戦争を止める平和主義の論理と倫理を説く。46判・1300円

増補改訂版 言語的コミュニケーションと労働の弁証法

尾関周二著 21世紀を見通す人間観の基本的なテーマを探究。46判・3600円

カール・マルクスと西欧政治思想の伝統

ハンナ・アーレント著／佐藤和夫編 アーレント思想の核心。46判・4500円

中国山西省における日本軍の毒ガス戦

栗屋憲太郎編 現地調査、被害者インタビューを集大成する。46判・6800円

映画のなかのメディア 映画の“輝き” テレビの“闇”

加藤久晴著 映画作品を使って面白く展開されるメディア論。A5判・1800円

大月書店ホームページ
<http://www.otsukishoten.co.jp/>

大月書店

東京都文京区本郷 2-11-9
電話03(3813)4651(代表) 税別価格

経済科学通信

Letters of Economic Science

第100号(2002年12月)

SPECIAL EDITION
特集

『経済科学通信』第Ⅱ世紀へ

特集「通信第Ⅱ世紀へ」によせて ······ 森岡 真史 2
民主主義的共同研究・学習をめざして 第0号～第10号 ······ 重森 曜 3
基礎研夜間通信大学院の

発足をめぐって 第11号～第20号 ······ 中谷 武雄 8
学界状況を反映した論争中心の編集 第21号～第30号 ······ 大西 広 15
共同研究と編集のメッセージ性 第31号～第40号 ······ 赤間 道夫 20
「構造転換」の分析を通じて

新たな理論構築へ 第41号～第50号 ······ 横山 寿一 26
編集局の裏方から 第51号～第60号 ······ 梅原 英治 31
労働過程研究から企業社会批判へ

—ソ連・東欧崩壊を背景に— 第61号～第70号 ······ 森岡 真史 37
本誌の集団的討論から生まれた

日本型企業社会論 第71号～第80号 ······ 森岡 孝二 45
資本主義と市場の生命力、

東アジアの明暗への注目 第81号～第90号 ······ 藤岡 悠 51
市民社会論とポスト企業社会論の交錯 第91号～第99号 ······ 神谷 章生 57

100号記念メッセージ

人間発達を保障する労働と自立支援ネットワーキング ······ 池上 悠 7
お祝いと期待 ······ 柴垣 和夫 14

3つの課題 ······ 菊本 義治 25

今後の経済学の課題 ······ 小谷 崇 30

新たな発展を期待 ······ 成瀬 龍夫 36

「生活賃金(リビング・ウェイジ)」論の展開を ······ 中川 スミ 43

「関係性の経済学」の構築を! ······ 福田 善乙 44

一度きりの人生を有意義に ······ 小野 満 50

『通信』編集作業を経験して ······ 佐々木潤子 61

歴史の岐路で迎えた『通信』100号 ······ 岡 宏一 62

表紙イラスト作成の思い出 ······ 川本 浩 63

『経済科学通信』総目次 ······ 64

『経済科学通信』第1号～第100号および臨時増刊号執筆者一覧 ······ 84

特集「通信第Ⅱ世紀へ」によせて

今号は、『経済科学通信』の100号記念として、創刊号（1970年6月）から第99号（2002年8月）までを10人の執筆者によって10号刻みにふりかえる特集を組んでいる。また、資料編として、100号までの総目次と、誰が何号に執筆したかがわかる執筆者索引を付した。これらのレビューと資料により、創刊以来の30年余りの本誌の歩みをおおまかに通観できるだろう。なお、特集タイトルの「第Ⅱ世紀へ」という表現は、本誌が100号を迎えたことを意味しており、かの『暮らしの手帖』の方式にならったものである。

本特集の目的は2つある。第1は、『通信』がこれまでどのような問題をとりあげ、それらをいかに論じてきたかを時代状況と関わらせながら検証することである。『通信』は基礎経済科学研究所の機関誌であり、その企画内容は、基礎研の日々の活動と密接に関連しているから、『通信』の検証には、基礎研の歩み（その大きな一側面）の検証という意義もある。とはいっても、こうした回顧は、ただ過去を確認するだけに終わるなら、後ろ向きというそしりを免れない。本特集の第2の、そして未来志向の目的は、現在の視点からの『通信』の読み直しを通じて、これから新たな展開においてとりくむべき課題を見つけだすことである。

基礎研と『通信』の原点には、後に「基礎研夜間通信研究大学院」設立に結実する、若手研究者たちの共同研究・学習運動があった。初期の『通信』には「研究運動論」を主題とする論文が多い。また夜間研究科発足以降、『通信』は研究科を修了した労働者研究者の論文発表の場としての役割も果たした（巻末の一覧に出てる500名以上の執筆者の中には、少なからぬ数のこうした労働者研究者が含まれている）。しかし、近年では、研究と教育が「共同」や「運動」の観点から語られることが少なくなるにつれて、研究運動関係の論文は『通信』から姿を消しつつある。社会人に対する教育活動の面でも基礎研はさまざまな困難に直面しており、『通信』の労働者研究者の発表の場という性格も弱まっている。

基礎研と『通信』の運動体的側面の後退は、左翼や組織的社会運動の退潮という全体的傾向と切り離して考えることはできない。とはいっても、こうした傾向に抗して、基礎研が今後も「働きつつ学ぶ権利を担う」研究教育の運動体であり続けようとするならば、今日の条件にふさわしい研究者の「共同」の新しいあり方の探求は避けて通れない課題である。そのためには、1960

年代末～1980年代はじめの基礎研による研究・教育運動がはたした役割を歴史的視点から再考する作業が必要となるだろう。

『通信』は、これまで、いくつかの主題について、集中的な論争や集団的な検討を行ってきた。おもなものとしては、国家独占資本主義論、現代資本主義分析の方法論、労働過程論を軸にした資本論読解、人間発達の経済学、日本経済の構造転換論、日本型企業社会論などがあげられる。比較的多数の論者が関心を共有できる主題の設定は、研究所内外の議論を活性化させ、当該問題に関する認識を拡大・深化させる点で、大いに有益であった。その反面、どの主題も、十分に議論が尽くされたとは言えないのも事実である。例えば国家独占資本主義論は、乗り越えられたというより「忘れ去られた」状況にあり、また90年代はじめに集中的に議論された日本型企業社会論も、バブル崩壊後の不況の長期化の中で、影が薄くなった感がある。

個々の論争で何が共通認識となり、何が未解決に終わったか、またその後どのような理解の変化が見られたか、さらに、当該主題に関わって分析が欠けていた領域は何か。こうした点の問い合わせを抜きには、『通信』の新たな展開も浅薄なものとならざるをえない。本特集のレビューでは、各テーマに関する議論の内容と文脈が簡潔に要約されている。論争の掘り起こしから今後に向けての課題を（再）発見してゆくうえで、これらのレビューが一つの手がかりとなれば幸いである。

ところで、一時千数百部に達していた本誌の部数も今では900部を切るところまで落ち込んでいる。創刊時からの社会情勢の変化を考えれば、「よく持ちこたえている」とも言えるし、またこの間コストを大幅に削減してきたことで、現在の読者数が維持できれば、財政的にはさらなる継続発行の見通しはある。しかし、読者の減少に歯止めがかからないこと、論壇や学会においてマルクス的社会科学がますます「周縁化」していること、さらにまた、基礎研自体の組織的活力が低下しつつあることを考えるならば、200号（現在の年3号ペースでいけば33年後）を迎えるかどうかについては、楽観を許さない状況にある。101号からの新たな挑戦が活力に満ちたものとなるよう、所員・所友・読者の皆様においては、本誌にいっそうのご支援・ご協力を賜りたい。

（森岡 真史 本誌編集局長）

民主主義的共同研究・ 学習をめざして

第0号～第10号



SHIGEMORI Akira

重森 晓

I 幻の「0号」

経済学基礎理論研究所が発足したのは1968年11月のことであり、その前身は、1967年5月に発足した「京大学習センター」である。さらにその源流をたどれば、1965年、文学部出身の学生運動上がりの落ちこぼれ3人が、池上惇氏の指導の下に「資本論」の勉強を始めたことにある。この勉強会が、67年3月に「基礎理論研究会」になり、やがて、経済学基礎理論研究所になり、後に基礎経済科学研究所となるわけである。

こういうわけであるから、当初は「機関誌」などはなかった。『経済科学通信』の第1号が発刊されるのは、1970年6月27日のことである。しかし、その前に、幻の0号がある。これを所持している人は少ないと思うが、ところどころ判読不能な、ガリ版刷りの8ページ、ホッチキス綴じで、「経済学基礎理論研究所機関誌、0号、1970年2月6日発行」と書かれている。その「発刊のことば」は、次のようなものであった。

「基礎理論研究所が発足して早や一年。…この一年間、労働者、人民、私たちの行く手をはばもうとする敵は、はげしい攻撃をかけ、時には研究所の活動も停滞し、厳しい試練の連続でした。しかし労働者人民大衆の利益を守ろう、人民大衆の

中に入り共にがんばっていこうとする私たちの高い意気込みと何よりも差別された状態にありながらも団結して頑張っていこうとする若い研究者である私たちの熱意と努力が研究所を支えてきました。又、大学の研究者をはじめ多くの人々の私心のない協力援助が大きな支えがありました。…

私達の機関紙は、多くの人々のはげしい意気込みと熱意、研究所一年の活動の上に生まれ出たものです。困難はきっとつきまとうことでしょうが、何としても継続して、定期的に作っていきましょう。…」

なんとも、意気軒昂たる文ではある。大学紛争など、当時の高揚した雰囲気が感じられる。0号にはまだ機関誌としての名前がついていなかったが、「発刊のことば」によると、「人民の中へ」とか、「無産研究者」などが候補に上がっているとある。『経済科学通信』がもし『無産研究者』だったら、いまごろどうなっていただろうか。

わずか8ページの中に、何人かの名前とそれぞれの当時の研究テーマがちりばめられている。ちなみに、その名前を紹介すると、掲載順に、土居英二、森岡孝二、池上惇、岡本博公、鍛冶邦雄、重森 晓、青木圭介、本多三郎、中村雅秀、松永健二、片桐正俊、山本恒人などである。池上惇氏を除いてほとんどが当時大学院生だったと思うが、今日ではそれぞれの分野で活躍している教授ばかりである。

II 教育・研究運動論の探求

『経済科学通信』は、当初、会員間の情報交換と交流のための機関誌という位置づけであった。「通信」という名前もそこからきている。そういう事情もあって、1号から4号までは、経済学における教育・研究のあり方に関する運動論・組織論にかかる論文や報告が数多く掲載されている。各巻頭には、歴史的ともいべき次のような諸論文が掲載されている。

第1号：吉村民人「研究教育自治体労働者像について——1970年代の研究者たち」

第2号：中島哲郎「民主主義的共同研究の現段階と我々の経験」

第3号：中島哲郎「基礎理論研究所における編集委員会の役割について」

第4号：森岡孝二「今日の経済学教育の課題」

吉村民人論文は、「国民の生活権を代表する研究教育の発展」を主張し、次のように述べている。

「急激な技術の進歩は労働者の熟練をつねに台なしにしてしまう。その結果、たえざる研究と教育によって労働能力の開発をはかることは、労働者の生存にとって不可欠の重要問題とならざるを得ない。／ここに生活権、生存権の一部分としての研究、教育の国民的権利がますます拡大されなければならない物質的基礎がある。」

さらに吉村民人論文は、差別的な文部行政によって、研究・教育条件における大学間格差や、めぐまれた研究者と差別された研究者との間の格差が

広がっていることを指摘し、「『研究教育自治体』の労働者であり、同時に研究教育能力を身につけた労働者を生産する過程でもある大学教職員と大学院生が、大学院進学をめざす人々の生活権、学習権に無関心であってはならない」とする。そして、また、大学院をめざす人々も、孤立し、アトミックな競争因子になりはててしまうではなく、自らの研究教育を国民の生活権の一部としてとらえ、団結して自らの生活権を確立するための努力をすることが必要であるとした。

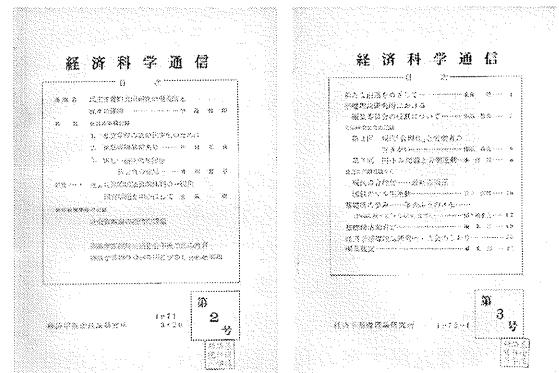
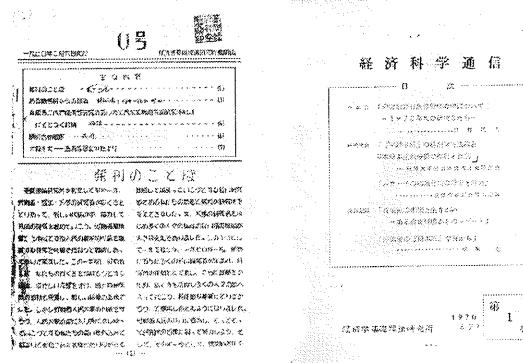
「1970年代の大学は、『研究教育自治体労働者とその予備軍の同盟』が、国民の生活権の一部としての研究教育の権利に支えられて、特権者の財力と権力に支えられた情報独占、差別体制、産学協同路線に対決するものならざるをえないであろう。」

これが、第1号の巻頭をかざった吉村論文のむすびである。「働きつつ学ぶ権利を担う」とか、「差別された研究者の協同」といった、基礎研運動をささえてきた基本精神がここに示されている。

第2号の中島論文においては、「国民の生活権の一部としての研究教育」という思想がさらに発展させられている。

「（基礎研）構成員が、大学院生、教官、労働者、大学院受験浪人と様々な故であるが、これらの会員を相互に結びつけているものは、一方では共同研究体制と科学の総合性そのものであり、他方では、労働者との共同学習会等の実践的姿勢であろう。」

中島論文はこう述べた上で、「研究者対一般労働者」「科学者対労働者」といった対比や差別の



物質的根拠はもはや失われており、「科学者の社会的責任」といった発想をこえて、「研究者は、共に斗かう労働人民内部で、自らの担うべき分業的位置を自覚しなければならない」としている。「そこでは国民的生存権としての学習権・教育権と研究者の労働権の主張は同一の基盤に立っているのであり、『教えにいく』『学びに行く』という発想そのものが否定されねばならない」というのである。このように、いわゆる研究者と労働者が民主主義的な共同をつうじて学びあい育ち合うという精神も、基礎研運動をささえる重要な柱となつた。

第3号の中島論文では、基礎研運動における研究創造活動の位置づけがなされている。中島論文によると、1971年1月のはじめての合同研究集会と、1971年5月の総会によって、基礎研運動は新たな発展段階に入った。基礎研運動は、①労働者学習の普及と発展、②民主的研究者の集団的養成、③経済学基礎理論の創造的発展という三つの柱からなるが、そのうちの「経済学基礎理論の創造活動」をはかることが、これらの活動の結節点であり、これから的重要課題であるというのが、中島論文の主旨である。経済学の創造的発展は、次の15の分野で「経済学基礎理論の体系化をはかる」という壮大なものであった。①現代経済学入門、②資本論研究Ⅰ、③資本論研究Ⅱ、④資本論研究Ⅲ、⑤工業と農業、⑥国家と財政、⑦世界市場と恐慌、⑧帝国主義論研究、⑨社会主義論、⑩国家独占資本主義論、⑪近代経済学批判、⑫古典経済学批判、⑬資本主義発達論、⑭日本資本主義研究、⑮「合理化」と労働問題。

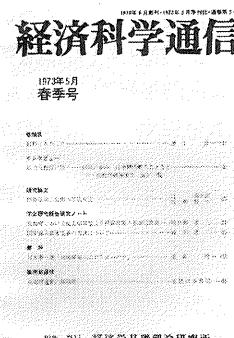
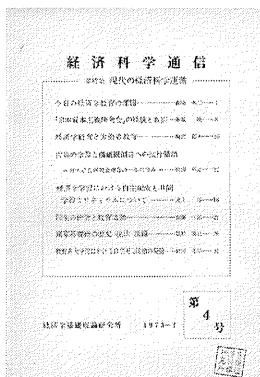
第4号の森岡論文では、経済学教育のあり方に

ついてすぐれた提起がなされている。経済学の創造的発展のためには、経済学教育の科学的方法の確立が必要となるというのが、その基本的視点である。その上で、森岡論文では、(1)労働者教育と研究者養成という経済学教育の二大分野を統一して共同研究を発展させること、(2)労働者教育に参加することによってそこから実践的課題を見いだし、理論的示唆を汲みとってくること、(3)教育と研究の統一された共同研究の発展において、教師と研究者集団の間の民主的共同が求められること、(4)基礎理論の共同研究を横軸に、個人のテーマに基づく研究を縦軸にしながら、研究成果の共有化をはかること、などが強調されている。基礎研運動では、「生き生きとした現実感覚と基礎理論の結合」が合い言葉のようになってきたが、その理論的根拠はここにも示されている。

このように、第4号までの「通信」各号には、ここで紹介された論文だけでなく、研究会や学習会、地域での活動をふまえた報告が数多く載せられており、研究教育活動のあり方に関する検討が執拗なまでにくり返されている。このような発足時における徹底した運動論・組織論の探求が、その後の基礎研運動の礎を築いたといえるであろう。

III 「通信」第二の生誕

第4号の編集後記には、「『経済科学通信』は第5号から季刊で内容的にも新編集方針のもとに発行されます」と予告されている。そのとおり、第5号からの『経済科学通信』は、「所員間の通信



経済科学通信

1973年8月
夏季号
編集・発行 経済学基礎理論研究所

経済科学通信

1973年11月
秋季号
編集・発行 経済学基礎理論研究所

と、所員内部の連絡と交流」から脱して、ひろく「経済学基礎理論そのものの展開」をあつかうものに発展させられた。『経済科学通信』第二の誕生である。しかし、『通信』がたんなる研究発表の場に変わったというのではなく、「あくまでも教育活動を基礎としながら、さらに研究活動を拡大することによって、教育活動をも一層高い水準に引き上げねばならない段階にきた」（池上惇「創刊にあたって」）ことを意味するものであった。

第5号の巻頭には、島恭彦教授へのインタビューが掲載されている。第6号には見田石介教授、しばらくおいて、第11号では中村静治教授と続く。基礎研は、教師と若手研究者の民主主義的共同を主張したが、こうした先輩研究者の歩んだ道と業績に尊敬をはらい、そこから学ぼうとする姿勢は一貫して強かったといえる。

第二の創刊となった第5号に掲げられた研究論文は、辻英太郎・成瀬龍夫の「価値法則と労働力価値規定」であった。ちなみに1973年の基礎研の年間テーマは、「資本主義と価値法則」であった。他に、柳ヶ瀬孝三「京都府における民力培養型公共投資政策の基本的特徴」、森岡孝二「国家独占資本主義の方法について」などが「学会、研究会報告 研究ノート」として載せられている。

第6号でも、芦田亘「帝国主義の経済的危機の理論——国家独占資本主義の必然性への——視点(1)」、村田武「革新自治体の農政——その新しい課題」、林堅太郎「アメリカ戦時経済と優先制度——予算制度改革論における一論点」など本格的な力のこもった作品が続く。坂井昭夫は「『現代世界恐慌と資本輸出』の刊行に思う」を書いてい

る。

第7号からは、池上惇による『資本論』入門、森岡孝二による『帝国主義論』入門の二つの連載講座が開始された。第7号の加藤一郎「『公共経済学』をめぐって」、第8・9号の岡林二郎「インフレーションと日本経済——「石油危機」、産業再編の動向にもふれて」、青木圭介「『独占価格インフレ』論に関する覚書」などの力作がならんでいる。個人的なことになるが、第7号の現地ルポ「ダムと地域住民——吉野川・早明浦ダム」は、私の高知における最初の調査研究の報告であり、その後の研究テーマや方法を決定づけた懐かしい作品である。

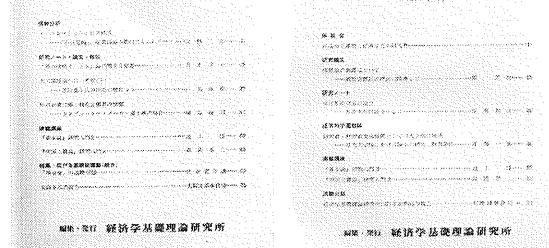
第7号および第8・9号でとりわけ印象的な論文は、二号にわたって掲載された、当時神戸製鋼の社員であった戸名直樹氏の「大工業理論への一考察——芝田進午氏の所説に触れつつ」(上・下)である。戸名氏は、芝田進午氏の精神労働論を高く評価しながらも、「現代における精神労働論の展開において、科学・技術発展の主体的契機を科学・技術労働者のプロレタリア化に求めるだけでなく、肉体労働者から育ってくる科学的法則の認識能力の獲得という見地からあわせて捉えることが重要」であるとする。そして、「資本主義的生産力の高度な発展が、労働能力と生命力の一面化と破壊を大規模におし進める中で、労働環境の改善と労働能力の回復・全面的発展をはかるべく、労働者階級をして公教育と公的規制を要求することを余儀なくさせていく」とした。さらに、「工業プロレタリアートは、生活サービス・生産サービスや環境整備等を通して住民生活と深く結びつかざるをえない公務労働との協力関係(=連帯)を抜きにしては、その歩みを積極的な方向に進ませることは可能でない」と述べて、労働者・市民・公務労働の協力・連帯をとおして、「(労働者が)国民的視野からみずから労働過程と内容への要求を提起し、その社会的承認をせまる」ことによって、展望が開けるとしている。また、これらの検討をふまえて、戸名氏は、最後に、「労働者学習と研究者養成という経済学教育の二つの分野を統一して、労働者の経済学学習の水準を高め、労働者のなかに専門家・研究者を大量につくりだすことが重要になっている」と結論づけている。

経済科学通信

1974年4月
冬季・春季合併号

経済科学通信

第10号
1974年9月



彼はその後自らこの提起を実践した。こうして、経済学の教育研究にかんする基礎研の運動論・組織論は、現場労働者による大工業論・現代精神労働論の研究という貴重な成果に裏付けられ、客觀化されるに至ったのである。

第10号では、揚武雄「価値論の意義について—置塩信雄氏の所説に関連して」や、成瀬龍夫「現代都市政策の論点—都市開発問題を中心に」などの論文が掲載されている。巻頭に載せられているのは、座談会「経済科学運動と経済学若手研究者」である。座談会の出席者は、石井実(京都)、小野秀生(京都)、加藤一郎(京都)、坂井昭夫(大

阪)、重森 晓(高知)、津川俊郎(京都)、戸名直樹(大阪)、三田純一(東京)、山田隆史(東京)、芳野俊郎(愛媛)、そして司会は『通信』編集局の森岡孝二である。座談会の最後に、司会の森岡氏は次のように述べている。「『通信』編集上の一つの特徴は、科学的にできるだけ内容豊かな研究論文を発表していくと同時に、経済学の若い研究者の教育研究運動論あるいは経済科学運動論を重視していくことにあります」と。第10号の発行は1974年9月、基礎研運動における運動論・組織論へのこだわりは、まだまだ健在だった。

(しげもり あきら 所員 大阪経済大学)

Message

人間発達を保障する労働と自立支援ネットワーキング

池上 悅

基礎研の創設当時、30歳前後の教師と若い大学院生たち、(いまでは、各大学の長老教授が多い)彼らが考えていたこととは何か。まさに「若手研究者の自立」と「人間発達」のための研究所づくりであった。しかも、この「自立と人間発達」は、研究教育のための組織づくりの課題であっただけでなく、現代経済学の根本にかかわる研究課題でもあった。

この何十年にもわたる長い歴史の中で、基礎研ではたらきつつ学習した人々のなかから多くの専門家が育った。また、自立支援の研究体制は、不完全ながら、社会人大学院の増加となって実を結んだ。さらに、自立支援ネットワークの経済学は、福祉や情報の研究の進展と歩調をあわせ、日本独自の固有の経済学として発展の道をきり拓いてきた。

先日(11月5日)ノーベル経済学賞を受けられているA・セン教授が来阪され、重森暁教授の司会で、貧困と人間発達について講演された。私も

拝聴させていただいたが、人間の潜在能力の剥奪への厳しい批判と、それとたかう自由への権利を語る情熱に深く感動した。

基礎研の設立時にかけた人間発達研究の課題は、まちがっていなかった。これは、国際的な貧困とたかうシンボルであり、学術的貢献の大きなテーマである、としみじみ思った。

同時に、当時の私達の研究は、現代経済学の文脈を活かして多くの研究者を説得しうるだけの洗練度が求められる。

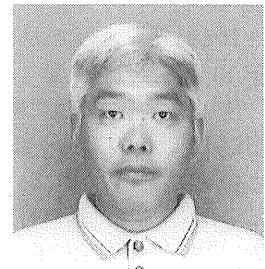
洗練度の不足は、若手中心の研究集団であったところからくる止むを得ない面もある。けれども、今や60歳前後に達した研究者も多いのだから、今、一歩の洗練化と体系化を試みよう。そうすれば、この研究の成果は、おそらく、貧困の克服と経済学の発展に、なくてはならないものとなるだろう。

力を込め、心を込めて挑戦してみたい。

(いけがみ じゅん 所員 京都橘女子大学)

基礎研夜間通信大学院の 発足をめぐって

第11号～第20号



NAKATANI Takeo
中谷 武雄

I 全体的な特徴：基礎研と 編集局体制の充実

第Ⅱ期は、第11号（1975年2月）から第20号（1977年10月）までを対象とする。先ずはじめに指摘しておきたいことは、この10冊分の発行期間をカバーするのが2年と8ヶ月（32ヶ月）であり、1976年には4冊を発行し、実質的に季刊化が実現していることである。32ヶ月は、他の期の期間と比べて、おそらく1番短いと思われる。しかも第20号には、1500部体制とあり、総発行部数はかなりのものであると思われる。

3ヶ月（正確には32ヶ月）毎に1冊ずつの発行を継続することができたエネルギーの高まりを実感するとともに、その盛り上がりの要因や背景について、懐かしくもまた感慨深く、色々と多くのことを思い出したり、数多くの場面を懐かしく再現しながら、今からすでに四半世紀以上も前のことではあるが、読み進めることができた。私事で恐縮ではあるが、処女論文の執筆・公刊、大学院を修了し、初めて京都を離れて、大学に職をえ、講義を始めた時でもあり、また結婚をした時でもある。個人的にも高揚期であったことも間違いない。

1975年3月の総会が、これらの背景の出発点である。まずこの総会で、従来の、経済学基礎理

論研究所は基礎経済科学研究所へと、名称変更を行った。これを受けて、第12号（1975年6月）から、編集・発行が基礎経済科学研究所となるとともに、最上段に「働きつつ学ぶ権利を担う経済科学の教育・研究誌」の「キャッチ・コピー」が刷り込まれるようになる。それ以降、第18号（1977年4月）でだけこのコピーが抜け落ちる。この第18号では、「編集代表者：森岡孝二」に逆戻り（後述）したりもしたが（第19号以降は正常化）、表紙最下段には、基礎経済科学研究所、とのみ記載されるようになり、「編集・発行」の文字は消えた。

そしてこの総会で、「働きつつ学ぶ権利を担う経済科学の自主的民主的教育・研究団体」としての新しい発展をめざして、「基礎経済科学夜間通信大学院」の設置および秋からの開講が決定された。第13号（1975年10月）は、総特集：基礎経済科学夜間通信大学院、と特別号となっている。この準備過程のなかで、基礎研の事務所が設置され、第13号以降、発行所：基礎研の住所表記が、従来の中谷武雄気付から、

602 京都市上京区河原町通今出川下ル 芝山ビル
TEL (075)255-2450

となった。事務所の開設とともに、基礎研の専任事務局員体制が敷かれることになった。西田達昭「事務局員になるにあたって——母への手紙——」（第13号）を参照。

基礎研の組織的な再編・充実にともなって、編

集局の体制も拡充・充実された。編集委員（会）体制が確立する。従来は編集代表者だけが記載されていたが、第17号（1976年11月）には、12名の「豪華メンバー」の編集委員が表示された。前述の第18号を経て、第19号は15名、第20号は16名へと拡充・発展している（編集委員体制はまだ流動的であったのであろう）。

そして最後に、第18号から、活版印刷を開始した。印刷所が、小林プリントから博文堂印刷所となった。

II 基礎研夜間通信大学院の発足

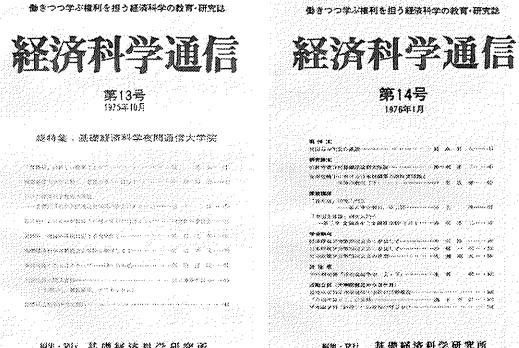
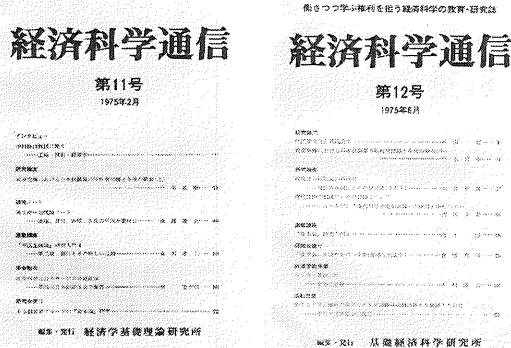
第13号は、総特集：基礎経済科学夜間通信大学院、となっていて、池上惇「今日の経済科学教育の課題——基礎経済科学夜間通信大学院の設立にあたって——」、研究教育委員会「各学科における研究教育の目標と学習の方法について」、設立準備委員会「大学院設立関係資料（「お願い」、募集要領、カリキュラム）」、基礎経済科学研究所規約、他が収録されている。カリキュラム（42ページ）は、別表としてここに再録しておく。

この間の過程は、第12号の編集後記でも触れられているが、1975年3月の総会において、基礎研の組織的な改変・改革がなされ、名称も「経済学基礎理論研究所」から「基礎経済科学研究所」と改められるとともに、文字通り働きつつ学ぶ者の権利を守り、その立場に立って経済科学の研究と教育を進める体制を整備し、これを「基礎経済科学夜間通信大学院」として具体化し、多くの賛同者や学ぶ意欲に燃えた新しい仲間を迎えて、基

基礎研は新たに再出発したといえる。

総会後半年の準備期間（カンパ活動も含めて）をへて、10月12日に100余名の出席者をもって、開校式が盛会裏に挙行された。月2回、合計18回にわたる「資本論・帝国主義論講義」には、京都会場で50名、大阪で70名で定着し、同じく月2回の各学科（技術・産業論、自治体論、金融・流通・協同組合論、労働・農民運動論、社会構成体発達史論、の5学科に加えて、12月からは平和論学科を新設）のゼミナールも、全体で50名の入学者、それに大学教員、院生、事務局を担う若手層も加えて、80名規模で継続され出した（第14号「活動日誌」参照）。この基礎経済科学夜間通信大学院の設立・運営によって、基礎研は、従来の仲間内の学習サークル的な団体から脱皮して、公的な、開放された教育・研究組織に成長した。講義・ゼミナール活動とともに、出版企画にも力を入れることになった（編集委員会体制）。

池上「今日の経済科学教育の課題」では、①『資本論』や『帝国主義論』の古典学習と現実的直感力の養成を統一して行うこと、②集団主義にもとづく基礎学習と専門研究を追求し、その到達度を科学的に、客観的に評価すること、③現場労働者の自己労働を研究の専門性の対象として位置づけ、研究と教育を統一して専門性と総合性を獲得し、実践的な場面で政策家としての力量を發揮できるようになること、が強調され、この3つはその後の基礎研活動にも綿々と継承されていく。池上「経済科学教育の理論的諸問題 — 夜間通信大学院春季合宿より —」(第15号)、同「資本論・現代資本主義・民主主義 — 夜間通信研究科1976年夏季合宿研究集会の報告」(第17号)、同



資本論・帝国主義論講議計画

京都は水曜日・大阪は木曜日
時間は6:30~8:20 中10分休み

| 講義では資本論・帝国主義論の研究水準を紹介しつゝ、体系的に解説し、現代的課題への論及と資料提供をおこなう。 | 内 容 | 京 都 | 大 阪 | I 技術・産業論学科 |
|---|--------------------------|--------------------|--------|------------------|
| | 1. 資本論序文及び経済学の方法 | '75. 10. 15 | 10. 16 | 1. 中村静治氏の業績の検討 |
| | 2. 労 働 日 | 10. 22 | 10. 23 | 2. 資本論における技術論 |
| | 3. 協業とマニュファクチュア | 11. 5 | 11. 6 | 3. マニュファクチュアと技術 |
| | 4. 機械と大工業 | 11. 19 | 11. 20 | 4. 機械と技術 |
| | 5. 資本主義的生産関係 (本源的蓄積) | 12. 3 | 12. 4 | 5. 史的唯物論と技術史 |
| | 6. 商品と貨幣 | 12. 17 | 12. 18 | 6. 社会内分業の概念 |
| | 7. 貨幣の資本への転化 | '76. 1. 7 | 1. 8 | 7. いわゆる経営技術について |
| | 8. 絶対的剩余価値の生産と相対的剩余価値の生産 | 1. 21 | 1. 22 | 8. 超過利潤と技術進歩 |
| | 9. 生産的労働と不生産的労働 | 2. 4 | 2. 5 | 9. 芝田進午氏の業績の検討 |
| | 10. 労 賃 | 2. 18 | 2. 19 | 10. 資本主義の労賃と技術導入 |
| | 11. 資本の蓄積過程 | 4. 7 | 4. 8 | 11. 南克己氏の業績の検討 |
| | 12. 帝国主義論序文及び独占の概念 | 4. 21 | 4. 22 | 12. 独占と産業構造 |
| | 13. 銀行の新しい役割と金融資本 | 5. 12 | 5. 13 | 13. 山田盛太郎氏の業績の検討 |
| | 14. 都市と農村、資本の輸出 | 5. 26 | 5. 27 | 14. 地域と産業・農業技術 |
| | 15. 独占団体及び列強による世界の分割 | 6. 9 | 6. 10 | 15. 技術開発と国際カルテル |
| | 16. 帝国主義の寄生性及び腐朽化 | 6. 23 | 6. 24 | 16. 技術と資源 |
| | 17. 帝国主義の歴史的地位及び国家独占資本主義 | 7. 7 | 7. 8 | 17. 国独資と日本の産業 |
| | 18. 社会主義及び共産主義 | 7. 21 3・8月は合宿予定 | 7. 22 | 18. 社会主義と技術・産業 |

ゼミナール実施計画

2年間の努力目標を考えて下さい。
ゼミ全員の意見で進度は決定します。 土、日の時間は調整します。

| II 自治体論学科 | III 金融・流通・協同組合論学科 | IV 労働・農民運動論学科 | V 社会構成体発達史論学科 | |
|---|---|---|--|---|
| 共同体・国家・自治体の相互関係を日本の自治体の現状を手がかりとし、公務労働論を指針として検討する。 | <p>1. 公務労働論の検討 2. 資本論「協業」と共同体 3. マルクス「ブリューメル18日」 4. 資本論「社会内分業と公務」 5. マルクス「フランスにおける内乱」 6. 商品生産と国家 エンゲルス「起源」 7. 島恭彦氏の業績の検討 8. エンゲルス「状態」の検討 9. 経済学批判体系と国家 10. 公務労働者の賃金問題 11. 地域における貧困化 12. 社会資本論の検討 13. 財政と金融 14. 国家の土地所有 15. 財政自主権 16. 現代資本主義財政論 17. レーニン「さしまる破局」</p> | <p>1. 標準労働日と協同組合 2. マルクスとオーエン 3. エンゲルス「フランスとドイツの農民問題」 4. レーニン「協同組合論」 5. レーニン「さしまる破局」 6. 資本論と商業資本論 7. 資本論と利子生み資本論 8. 労働者福祉論 9. 福祉労働について 10. 家政学批判 11. カントール「協同組合論」 12. マルクス「哲学の貧困」 13. 金融資本と流通問題 14. 地域福祉論 15. ニューディールの経験 16. 住宅問題 17. 厚生経済学批判 18. 経済的民主主義・独禁政策</p> | <p>日本の階級構成を基礎に生活諸条件と階級意識の発展の関係を解明し統一戦線戦術の科学的検討をおこなう。</p> <p>1. 共産党宣言 2. 資本論における労働と生活 3. マルクス・エンゲルス労働組合運動論 4. 資本論における部分労働と全体労働 5. 大橋隆憲「日本の階級構成」 6. 「疎外」と貧困化 7. 労働力の価値と価格 8. 摻取の新しい形態 9. 中間階論級の検討 10. ウェヴ「労働組合労働史」 11. 現代貧困論 12. 独占と労働組合 13. 貯蓄、租税、保険と労働組合 14. 農協と労働組合・農民組合 15. フォスター「世界労働組合運動史」 16. レーニン「二つの戦術」 17. レーニン「農業綱領」 18. レーニン「国家</p> | <p>自然と社会の変革における労働の意義を中心に歴史の創造における経済思想、個人、住民の役割を検討する。</p> <p>1. 「ドイツ・イデオロギー」 2. 「経済学批判序言・序説」 3. 「猿が人間になるについての労働の役割」 4. マルサス「人口論」批判 5. 市民社会論の検討 6. エンゲルス「起源」 7. 宇野経済学の検討 8. 剰余労働の歴史的形態 9. 「剰余価値学説史と生産的労働」 10. 労働力商品の「特殊性」をめぐって 11. 貧困化をめぐる論争史 12. 独占と価値法則 13. 信用制度とインフレーション 14. 経済学と土地所有 15. 比較経済史の検討 16. 近代経済学の検討 17. レーニン「弁証法について」 18. レーニン「カル・マルクス」</p> |

他「[座談会] 経済学を働く者の発達のために—基礎経済科学夜間通信研究科の2年間—」などにおいて、その後も基礎研(運動)の原点として議論されるとともに、立ち返り確認し、継承・発展の道をたどることになる。

基礎研が『資本論』学習サークルとして出発した経緯もあり、教育と研究の統一の実践（の提唱）は、既存の研究体制・組織に問題提起を試みることでもあった。もちろん、アカデミックの世界に外から働きかけるということではなく、学界内部においても確実に基盤をえるために、人間発達の経済学や、技術論から現代資本主義論の根幹として国独資（論争）に重点領域として乗り出していく布石も打たれた（第16、18号他）。また、既成の権威ある経済学関係の学会（日本財政学会、経済理論学会や社会政策学会）の年次大会の報告も継続して掲載されている（第11、14、18号）。書評、読書案内や新刊紹介も多く取り上げられ、経済科学文献情報などの試みもなされている。連載講座として、その後途切れたとはいえ、「『資本論』研究入門」と「『帝国主義論』研究入門」も、継続している。誌上討論が誘発されたことも特筆すべきである。最後に、国独資研究会による翻訳、R. ヒルファーディング「現代の諸問題」〔上・下〕（第16、17号）もこうした関心から生まれ出た成果である。

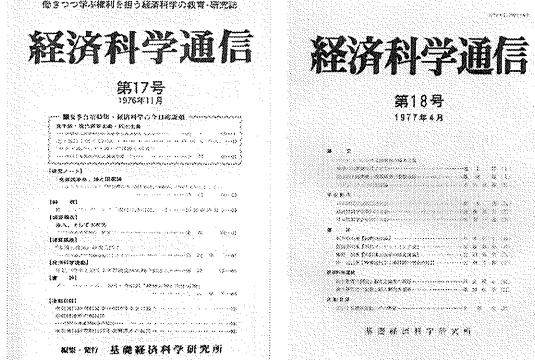
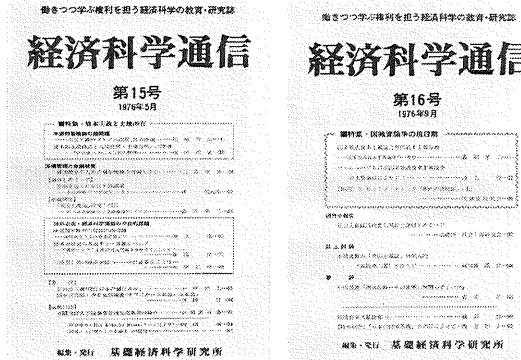
しかしこの期の特長は、このような基礎研の実践を基礎研運動と自ら称し（第17，18，20号），運動としてその展開・発展をめざしている（第15号）ことである。夜間通信大学院の経験を、総会や交流集会での議論の紹介や、到達点・現段階の確認・評価としてまとめるとともに、「基礎研だ

より」や「活動日誌」がきめ細かく掲載されている。また現代における『資本論』の学習や研究の経験交流、「ある勤労者グループの『資本論』研究：大阪支部」（第11号）と「『資本論』を読む会の1年間：都留文化大学」（第12号），婦人研究者（運動）や教育労働者との交流（第18号），教育実践報告（第20号）も掲載されている。「両大戦間世界資本主義研究会」の紹介に始まって，東京支部の活動も紹介され（第19号）て，基礎研運動が京都・大阪の関西中心からから，東京・関東へと，全国的規模に広がっていく様も見て取れる。

III 技術論、産業論から国独資論へ

この期の最初（第11号）と最後（第20号）に、インタビューが掲載されている。後者は、「林直道：今日の経済学研究と『資本論』」で、古典研究と現状分析の結合や関西勤労者教育協会副会長としての『資本論』教育の実践、などについて話題が展開されている。特集：働く者の経済学研究と資本論、の一環としても位置づけられているが、このインタビュー・シリーズは、第11号以降中断していたものを、要望も強くあり再開を決定し、その後かなり長期にわたり継続され、最終的には、基礎経済科学研究所編『戦後経済学を語る——わが青春の経済学』（かもがわ出版、1993年）として結実するものである。20名の著名な経済学者が登場するが、林は4人目であった。

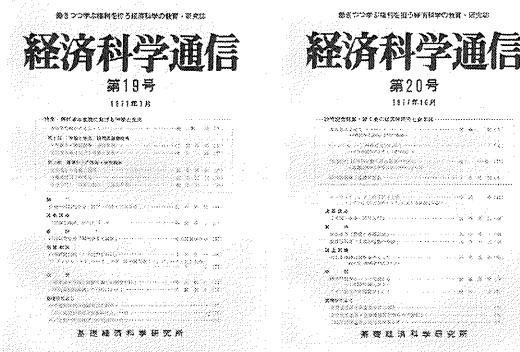
島恭彦（第5号）、見田石介（第6号）に続いて3人目として登場するのが「中村静治：工場・技術・経済学」（第11号）である。中村の登場は、



横浜国立大学にあり、対象者が関東に広がったということとともに、その経歴が学卒後正規の大学院に進むことなく、在野の研究者として活躍し、その後大学に職をえ、研究者として活躍するという、基礎研（運動）の権化とも言うべきものであることにより、とくに注目すべきである。さらに、「夜間通信大学院に賛し、老婆心から一言呈す」（第13号）の寄稿もありまつて、『通信』での科学・技術論争の盛り上がりに貢献したことも付け加えておくべきである。

基礎研が職場研究者の育成をめざし、自己の労働を研究対象として設定することの重要性を強調してきた背景からしても、産業研究を基盤にした科学・技術論から労働者研究者の参加が始まり、院生や研究職にあるものがその周辺に進出していくことは当然の成り行きであったろう。戸名直樹「資源危機における日本鉄鋼業の原料炭問題と今後の動向」〔上・中・下〕（第11、12、14号）を頂点に、林堅太郎：コメント（第15号）や誌上討論（第15、20号）に発展する。科学・技術論に関する書評・紹介や周辺の関連するトピックスも取り上げられて、「労働と生活」の一体的研究、「職場からの学習・研究報告」が地道に積み上げられていくことに、先駆的な役割を果たしたと言える。

この期には、国際的な議論の高まりもあって、『帝国主義論』研究からさらに発展して、現代資本主義研究、とくに（経済）民主主義の観点に立つ国家独占資本主義（論争）へと議論が発展する。この関連で、国家論や社会主義論、さらには土地所有論に関連した論文が存在するが、筆者の力不足ゆえに、詳細には立ち入れない。しかし、



地道な現場研究に足場を固めつつ、国際的な視野でもって最先端の論争に、日本の特質も踏まえて分析を試みようとする意気込み、勢いが感じられる。基礎研運動を主体的に担いつつ、新しい理論の構築に向けて奮闘する、若き研究者の面影が浮かび上がってくる。

IV まとめにかえて： 個人的感傷も交えて

筆者が、初めて大学に赴任したときに、最初に入学式の後の新入生歓迎行事の一環として、着任講演なるものを行う羽目になった。多くの聴衆を前に、学術的な話をする機会などなかったし、講義もまだ始まっていなかった。当然思いつく話題は、まだ院生であった時に基礎研で、夜間通信大学院で分担した「資本論・帝国主義論講義」第3講：協業とマニュファクチャをベースに、人間発達の経済学や働きつつ学ぶことの意義のはしりを語り、冷や汗ものながら、高知短期大学が夜間課程であったこともあり、かなりの共感を得たのではないかという思い出がある。こうした経験が、ある程度の余裕とゆとりを持って、文字通りの駆け出し期を終えることができたことに、大いに寄与していると実感できる。

「資本論・帝国主義論講義」で他の講師の話や、その後の受講者をえた討論を聞いたことも、代え難い経験であったように思われる。そして他の講師がレジメを準備し、仕上げていく過程に接したこと、貴重なものである。そこで身につけたやり方が今も続いているように思える。原典の大部をコピーで始めて、ハサミとノリで仕上げるやり方は、著者がその後アダム・スミスを中心に思想（史）研究に進んだこともあって、多くの場合現在も貫かれている。ただ最近は、コピーを貼り付ける代わりに、自分でワープロで打ち込んで、それを適宜編集することが増えたが、基本原則は変わっていない。

この期の、第1期生を中心とする仲間との交流は、現在も続いている。夜間研究科を巣立って、労働者から研究者へと職を変えた人も多い。その中には現在同僚として付き合う人もいる。大学院

卒業から最初の就職時において、基礎研の夜間通信大学院の運動に参加できたことは、大きな歓びであるとともに、得難い経験をさせてもらったと思っている。この期の筆者の活動が、その後の研究者としての、さらには人生の歩みにも、大きな影響を及ぼしていることを確認するとともに、出

発点として、また原点として存在していることの意味を、今回改めて感じることができた。紙上を借りて、この気持ちを伝え、感謝の意を表することをお許し願いたい。

(文中敬称略につき、非礼をお詫びする。)

(なかたに たけお 所員 京都橘女子大学)

Message

お祝いと期待

柴垣和夫

『経済科学通信』100号、おめでとう。歳月にして33年という一世代、商業誌ですら珍しい継続性と「働きつつ学ぶ」人々を読者とする編集方針に、心から敬意を表します。

考えてみると、私の学生時代や若手研究者と自認していた時代には、勤労者の世界に無数の学習サークルがあったものでした。私自身、「『資本論』の勉強会の講師を頼まれたら、引き受けることを原則」とされていた宇野弘蔵先生にならい、「学生と労働組合のサークルから講師やチューターを頼まれたら引き受けることを原則」としたものでした。その後、そうした依頼が次第に減ってきて、近年では殆どまれになり、これも年齢のせいかを感じていたのですが、いろいろ聞いてみるとどうもそうではないらしい。勤労者や市民、さらにはなんと学生の中ですら、マルクス経済学、ひろくは社会科学系のサークルは潰滅状態であるらしいのです。そういうえば、わたしも何年か講師を務めたことのある、朝日カルチャーセンター（東京）の開講科目の中から経済学あるいは日本経済や世界経済についての科目が消えたのはいつの頃からだったか……。

他方において、ひとつの考古学ブームや、宇宙への関心、最近の恐竜ブームなどを見ていると、実利を離れた人々の知的好奇心が失われてき

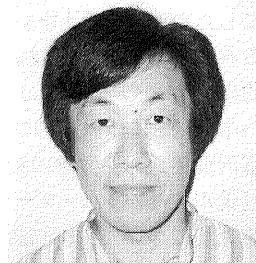
たわけではなさそうです。また老若を問わずボランティア活動が活発になってきているところを見ると、人々の社会的関心が薄くなってきたわけでもなさそうです。にもかかわらず、社会科学への関心が低下してきたのだとすると、それはいったいなぜなのか。物質的な豊かさが実現したこと、平和が長く続いたことなどが、客観的要因の一部として指摘できるかも知れません。同時に、社会科学の方にも主体的な原因があったのではないかでしょうか。日本で国際的に最高水準までに到達したマルクス経済学に自信がもてず、レギュラシオンだ、制度学派だ、進化経済学だと、相変わらず外来ものに飛びつく風潮は、そのことを示すものではないでしょうか。もちろん私は、海外の研究成果に学ぶ必要を否定しているわけではありません。その学び方が、多くの近代経済学者と同様マルクス経済学者にも、明治以来の抨撃思想に類似したものとして存在するのではないか、という気がするのです。

『経済科学通信』が、日本の社会に根を下ろした社会科学の旗印の一つとして、発展されることを期待する次第です。

(しばがき かずお 武藏大学教授、
東京大学名誉教授)

学界状況を反映した論争中心の編集

第21号～第30号



OHNISHI Hiroshi
大西 広

I はじめに

私が担当する21～30号を通読して思ったことを先に述べれば、この期間の本誌は学界に影響のある諸議論をどう「消化」し、またどう対抗するかという問題意識が強かったということである。大多数の基礎研メンバーはまだ若手で、かつ新しい議論を打ちたてようと必死になっていたのだから当然ではあるが、そのため論文や特集はクリティックを中心としたものとなっている。そのようななみずみずしさとともに、理論の荒削りさが特徴であったといえよう。それは一方で否定的な面を持ったが、研究所自体の「発達史」として見れば興味が絶えない。

II 「新しい中間層」をめぐる階級論の展開

それでは、その若々しき時代の議論はどのようなものであったのか。まず、全10号の特集タイトルを並べるとその特徴を知ることができる。すなわち、

- 21号 技術・産業論研究入門
- 22号 労働問題研究の基礎視角

- 23号 働く者の経済学研究と夜間通信研究科『講座現代経済学』の刊行をめぐって
 - 24号 独占資本主義をどうとらえるか
 - 25号 シンポジウム・現代の階級理論と労働者階級（I）
 - 26号 シンポジウム・現代の階級理論と労働者階級（II）
 - 27号 シンポジウム・現代の階級理論と労働者階級（III）
 - 28号 シンポジウム・現代の階級理論と労働者階級（完）
 - 29号 『講座現代経済学』の刊行をめぐって(2)
 - 30号 現代世界経済と日本資本主義
 - 31号 今日の経済学研究と教育
- である。したがって、25～28号で連続して組まれた特集と22号の特集を合わせ全号の半分で階級理論・労働問題が特集されていることにまず気がつく。この背景には当時、夜間通信研究科の「労農論学科」が健在であること、経済理論学会も当時2連続で階級問題を大会テーマとしたこと、またそのさらに背景には欧州における階級論の興隆があったものと考えられる。が、より背景的な状況を述べれば、先進各国の高成長期における新種のテクノクラートや新しい精神労働者群の出現、あるいは非所有の経営者層の出現をどう理解すべきかという問題状況があった。五つの特集

以外でもこの分野で他に8本の個別論文が掲載されている（公務労働論、科学技術労働論、科学労働論を含む）。

そこでまずこの25～28号の4連続の特集を問題にしたいが、この4号もまた上述のような関連する有力学説の紹介と論評から始まっている。具体的には最初の25号では成瀬龍夫氏がまず「新しい中間層」についてのフランス・マルクス主義と富沢賢治氏の「労働の社会化論」について、芦田亘氏がミリバント・プーランツアス論争の階級論的理義について、林弥富氏がギデンスによるアメリカ社会学やダニエル・ベルへの批判について紹介・論評。そして最後に二宮厚美氏が日本の「法人資本主義論」とそれへの富森虔児、宮崎義一、平田清明氏などの論評を解説している。26号はその座談会となっている。ここで細かく内容を紹介する余裕はないが、全体としての誌上論文・座談会は巷の「新中間層論」を批判し、その階層もまた労働者階級に属すること。また、あるいは旧来の労働者階級との同盟をどう形成するかが重要なことを公務労働論を念頭に展開している。

続く27号では再び「報告」がなされ、最後の28号で2度目の座談会が開催されているが、この「報告」で紹介されているのは、背景資本の企業つぶしと闘った中小企業労組の闘いとアラン・ハント編『階級と階級構造』の分析視角、それに芝田進午、有田光雄氏の公務労働論である。ここでの基調をなしている池上論文では、資本主義発展によって古い共同体が解体した結果そこで担われていた共同業務が公務労働によって担われるようになること。その労働者は国家の民主化によっ

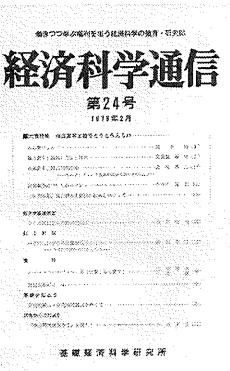
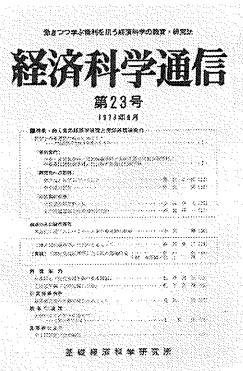
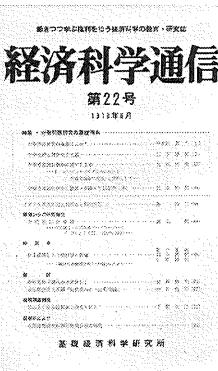
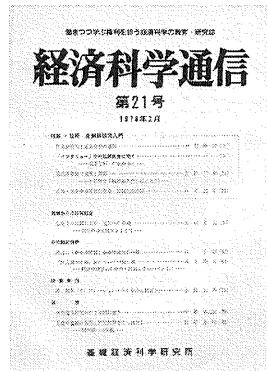
て労働者階級の同盟軍になることが主張されている。この基調は28号の座談会でも深められるが、ここでの二宮発言は池上論文と少しニュアンスを異にしている。池上論文では、共同体の解体→公務労働による代替→国家民主化の必要性となるが、二宮発言では共同体の解体=貨幣の支配→競争による住民の個別化→保守化という流れが強調されている。一方では国家をどうするかが論じられ、他方では競争をどう阻止するかが論じられている。

ただし、もちろん、この両者を鋭く対比させるべきが基本は同じものと捉えるかは判断が要るだろう。もうひとつの労働問題特集=22号では二宮氏は、企業主義批判→団結の重要性→工場法・行政財政の民主化・公務労働の意義という文脈で議論を展開している。先の池上論文と結論は近い。

なお、この領域では「法人資本主義論」をめぐる日本での議論を奥村宏氏、富森虔児氏、講座派について整理し、それらが相互補完的な連続性においてとらえられることを解説した21号の坂井論文はすぐれた論文だと感じた。特筆しておきたい。

III 独占資本主義論・ 国家独占資本主義論 に関する誌上論争

特集としては1度しかないものの、個別の論文も含めて重要な議論の領域とされていたものに独占資本主義論がある。とりわけ、特集号の24号の高須賀義博論文は大きな反響を呼び、森岡孝二



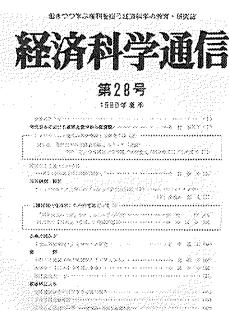
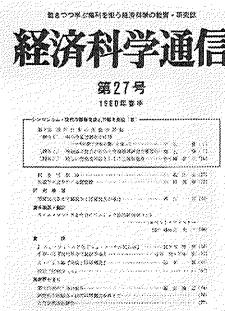
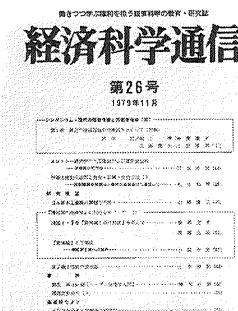
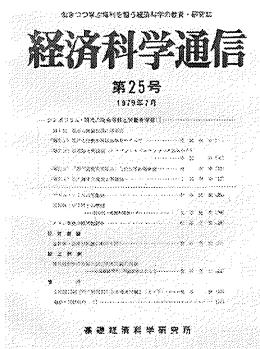
氏が25号で、重田澄男氏が29号でそれぞれ長文の反論を書いている。

この高須賀論文の問題意識は次のようなものであった。すなわち、独占資本主義が「独占」をもってその一般的特徴とするものとすると、そこでは一般的利潤率はどうなるのか。『資本論』で代表される競争、生産価格、平均利潤率の体系は『帝国主義論』の独占資本主義理解と矛盾するのではないか、というものであった。この問題意識は独占価格論を近代経済学の成果を活用して「資本主義のトータルな概念的把握」を試みる以上当然のものであると私も思う。が、この問題意識を表現するに高須賀氏はレーニンの独占資本主義理解が「特徴列挙的」であるとか『資本論』の論理と切斷されていると主張したことによって森岡、重田両氏の反発を招いている。このレーニン理解が誤っていることは重田論文で徹底的に批判されている(特に上記2者は弁証法的関係にあるとの指摘は見田派の私としても大賛成である)。しかし、その上で反論の両氏に対して私が思うのは、高須賀氏による現代経済学的な独占モデルの構築の試みに対する評価の低さである。特に森岡論文はそうであるが、近代経済学の活用やモデル化は否定されている。現在ではマルクス側の独占理論や国独資理論は事実上死滅しているが、その責任の一端がこの分野の研究者にあったのではないだろうか。投機利得を中心に独占価格論を構築しヒルファーディング批判を行なった特集号の森岡論文にも残念ながら同じ疑問を感じた。投機利得による「利潤」を資本論に言う「利潤」と矛盾なく説明する(或いはその発展として理解する)にはどのような理解が必要か。そのような問題関心

はヒルファーディングの方があるよう感じられた(同様の疑問は森岡氏の単著への鶴田満彦氏の書評[29号掲載]でも述べられている)。また、20年後の現在、社会の投機化が進行する一方で規制緩和と競争の激化が価格破壊を生んでいる。大企業の発展と政府との癒着(『帝国主義論』が「独占」を論ずる趣旨はこの範囲のものではないか)はますます認められるがこの時代の独占価格論はその多くが現代に通用しなくなっている。

もうひとつ、この分野はどうしても論争的となるのか、他誌に掲載の小松善雄氏の論文を本誌27号で芦田氏が批判。それへの反論が30号で掲載されて、レーニンの国家独占概念を国家専売・国営企業等の独自のウクライナと捉えるのか国家=独占の癒着の社会体制と捉えるのかが争われている。私としては「国家独占」に関わる「国家資本主義」の概念をソ連・東欧体制の定義として使用しているので「体制概念」との芦田説に近い(主要なウクライナをもって体制概念を形成することを承認するから)が、他方で「国家独占」を前独占段階にも拡張する小松氏の主張には賛成しうる。ただし、両者とも旧「社会主义」の体制把握としての関心をお持ちでないことは残念である。

なお、この分野と関わってどうしても言っておきたいことは、現在道路公団や石油公団等を巡って争われている官僚制批判の論点である。先の芦田論文による紹介では、池上論理ではこうした官僚制批判の論点が正確に提出され、またレーニンがドイツの電力専売に反対したことが述べられている。今こそこうした視角からの官僚制批判が求められていると思うが、現在研究所内ではあまり



見られない。良き伝統の断絶を残念に思う。

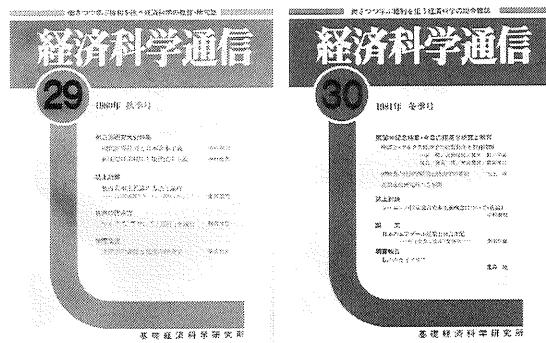
IV 技術論・産業論の課題

他方、技術論・産業論の分野では21号で特集がされているが、巻頭言を書いている中村静治氏の議論は好意的に受け止められている。従来のマルクス経済学に欠けていた生産力＝技術の視点を産業レベル、マクロレベルの研究に昇華させた方法論の斬新さがその理由である。中村氏はこの巻頭言でも技術論と産業論の関係を問うた編集部の問い合わせに「技術論の応用学が産業論」との明快な回答で氏の技術＝生産力重視の立場を明確にされている。

そうした基本的なスタンスの上に組まれたこの特集で、吉田論文と戸名論文は共に技術論・産業論の課題を論じている。吉田氏は中村氏の近著『技術論入門』を基礎に今後の課題として巨大装置産業や先端産業、労務管理技術、資源・エネルギー問題、技術進歩率の測定問題があることを指摘し、戸名氏は資源浪費など生産力破壊の問題があること、富山和夫氏や有沢広巳氏などの産業論批判とともに近代経済学の批判的摂取が必要なことなどを指摘している。大きく言えばこの両氏の問題意識はほぼ同じで、1980年に出された吉田氏の著書に対する戸名氏の書評（北条豊で執筆、30号掲載）でもそのことは確認できる。ただし、敢えて両者の相違を強調すれば戸名氏の富山和夫氏や有沢広巳氏などへの批判にあるように戸名氏の視点は中村・吉田の両氏より生産関係視点に重点が寄っていようか。なお、関連して戸名氏は26

号でエコロジー経済学をその反「工業」主義や反「科学」主義の性格を指摘して厳しく批判している。ソ連・東欧の崩壊後、新種の理論に安易に乗換える「マルクス経済学者」が多い昨今、省みられなければならない論文のひとつである。

また、中村技術論の現代資本主義論レベルへの展開は1980年の研究大会での報告を受けた29号の論文——この論文は主に講座派理論との論争点を全面展開した大論文となっている——でも読むことができる。講座派理論では産業に着目して戦前＝織維工業段階、戦後＝重化学工業段階、66年以降＝原子・電子・宇宙工業段階と段階区分されるところを、中村氏は労働手段に着目した機械段階、オートメ段階との区分を主張している。この根拠は、講座派の産業分類はマルクス再生産表式の2部門分類と異なっておりむしろ中村氏の「生産手段」への関心の集中の方が再生産表式に近いこと、マルクスは当時における新生産物の登場よりも労働手段の発達の方を「大工業論」で重視したことなどとして理解されている。また、講座派の戦前戦後断続論を「生産力の連続性」から批判したり、急速な技術革新を見ないことによる日本資本主義危機論を批判したり、過大な軍需支出による生産力破壊としてアメリカ資本主義の衰退を説いたり、そのアメリカの帝国主義的再生戦略が途上国への核拡散の可能性を高めたりといったクリアで説得力のある議論を展開している。とても22年前の論文とは思えない新鮮さでこの論文を読んだ。中村氏はこの論文でも旧「社会主义」への幻想を棄てよと主張しており、それが十年後のソ連・東欧の崩壊後もますます元気に著作を続けられた原因と理解できる。読者には是非再読をお願いしたい。



V 『講座 現代経済学』 と芝田理論評価

以上は主に研究所外の諸議論を論評・批判するというものであるが、そうではなく自ら世に問うた書物を研究所外から討論してもらおうとしたこともあった。実質的に研究所の編集になる『講座 現代経済学』（島恭彦監修、青木書店、全6

巻)を巡る3回の特集である。が、率直に言ってその第一回は座談会に参加の部外の二氏は『講座』への期待を述べたに過ぎず、第2回での服部文男・黒滝正昭両氏の講座第Ⅲ巻への酷評に曲がりなりにも誌上で対応したのは28号の藤岡論文しかない。他者を論ずることには慣れていても他者に論じられるのには慣れていなかったようである。

ただし、それでもこの藤岡論文も服部・黒滝両氏の『講座』藤岡担当章批判に対する真正面からの反論にはなっていない。両氏の批判は藤岡担当章の生産力水準への関心の低さを衝くものであったが、藤岡論文では芝田進午氏の人間発達論への氏の理解を示すことで「反論」に代えている。すなわち、芝田発達論は大工業という生産力は発達促進的だが、その生産関係が発達を阻害していると説く。しかし、実は逆ではないか。階級闘争による生産関係の転換が発達を保障する、と述べている。氏の現在の反生産力主義=生産関係主義はすでにこの時期に成立している。

関連して述べておきたいのは、この芝田理論は「もうひとつの発達論」であるがために誌上でも様々に取り上げられている。23号では好意的な書評が、26号の小森論文では「工場法が発達論にない」との批判が、そして15、20、24号で展開された鈴木章二氏と戸名氏の論争はこの芝田氏の科学・技術労働の評価をめぐるものであった。鈴木・戸名論争の大半は私の担当の外にあるので内容は省略するが、科学・技術労働の理解にとって非常によい諸論文となっている。

VI 総 評

上記の他にも特集や個別論文で経済学教育について、研究所の夜間通信研究科について、経済

史・地域論・統計学・会計学について(さらに変わったものではイラン革命論について)の興味あるものがあったが、もはや紙数の関係で省略せざるを得ない。代わって全体を通じた感想を述べたい。

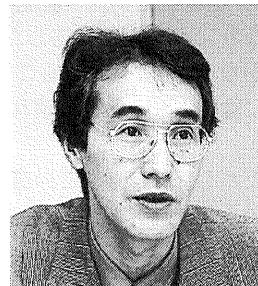
それはまず論争の多さである。その理由の一端は研究所が先行する諸議論の「胸を借りる」という形で研究を進めて来たことにあるが、それと同時に学術界全体にも論文の書き方に大きな変化があったのではないかと思う。たとえば、近代経済学の中でもケインズ派や新古典派、収穫率を遞増とする学派と递減とする学派など根本原理の異なる学派が並存しているが、それらは今や互いに論争することはない。それぞれが独自に研究成果を出し勝敗はそのどちらの追随者が多いかで決まっている。以前は論争によって決着をつけようとの態度が基本で論争が絶えなかったが、現在の勝負のつけ方は異なっている。そして、それと同じ変化がわれわれにも生じたのではないだろうか。あるいは、この学界のあり方の変化の中で例えば国独資論の追随者が消滅し、結果として学術的な敗北となってしまったように思われる。

私見ではこの変化は否定的な側面と肯定的な側面を持っている。否定的な側面は論争が絶えることでギリギリの厳密さを競うことがなくなったこと、肯定的な側面は研究が実証的となりイデオロギー的(ないし感情的)な論争でなくなったことである。この後者の肯定的な側面のおかげで今や私は研究所員として近代経済学を研究することが許されるようになった。がしかし、否定的な側面のためにそうした研究を無視されているようにも感じことがある。否定的な側面をなるべく排する方向で今後の本誌のあり方も検討する必要があろう。

(おおにし ひろし 所員 京都大学)

共同研究と 編集のメッセージ性

第31号～第40号



AKAMA Michio
赤間 道夫

I はじめに

筆者はちょうどこの時期の後半、基礎研創立15周年（83年11月）記念事業の事務局を担当した。『経済科学通信』（以下『通信』と略記）を通読するかぎりでは、この15周年記念事業の詳細は見えてこない。思い返すと、『通信』とはべつにさまざまな印刷物が刊行されていたから（夜間通信研究科年報『労働と研究』[78年3月創刊、83年3月段階で第6号まで刊行]、創立15周年記念事業として作成された『基礎研15年のあゆみ』など）、『通信』とは相互に補いあっていったと理解される。基礎研が名実ともに研究所として自立し、研究成果がぞくぞくあらわれ、それらとの相乗作用によって、『通信』に彩りを添えたという意味においては、本稿が対象とする『通信』は、100号の歴史のなかでは充実した10号だった。81年5月には学術刊行物として認可され、定期購読料を100円値下げするという断行もあった。

本稿の対象となる『通信』は、1981年5月（第31号）から1983年11月（第40号）までである。この時期は、基礎研創立15周年をむかえ、研究所としての体制をひととおり整備し、編集体制や事務局体制の強化をうちだすとともに、それまで蓄積された研究を出版プロジェクトとして世に問

うた最初の時期でもある。

編集体制と事務局体制については、基礎研の歴史にとっても特筆すべきことがこの時期に試みられた。編集局に専従（第31号、81年5月刊から具体化）をおき、編集体制の強化がはかられたことと事務局専従2名体制（82年7月から83年11月）である。これらはいずれも基礎研としての取り組みのなかでは先駆的であり、本稿の指摘とはべつに研究所の歴史のなかで明確に総括されることがらではあろう。また、第37号（82年12月）より、「『経済科学通信』読者ニュース」が刊行され、同号から折り込みがはじまっている（最終号、つまりいつまで続いたかについては未確認）。

II 「講座・現代経済学」と 「人間発達の経済学」

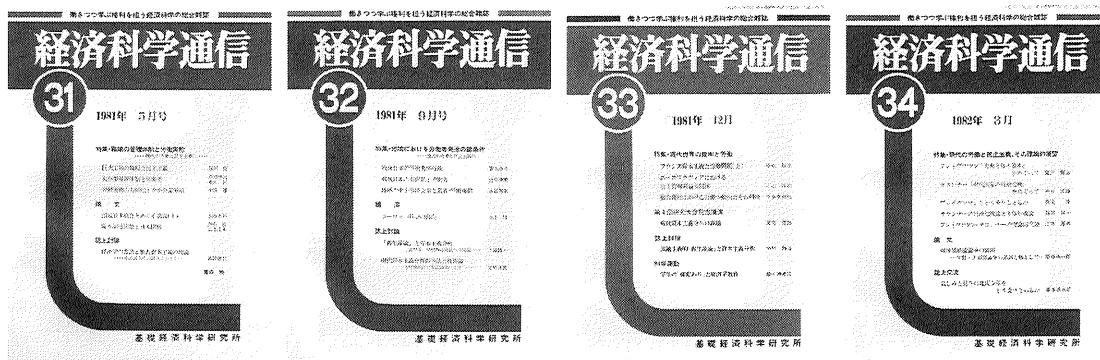
この時期、基礎研の名を冠してふたつの出版物が編集=刊行された（ちなみに、基礎研の名を冠した書物はこれがはじめてではない）。『現代日本経済入門』（汐文社、1972年）、『日本の経済危機』（労働経済社、1976年および『資本論・帝国主義論年表』（基礎研、1977年）はすでに基礎研編である）。78年に刊行がはじまり、82年に完結した『講座・現代経済学』と『人間発達の経済学』（82年）である。「発達の経済学」研究プロジェクト

の開始からすると、両者とも数年におよぶ共同研究の成果である。「労働と生活、日本の現実に根ざした現代経済学の創造的体系化をめざす意欲的な講座」(第34号〔82年3月〕の青木書店の広告より)として、また、「人間の発達の問題を真正面にすえて、体系的に、しかもやさしく具体的に叙述された、新しいタイプの現代経済学入門!」(第37号〔82年12月〕の青木書店の広告より)として、それぞれ基礎研の総力をあげて取り組んだ企画であった。『通信』は当然このふたつの刊行物を意識して編集されている。

第一に、第32号(81年9月)以降の「誌上討論」(これについては後述)への昇華。既発行『通信』掲載稿と『講座・現代経済学』(とくに第5巻)を契機として、編集方針として論争を積極的に喚起しようという姿勢があった。第32号(大島雄一「『再生産論』と資本主義分析」、北村洋基「現代資本主義分析の方法と技術論」)はじめ、第33号(81年12月)(中村静治「流通主義的『再生産論』と資本主義分析」)、第35号(82年7月)(梅垣邦胤「基礎研の『資本論』研究をめぐって(上)」、大島「『再生産論』と再版生産力説」)、第37号(梅垣「基礎研の『資本論』研究をめぐって(下)」)および第38号(83年4月)(高木彰「『再生産論の具体化』と再生産論」)は、当初「好評」(第33号「編集後記」)とされ、かつ、「今日の資本主義を理解する上できわめて重要」(同、「編集局より」)とされながら、「何か感情的」(第36号〔82年9月〕「読者のひろば」)などという声も聞かれ、「誌上討論」それ自体に否定的意見が多くなった。基礎研の出版物(誌)、学界での重要論点および一線の研究者と連結させたことで、筆者

はこの「誌上討論」の企画と進捗をむしろ評価している。鶴田満彦「現代日本資本主義分析の方法」(第36号)は、「第5回研究大会特集」として編集されているが、内容と脈絡から「誌上討論」と位置づけたほうがいいだろう。

第二に、ふたつの出版と連携した大型企画。第35号「座談会・日本経済分析と労働者発達の諸条件—『講座・現代経済学』全六巻完結を記念して—」(池上惇・上野俊樹・宇多真揆也・小野秀生・桜井香・戸木田嘉久・森岡孝二)は、『講座・現代経済学』第6巻の執筆者(池上、小野)、当時刊行中の岩波書店「現代資本主義分析シリーズ」の執筆者(戸木田)、労働者研究者(宇多)、書店(桜井)、基礎研・編集局(上野、森岡)と多彩なメンバーによる企画である。『講座・現代経済学』全六巻の特色、発達の経済学についてまとめられ、この講座が企画した内容が出席者の観点から述べられ、きわめて有益である。同様に、第40号(83年11月)は、小特集「『人間発達の経済学』をめぐって」を組み(北見地域・基礎経済科学研究会「『人間発達の経済学』を読んで」、今井幸二「『人間発達の経済学』の内容紹介」)、それぞれ基礎研に關係する団体による読者会や一所員としての感想が率直に表明されている(『人間発達の経済学』については、京都と大阪で3回連続の公開講座および公開討論会(83年1月)が企画された。後者については藤岡惇「『人間発達の経済学』公開討論会の報告」としてまとめられ、あわせて前者には100名を超える参加者があったことが記されている)。この時期の基礎研のふたつの成果物に関連した『通信』の内容からは、すくなくとも同等の位置づけで取り扱ったとは言い



難い印象をもつ。

第三に、特集の企画への発展。『講座・現代経済学』の刊行を直接の契機として、第37号より「日本経済分析の基本課題」がはじまり、「現代日本の技術進歩と人間発達」(第37号)、「現代日本の官僚機構」(第38号)および「現代日本の労働者と中間層」(第40号)とつづく。『講座・現代経済学』第6巻「現代日本経済論」を受けた、日本経済を分析するにあたっての現実的課題を明確にしようとするものである。もちろん、特集自体は、階級理論→「現代の労働と民主主義」(第31号「職場の管理体制と労働実態」、第32号「地域における労働者発達の諸条件」、第33号「現代世界の資本と労働」および第34号「現代の労働と民主主義、その理論的展望」)を継承した企画であり、現実の日本経済を分析し、民主主義の延長に人間発達と将来社会を展望する意図がくっきり浮かびあがる。

このように、この時期の『通信』の第一の特徴は、ふたつの出版物と関連させ、意識的に特集や誌面構成を考慮していたことにある。あわせて現代資本主義研究会が所内に組織されたのもこの時期であったことを付言しておこう。

III 科学運動論・労働者教育論・経済学教育論

第二の特徴として、科学運動論・労働者教育論・経済学教育論にかかるコーナーが常設されていたことである。第31号(岡宏一「ささやかな経験」、事務局「夜間通信研究科81年春期合宿



の報告」)、第32号(松崎直敏「地域と生きがい」、橋孝「ひろし君、ガンバレ!!」)、第33号(柳ヶ瀬孝三「学生の『様変わり』と経済学教育」、中谷武雄「教科としての経済学史」)、第35号(小森治夫「働きつつ学ぶ私の経験」)、第36号(沢居紀充「図書館と大学教育」、塚谷静司「研究者の権利と共同研究のあり方」)、第37号(掛章孝「第2回中小商工業全国交流・研究集会ルポ」)および第38号(米田康彦「経済学教育をめぐる研究・討論集会」(第2回)の報告)にみられるように、学ぶ意義や教育のあり方を経済学の視点から考えようとした。とくに、経済学教育については、経済学教育学会の創設に結実したこと考慮すると、基礎研と『通信』が果たした役割の大きさをあらためて実感する。

なお、基礎研として経済学教育学会の結成を文書にしたのは、早くも74年(「夜間通信大学院設立にあたってのお願い」)であった(桜井香「講座・現代経済学の完結によせて」第35号、参照)。

IV 研究大会との連携

第三の特徴は、研究大会との関係である。第33号(第4回研究大会記念講演・置塩信雄「現代資本主義分析の課題」)、第36号(第5回研究大会特集、鶴田「現代日本資本主義分析の方法」、安満弁吉「繊維産業における生産・流通機構」、江尻彰「日本農業の変革と地域農業」および土居英二「現代日本の社会的分業=具体的有用労働の編成と階級階層構成」)および第40号(第6回研究大会記念講演・芝田進午「労働者階級論の問題点

と課題」)がそれである。記念講演を焦点に、さらに年間特集にあわせた誌面構成は、基礎研のメイン・イベントを誌面に反映させるという意味ではたしかにこの時期に確立されたといえるだろう。

V マルクス没後100年をめぐって

1983年はマルクス没後100年であった。基礎研は、この年の初め、マルクス没後100年記念シンポジウム「マルクスの現代的再生めざして—歴史認識と社会変革」を開催した。第39号では、このシンポの記念講演(重田澄男「マルクスにおける歴史認識と社会変革」)と二つの報告(森岡孝二「労働日の制限・短縮と人間の発達」、藤岡惇「民衆発達の経済史を求めて」)を掲載し、あわせて「私の生活とマルクス」に4本(安満「迷った時は基本に帰ろう」、森本載般「マルクスと私と基礎研と」、田中秀幸「マルクスのコミュニケーション認識に新たな光を」および山田昇「『フランスにおける内乱』と革新自治体」)、「マルクス理論と現代」に5本(伍賀一道「現代資本主義と相対的過剰人口論」、鶴田廣巳「フランス『三部作』と資本主義国家論」、中原優「労働運動発展の展望とマルクス」、内山哲朗「マルクスの賃労働概念と変革主体」および寺西俊一「環境危機とマルクス主義」)、さらに「マルクス没後百年をめぐる他誌の動向」(江尻・竹味能成)を配した。

特集にあたっての巻頭言で明言しているように、「万国のプロレタリアは団結しなかった」、「労働者は革命に起ちあがらなかった」、「資本主義は崩壊しなかった」、「資本主義は高度成長を遂げた」、「先進国に革命は起きていない」などとするマルクスおよびマルクス主義をあげつらう特集とは対極にある編成であった。「現代的再生」はことさらに新しい言葉ではないが、硬軟とりまぜた『通信』の構成は、実践的問題関心からするマルクスの現代における生かし方を追求した点で、あまた特集されたマルクス論のなかで光彩を放っていた。

当時、『思想』の特集において「再生か葬送か」のテーマがあった。二者択一でマルクスを語るほ

ど簡単ではありえないものの、『通信』で触れられた論点においてマルクスの「再生」を語るもの無理なはずである。基礎研らしいマルクス論と同時に基礎研のマルクス論の限界をみる思いがする。

筆者は、当時このシンポジウムに参加し、本号に「討論のまとめ」を書いている。「討論の内容は、史的唯物論、発達論、主体形成論にわたっており、なかでも発達論、主体形成論に討論の比重がおかれたことからすれば、『講座・現代経済学』、『人間発達の経済学』に結実した基礎研の共同研究の成果を踏まえてのシンポジウムであったと確認できるだろう」(39ページ)。

83年の年間共同研究テーマを「マルクスの現代的再生と人間発達の経済学」とし、その第1弾の取り組みがこのシンポおよび特集だった。「人間発達の経済学」に論点を絞り、深めるためのマルクス特集と読むなら、この特集はまさに基礎研らしい企画であった。

VI 『通信』の俯瞰

この時期の特集、論文(誌上討論、記念講演など含む)およびその他(特集と論文以外)の数をカウントすると以下のようになる。

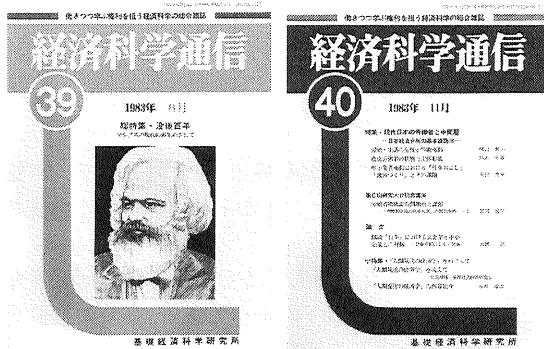
| | 特集 | 論文 | その他 |
|------|----|----|-----|
| 第31号 | 3 | 3 | 5 |
| 第32号 | 3 | 5 | 2 |
| 第33号 | 3 | 2 | 4 |
| 第34号 | 5 | 2 | 2 |
| 第35号 | 1 | 4 | 5 |
| 第36号 | 4 | 2 | 6 |
| 第37号 | 4 | 3 | 3 |
| 第38号 | 4 | 3 | 5 |
| 第39号 | 13 | | 1 |
| 第40号 | 3 | 4 | 6 |

マルクス没後特集の第39号を別として、本誌はこれら三つのジャンルからバランスよく構成されている。

また、基礎研を特徴づけている労働者研究者の数を抽出すると以下のようである(筆者の推測を含みかならずしも正確ではない)。

| | | | |
|------|---|------|---|
| 第31号 | 3 | 第36号 | 3 |
| 第32号 | 3 | 第37号 | 2 |
| 第33号 | 1 | 第38号 | 6 |
| 第34号 | 2 | 第39号 | 5 |
| 第35号 | 3 | 第40号 | 4 |

すくなくとも1名は、なんらかのかたちで執筆しており、『通信』は労働者研究者の研究（意見）発表の場になっているといえるだろう。アカデミックな研究論文だけではなく、誌面充実に欠かせないさまざまな情報交流も労働者研究者からもたらされており、『通信』らしさの一端を示している。編集局としてこの面での意識的追求の努力の跡がうかがわれる。前記「読者ニュース」第1号によれば、「最近31号から36号まででは、執筆者の構成は、教員37名(60%)、労働者15名(25%)、大学院生他9名(15%)」、「なかでも、教員、労働者の誌上参加者が多様化してきたことに大きな特徴が見られ」(2ページ)ることを指摘していた。「働きつつ学ぶ」運動体=基礎研の多様な組織的特徴を、特集はじめ『通信』の誌面構成に生かそうとする姿勢は、理論と実証の応答を志向したものとして評価できる。執筆者の顔ぶれも、「多様化」しており、特定の個人が孤軍奮闘する姿とは対極にある。いくつかの共同研究（第35号に、「現代資本主義研究会の発足について」の記事があり、詳しい「設立趣意書」も掲載されている）がはじまつたこともあり、豊富な研究者（およびその予備軍）の層の存在をうかがわせるに充分である。じっさい、うえの文書では、共同研究を進め、組織化と統合化の中核としてふたつの部会（経済理論部会と日本資本主義部会）を設けること、『講座・現代経済学』の中長期プロジェクトと



して『基礎経済科学全書』を刊行すること、基礎研として研究会を組織することが謳われていた。『日本資本主義発達史講座』刊行50周年を意識しながら、「新たな理論的、思想的な高みを築こう」としたものであった。基礎研内外で共同研究を追求しようとする試みはすくなくともこの時期の『通信』の特徴である。

情報化社会論については、特集「日本経済分析の基本課題」（第37号、第38号および第40号）のもと最初の企画としてとりあげられている。おりからトフラー『第三の波』（邦訳1980年）と通産省（当時）の答申『豊かな情報化社会への道標』の刊行があり、情報化社会論の批判的検討と展望をしめす必要があった。この時期の『通信』では、第37号の特集が唯一のものである。もちろん、ネットワークの出現と普及はいますこし後のことであったから、もっぱら議論は技術論の立場からオートメーションの位置づけやコンピュータ労働論（労働編成と人間発達）に集中していた。世界大に広がる今日のネットワーク（情報端末もふくめて）やパーソナル・コンピュータ論の観点から『通信』における論点を摘出する作業はまだ果たされてはいない。

「誌上討論」については触れたが、そのなかで、梅垣「基礎研の『資本論』研究をめぐって（上）」（第35号）は、『通信』と『講座・現代経済学』などで公表された基礎研の『資本論』研究をフォローした論文である。貧困化論、全面発達と統治能力、家族、共同体、精神労働論、教育と文化的力量および集団的統治能力論などいくつかのキーワードを摘出していて有益である。

数少ない理論研究としては、関根猪一郎「戦後価値論論争の展開」（第34号）および同「価値論論争の現局面と今後の課題」（第37号）がある。理論研究において価値論研究がすくなくとも80年代はじめまでは、『通信』もその舞台となっていたという貴重な記録である。

第40号に、「基礎経済科学研究所創立15周年—懸賞論文募集」（筆者が起案した記憶がある）が掲載されている。それによると基礎研は、(1)憲法をくらしに生かす運動、(2)労働者と知識人の同盟の思想、(3)『資本論』学習の伝統、を三つの源泉とし、労働者研究者の養成および民主主義的

共同研究による経済科学の創造的発展と普及を追求してきた、とある。この時期からさらに20年、創立からは35年を迎えるとする基礎研にとって、『通信』100号は区切りの時期であること以上に、これら労働者研究者の養成と経済科学の創造をどこまでやりとげたのだろうか。

いま、あらためてこの時期の『通信』を眺めてみると、年間特集計画にもとづいて編集されていたことがよくわかる。第35号、第36号および第39号も、それぞれ『講座・現代経済学』、研究大会およびマルクス没後100年を特集していたから、編集の意図は明瞭である。『通信』をとおして、読者とともに何を考えたいのか、何を重要だと考えているのか。編集のメッセージ性は濃厚で

あり、かつ読者にわかりやすい。『通信』100号という歴史からすると前期に位置するこの時期は、基礎研の息づかいがそのまま伝わってくるとひとまず総括することが許されよう。

末尾に

第38号の青木書店の広告には、幻の企画となった基礎研編『資本論・帝国主義論対照 経済学総合年表』の予告（「読む」「引く」自在の画期的新機軸）がみえる。予定ではこの時期に刊行されていたのだったと『通信』の回顧とともに懐かしく思いだされたことを最後に記しておく。

（あかま みちお 所員 愛媛大学）

Message

3つの課題

菊本義治

私個人が関心を持ち、かつ基礎研の皆さんに是非とも明らかにしてもらいたい課題が三つあります。

第1は、多くの人が共鳴されるかと思いますが、グローバリズムの問題です。アメリカングローバリズムを機軸にして、ヨーロッパとアジアの対抗軸としてのグローバリズム、それから被害を受けたり排除されるものの抵抗軸、これらがどのように展開していくのか、日本はどの軸を選択するのか、行きつく先として世界連邦は実現するのか否か。

第2に、日本経済の構造改革の主体的担い手がどのように形成されるのかです。私見では、落ちぶれたとはいえ、日本の経済力は世界有数です。しかしこれからは、高度経済成長に運命をゆだねるのではなく、低成長成熟経済の中で安全に安心して暮らせる経済をつくりあげなければなりません。そうでなければ、本当に日本経済は陥没してしまいます。生活重視の経済をつくるためには、雇用を保障し賃金を上げ福祉を充実させることです。これは、間違いない（と思われる）結

論ですが、問題はどうすればできるかです。どこかの企業がそうすれば、その企業が必ずぶれます。個別企業からすれば解雇・賃下げ・福祉削減は「合理的」です。だが、これをみんなが行なえば日本経済は破綻です。みんなでやれば怖くない（うまくいく）のですが、できない。まさに囚人のジレンマです。

第3に労働市場の変容に关心があります。労働需要に関して経済学、とくに近代経済学は1年契約を想定し、そのもとで利潤最大化によって労働需要量を決定していました。しかし、労働は長期雇用とパート労働に分かれます。だからこそ企業はリストラを行い、長期雇用をパート労働に変えているのです。また、中途採用労働も増えています。さらに、労働供給に関しても産業構造の変化、年金と引退、人口・年齢構成、性別就業構造、ワークシェアなどの問題を考える必要があります。

以上のような問題について掘り下げていただきたいと思っています。

（きくもと よしはる 神戸商科大学教授）

「構造転換」の分析を通じて新たな理論構築へ

第41号～第50号



YOKOYAMA Toshikazu

横山 寿一

はじめに

41号から50号は、下記の特集タイトルでもわかるように、「構造転換」がほぼ全号で取り上げられており、『通信』としてはかつてないほど長期にわたって同一のテーマを掲げたことになる。研究所としても、1984年度は年間研究テーマに「現代資本主義の構造転換と人間発達」を掲げ、『講座・現代経済学』に次ぐ新たな講座として『講座・構造転換』の準備を進めていった時期であり、文字通り「構造転換」を軸に共同研究の新たな発展に取り組んだ時期である。それだけに多くの意欲作、骨太の論文が数多く登場しており、紙面に活気があふれている。私にとっても、44号以降は編集委員として関わった号であり、思い出に残るものばかりである。そのなかには、第46号の「大誤植事件」といった苦い経験も含んでいるが、オーバードクターの辛い時期に、あまり落ち込まないで意欲をもって研究できたのは、編集作業を通じて多くの議論に参加でき活力をもらうことができたおかげだと今でも感謝している。

I 特集の編集と概要

上記のとおり、この間の中心テーマは「構造転換」である。まず特集のタイトルおよび関連の座談会等を一通り掲げてみよう。

- 第41号 日本経済の国際関係
- 第42号 現代の構造転換を考える（情報化のもとでの構造転換の意味するもの）
- 第43号 現代の消費構造の転換
- 第44号 現代の労働と情報化
- 第45号 今日の「構造転換」と経済学の課題
- 第46号 「構造転換」のなかでの労働時間問題
- 第47号 日本経済の「構造転換」と「国際化」
- 第48号 地域・産業の「構造転換」
- 第49号 「金融革命」と国民生活
- 第50号 経済学の革新

第41号は、第37号から4回にわたって取り組まれた特集「日本経済分析の基本課題」の最後を締めくくる号である。「現代の構造転換を考える」が特集として組まれたのは、第42号から第45号までである。しかし、46号以降も、タイトルでわかるように、「構造転換」の分析を深めることを基本に編集されており、実質的には連続したものとなっている。第41号も、前特集の最後ではあるが、これまた内容的には、以後の「構造転換」

分析の事実上の出発点となっている。第50号は「記念号」として編まれており特別な位置にあるが、プラザ合意以後の急激な円高を取り上げた第1部は、「構造転換」の最新局面の分析であるし、第3部は「現代社会の「構造転換」と労働者意識」とのタイトルにあるように、「構造転換」分析そのものである。全ての号で「構造転換」という同一テーマが掲げられていると冒頭に記したのは、以上のような私の勝手な整理をもとにしている。

II 「構造転換」の経済分析

第41号以降に構造転換として取り上げられた具体的な課題は、日本経済の国際関係、情報化、消費構造、情報化と労働、労働時間、国際化、地域・産業、金融など広範囲に及び、文字通り日本経済の総合分析としての作業になっている。加えて、第42号からは、「巻頭言特集」と題して、各分野からの発言が寄せられており、そこには経済学以外にも、哲学、教育、地方自治、家族・福祉、労働組合、まちづくりなどに関わる内容も含まれている。したがって、経済分析にとどまらず社会・経済分析としての広がりを備えているといつても過言ではない。

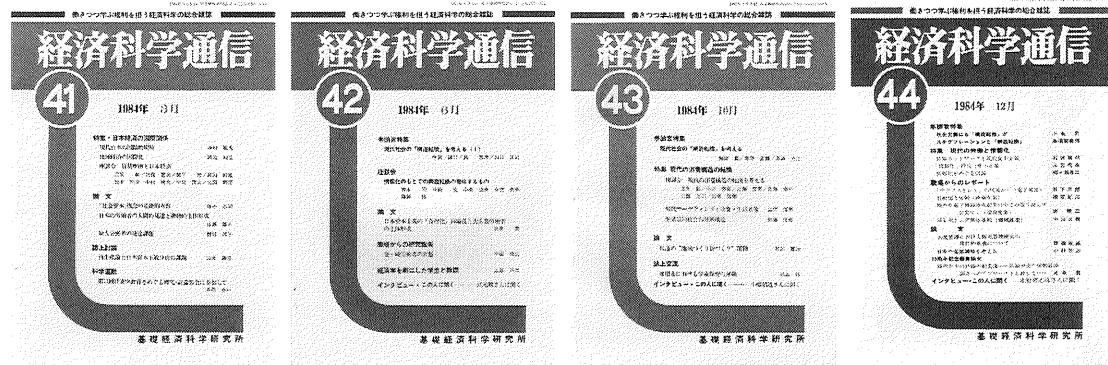
さて、問題が広範囲になればなるほど、「構造転換」として何を共通に念頭において論じているか、多面的な分析を通して「構造転換」の本質がどのようなものとして析出されているかが問われることになるが、その点はどうか。正直なところ、その点での整理は必ずしもクリアではなく、問題が拡散したまま集約しきれていないという印

象である。編集部は、第42号の座談会の冒頭で世界資本主義の構造的な危機とそれへの対応として現われてきた戦後の貿易構造、金融財政構造、産業構造、生産力構造と雇用構造、地域生活と家計構造の大規模な転換であり、その特徴は情報化と多国籍企業化と核軍事化であると整理し、独占資本による構造転換と国民による民主的な構造転換との対立が鮮明になる時代として位置付け、一応の基本線は示していたが、個々の議論では、どの構造のいかなる転換かという点では相当に幅がある。また、「構造転換」のいわば「二つの道」と関連して、編集部が言うところの「民主的な構造転換」を資本主義そのものの転換、あるいは社会変革として位置付けてそのことをもっぱら「構造転換」として捉える議論が登場していることも「幅」を意識させる一因になっているように思われる。

そうはいっても、冒頭で触れたように、この特集関連の論文には、意欲作、「注目作」が数多く存在するし、特集としても貴重なものが少なくない。「誌面批評」も参考にしながら、いくつかのテーマと論文について取り上げてみよう。

①日本資本主義分析の視点

第41号の中村雅秀論文は、日本経済分析の基本視点を『帝国主義論』の論理再発見および現代帝国主義の歴史的諸条件とその変化の解明を通して確立することを課題とし、主体形成論を欠落させた議論、現代帝国主義論なき日本資本主義論、日本資本主義論なき日本資本主義論の批判を通じてその論理を示す文字通りの意欲作である。この議論は、基礎研の『帝国主義論』研究および日本



資本主義研究の当時のひとつの到達点を示すものといつてもよいが、残念ながら、その後の構造転換の議論のなかでは、ほとんど触れられていない。なお、『帝国主義論』を今日の段階であらためてどのように評価するか、中村論文をどのように評価するか、議論が求められよう。

②構造転換と地域経済分析

同じ41号の岡田知弘論文は、地域経済の国際化について、日本国内の後進地域による外資系企業誘致およびその逆の動きとしての海外進出の両面からその実態を分析したもので、その後の各号でも幾人かの論者が積極的に評価しているように、構造転換のもとでの地域経済分析に貴重な示唆を提供した意欲作である。この分析は、第47号の佐々木雅幸論文「テクノポリスと地域経済の国際化」、第48号の重森暁論文「地域経済の構造転換と四全総」、寺西俊一論文「国際化・情報化と東京圏再編成」などとともに、基礎研の地域経済分析の水準の高さを示すものといえる。

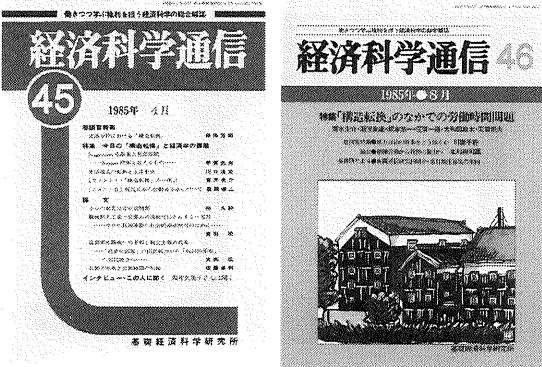
なお、この二つの論文に座談会を加えた41号の特集については、43号で坂井昭夫氏から「特集の特集としての集積の意味を失わせ、読者を欲求不満に陥れる」との厳しい誌面批評が寄せられた。44号から編集委員に加わることになっていただけに、少なからず衝撃を受けたことを覚えている。

③情報化と労働

42号の「構造転換」特集の冒頭および44号であらためて研究大会を踏まえて特集が組まれた情報化に関しても貴重な論文や問題提起が多く登場

した。44号の石沢篤郎氏の「情報ネットワークと現代資本主義」は、コンピュータ技術の性格をシステム化・組織化として捉え、その歴史的な性格を解くカギはソフトウェアとネットワークの独自の性格にあるとして、情報化を捉える視点を提示した。情報工学の専門研究者による、かかる提起は、報告が行われた研究大会で新鮮に受け止められた。同時に、多くの新たな課題を経済学の側に提起した。この点については、44号に柳ヶ瀬孝三氏が「情報化をめぐる討論」として、いくつかの点を整理している。情報化と労働については、自ら情報労働者としての経験をもち一貫してこの問題を取り組んできた青水司氏が、自身の論文の他に、42号の座談会で、また石沢報告のコメントとして研究大会で（原稿はなし、柳ヶ瀬論文で言及）問題提起している。青水氏は、情報が労働の人間化を進めるか労働の無内容化を進めるかといった二者択一では本質は捉えられないとして両面を統一的につかむ必要性を強調するとともに、労働過程の情報化による技術的労働の部分労働者化の進行を指摘した。青水氏の分析は、後に『ME合理化と労働組合』と題する本を立命館大学大学院の戸木田嘉久ゼミで共同執筆した際に、繰り返し読み参考にさせてもらったこともあり強く印象に残っている。

ところで柳ヶ瀬氏は、先の論稿のなかで、労働過程におけるコンピュータ技術の位置・意義について、言語活動を延長するものとする石沢氏と労働手段のうちに含まれる制御機能と捉える青水氏との間には若干の相違がある旨の指摘をしたが、この点を小林正人氏が46号の誌面批評で取り上げ、両者の違いは考察対象とする重点の差異にあ



りと整理し、あわせて石沢論文がコンピュータに読みこまれたソフトウェアを「機械」とする理解に疑問を呈している。技術論の詳細な議論になると能力を超えるが、当時の情報化については、それ以前の号も含めて最先端の議論が展開されており、ここでも基礎研究所員の先進的な研究の状況を確認できる。

④構造転換と生活・消費

「構造転換」の議論のなかで、やや手薄な印象を受けるのが、生活に関連する問題領域である。第43号の特集「現代の消費構造の転換」は、そのなかで関連する数少ない作業のひとつである。ここではタイトルの座談会と現代マーケティングと消費・生活像を論じた二宮厚美論文および生活協同組合を取り上げた的場信樹論文で特集が組まれている。座談会の冒頭で小沢修司氏が消費構造の転換を戦後の生活様式の特徴を踏まえて整理しているが、問題を消費のところにあてたこともある。当時、臨調路線のもとで転換が進行していた福祉・医療・年金などについては言及がなく、座談会のなかでは、消費者信用、流通資本、生協と問題がやや拡散して、生活構造の転換のリアルな姿が必ずしも浮かび上がってこない。その点は二宮論文が、生活様式再編の全体像を示すことで補っているが、ここでもマーケティングと消費の分析という役回りもあって限定的である。消費からのアプローチに加えて、文字通り生活構造全体の転換を正面から分析する特集が「構造転換」分析の一貫として取り上げられる必要があったように感じる。48号の小特集「臨調行革下の労働と生活」が、かろうじてそれら漏れた問題を拾



い上げてくれているのが救いである。

⑤現代社会の構造転換を考える巻頭言特集

特集論文と並んで、誌面を飾ったのが巻頭言である。短いものだが、いずれも示唆に富むものばかりである。上述したように、「構造転換」の受け止め方にはかなりのバラツキがあるが、その点をあまり気にしないで読むと、各分野の第一線の研究者・実践家ならではの問題提起がぎっしり詰まっている。島恭彦氏の民主主義論、山口正之氏の日本資本主義分析小史、鯨坂真氏の現代イデオロギー論、横田昌子氏の地域づくり論、角橋徹也氏のまちづくり論などなど。今読んでも新鮮なものばかりである。

III 論文・インタビューなど

以上の特集の他にも、多くの魅力的な論文が多数掲載されている。25号から28号にわたって取り上げられた階級論は、41号の成瀬龍夫論文「日本の労働者の人間的発達と階級主体形成」、同氏50号の論文「階級意識形成をめぐる理論的諸問題」がそれである。50号の福島利夫論文「労働者の自立とはなにか」、今崎暁巳氏の「大企業労働者が人間らしい暮らしづくりをたたかいの基本に見えるまで」もその関連論文として参考になる。44号掲載の15周年懸賞論文の入選作である北条豊論文「現代日本の鉄鋼労働者」、同氏の42号掲載の論文などは、働きつつ学ぶ権利を担う基礎研運動が生み出した労働者研究者の質の高さを示すものとして紹介しておくべき論文である。

インタビューも大変内容のある魅力的な企画である。企画が魅力的というより、登場する人たちが魅力的だと言った方が正確である。41号から50号では、基礎研で研究をされている現場の労働者の方々が7人登場する。一緒にゼミナールであった人も数人含まれており、懐かしい思いで一杯である。北条氏と同様に、基礎研の存在意義を示す貴重な記録である。

おわりに

現下の構造改革の動向をみるにつけ、共同研究による骨太の現代資本主義・日本経済分析と対抗戦略を打ち出すことのできる総合的な政策形成の必要を痛感する。当時の「構造転換」分析には不十分さも多々みられるが、研究所所員には少なくとも共同研究への熱意と活気があった。問題意識

がかなり広がった現在では、同じような作業は困難かもしれないが、少なくとも現在の構造改革は、研究所の総力を挙げて取り組むべき課題であるように思うがどうだろうか。

数多くの論文の中から、ほんの一部しか触れられなかつたが、読みなおしてみて、あらためて、自分の研究の基礎を築く上で『通信』は、このうえなく大きな存在であったことを確認したというのが実感である。

(よこやま としかず 所員 金沢大学)

Message

今後の経済学の課題

小谷 崇

21世紀初頭の現在、経済学は、近代経済学も、マルクス経済学も、ともにきわめて深刻な状態のもとにおかれている。近代経済学では、すでに30年近くも、フリードマンやルーカスら以来の新保守主義（新自由主義）、すなわち市場原理主義に制覇されたままの状況が続いている、その結果がどんなに荒涼としたもの（バブルの崩壊、貧富の差の拡大、「世界を不幸にしたグローバリズム」等々）になっていても、なおいまだにそれをくつがえす新潮流による支配の交替は生じていない。

他方、マルクス経済学は、20世紀の最後の20～30年間に、一種の「歴史的な後退」（「敗北」ともいえよう）を経験した。まず旧ソ連でいちばん若手、中堅の経済学者の数理経済学への大規模な転換が生じたといわれ、次いで日本で1980～90年代に学生の「潮が引くような」勢いでマルクス離れが発生した。また90年代以降の中国では、若手研究者はこぞってミクロ・マクロ理論の習得に熱中し、マルクスをほとんどかえりみなくなっているようである（私の狭い見聞によるものであるが）。

しかし、このような「市場原理主義の全盛、マルクス経済学の衰退」は、決して、「経済学の最終の姿」では、ありえない。これは、じ

つは、その次に、全く新しい、本当に偉大なものがあらわれるための準備がととのってきたことを意味している、と私は思う。

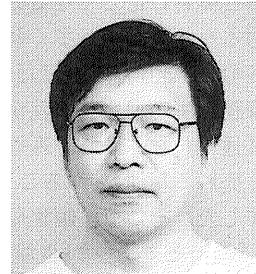
その全く新しい経済学とは何か？ じつは「全く新しい」といっても、それは決して今日までの理論からの「断絶」を意味してはいないと私は思う。私は、「断絶」とは逆に、マルクス経済学を、その最初から最後（商品論から社会主義論）まで今日の現実に合わせて、また近経の成果をもとりいれながら、さらに今日の労働者・国民のたたかいを助けることができるような内容をもたらせながら、徹底的に、全面的に再構成することが、その「新しい経済学」を作ることになると思う。

今日、学生にとっても、働く人々にとっても、経済学の勉強とは、決して「学習」だけに終わることは許されないのである。それらの人々が（もちろん学習もしながら）、自分の経験にもとづいて積極的に発言し、学者・研究者と協力しながら「新しい経済学」を作っていく、ということが何よりも必要になっている、といえよう。『経済科学通信』は、そのための最良の場を提供することができる、と私は思い、深くそれに期待したい。

(こたに たかし 政治経済研究所)

編集局の裏方から

第51号～第60号



UMEHARA Eiji
梅原 英治

I 基礎研と『通信』と私

専任オペレータから 『通信』編集局担当へ

私は84年10月から91年3月までの6年6カ月の間、基礎研の半専従事務局員として勤務しました。立命館大学のオーバードクター（非常勤講師）でしたが、アルバイトとして基礎研に勤めたのです。

最初の1年間は専任オペレータとして、基礎研のOA化に従事しました。当時、基礎研本部の事務は専従事務局員（事務局次長）の西田達昭さんの手作業に依っていたのですが、創立15周年を機にパソコンを購入して、本部事務のOA化を促進しようとしたのでした。パソコンもようやく実用に耐えうる16ビット機(NECのPC-9801シリーズ)が普及し始めたときです。

私はOA推進委員会責任者の成瀬龍夫先生の下で、①所内の文書管理、②所員・所友・研究生の住所・会費の管理、③『通信』読者の住所・購読料の管理、④財務会計のOA化、⑤OA会計の管理、⑥所内のパソコン普及という課題に取り組みました。

とくにデータベースソフト(dBASE II)を使っ

て「所員管理システム」と「読者管理システム」を開発したのが一番大きな仕事で、両システムは『基礎研ニュース』や『通信』の郵送、会費や購読料の請求業務で絶大な威力を發揮し、その後10年近く使われました。

専任オペレータとして与えられた課題を1年間でほぼ達成しましたので、85年10月から『通信』編集局担当の事務局員に変わりました。

この仕事は、編集局で決められたことを実務的に実行していくことです。編集委員への連絡、取材、原稿依頼・収集、テープおこし、印刷所への入稿、執筆者へのゲラの郵送と回収、再校以降の校正（印刷所での出張校正を含む）、そして完成品の封筒詰め・郵送までを担い、まさに『通信』の裏方となって定期的な発行を支える役割です。

私は前任者の横山寿一さんの後を受け継ぎ、47号（85年12月）から66号（91年5月）の途中までを担当しました。

芦田編集長と重森編集長

私が編集局担当になったときの編集長は芦田亘先生で、副編集長に江尻彰さんと竹味能成さん、編集委員に角田修一先生や坂本悠一さん、山田浩貴さん、横山さん、関西以外のメンバーとして小倉信次先生、中谷武雄先生、齊藤雅通先生がおりました。

芦田編集長のおだやかな人柄とODたちの仲間意識を反映して、編集局は大変和気あいあいとした雰囲気でした。もっとも、『通信』の発行月になると非常に忙しくなるのですが、ODの方々が戦力となって頑張ってくれました。

49号(86年6月)から(だったと思うのですが)、重森暁先生が編集長に就かれました。重森編集長は『通信』を“より読みやすく、より親しまれ、より売れる雑誌に”することを方針として掲げられました。そこで、編集局では『経済』『経済評論』『経済セミナー』『世界』などの雑誌を検討したり、吉野源三郎『職業としての編集者』(岩波新書、89年)の勉強会を開くなど、編集水準の向上と『通信』の誌面改善に取り組みました。それにより編集局会議もいっそう活気あふれるものになりました。

編集委員は、金沢に就職が決まった横山さんと竹味さんが抜け、松野周治先生や高橋信一さん、高山新さんが新たに加わりました。

誌面の技術的改善

こうした中で、私自身も編集実務を通じて気付いた点、とくに誌面の技術的部面での改善に努力しました。表紙の改善、1ページ当たり字数の増加、各論文のタイトル部分の多様化、写真の利用、図表の改善、活字の大きさの多様化、紙面上の空白をなくすための小さな記事や広告の作成などなど、毎号何か一つでも改善しようと努めました。

例えば、49号までは本棚に『通信』を立てるときの特集号が分からなくなる(したがって本屋さ

んであり売れない)のを、背表紙に特集タイトルなどを入れて分かるようにするとか、52号(87年3月)からは各論文のタイトルの右肩に『通信』の発行号・年月を入れて、コピーの便に供するとか、そういう小さな工夫を重ねていったのです。

同時に、印刷の過程では、原稿の入力工程ができるだけ省いて印刷時間を短縮するため、フロッピーから直接、電算処理できるようにしました。ここは専任オペレータとしてのパソコンの知識が役立ちました。こうして、かつて1ヵ月半ほどかかっていた印刷・校正作業が1ヵ月ほどで、早いときは3週間ほどで出来るようになりました。

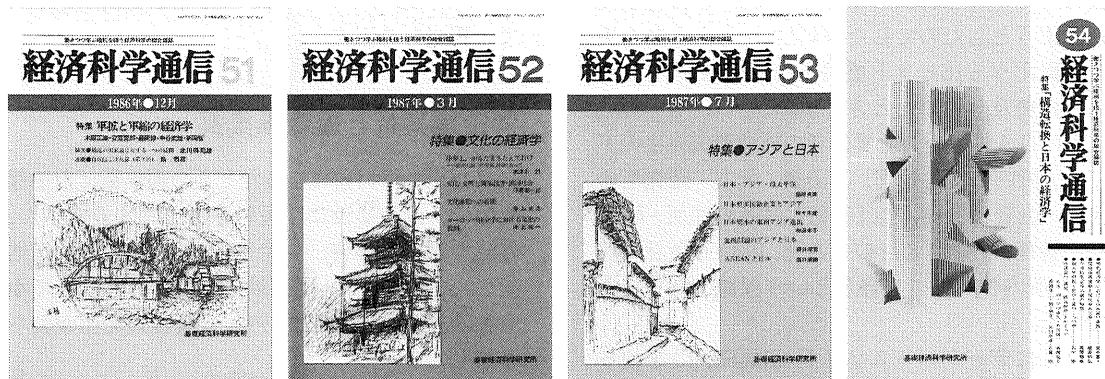
これらの誌面の改善や印刷工程の合理化は印刷所の協力がなければできないのですが、新日本プロセスの田島さん(後にかもがわ出版)や職人の山崎さんたちがいろいろ親切に教えて下さいました。

Ⅱ 本格的経済誌になった『通信』

内容の充実

『通信』の誌面は重森編集長のもとで非常に充実したものとなりました。とくに連載企画がこの時期にたくさん始まっています。

すなわち、53号(87年7月)から「研究者群像」、54号(87年12月)から「現代の焦点」「研究所訪問」、55号(88年3月)から「歴史の探究」「古典を読む」「学界動向」、56号(88年7月)から『講座・構造転換』モニター書評、57号(88年10月)



から「文学と経済学」。もっとも、「文学と経済学」は第1回目の森岡孝二先生の「ディケンズの『リトル・ドリット』」だけで、後が続きませんでしたが。

これらの企画は、「研究者群像」「研究所訪問」は所内外の研究者、他の研究所との交流を広げること、「現代の焦点」「歴史の探究」は現在と過去(とくに1930年代)の経済問題を照射すること、「古典を読む」「文学と経済学」は基礎研の伝統である古典学習を重視すること、「学界動向」は最先端の理論動向を紹介することなどを意図していました。

とりわけ「研究者群像」の連載は評判がよく、のちに『戦後経済学を語る——わが青春の経済学』(かもがわ出版、93年)として出版されました。私もテープ起こしのためにときどき取材をお供させていただくのですが、誌面に掲載できないようなお話を聞けたり、戸木田嘉久先生・宮本憲一先生・柴田悦子先生のご自宅・別宅に伺ったときにはご馳走になったりして、個人的にも楽しい企画でした。

こうした誌面の改善を通じて『通信』は、①特集(春・夏の研究大会や現代資本主義研究会を軸にしながら)、②各種の連載、③書評、④基礎研だよりを4つの柱にして組み立てられるようになり、前述の技術面での改善と合わせて、市販の経済誌と並べても見劣りしないレベルに達するようになったと思います。

表紙の移り変わり

表紙は『通信』の顔。研究者団体ですので、全



体として品性の良いものが選ばれてきました。49号までは梅川勉先生の切り絵で、これは大変評判が良いものでした。50号から島恭彦先生のスケッチになり、島先生のご趣味をかいしま見ることができて好評でした。

ところが、54号から段ボールを使った抽象的なアートに変わり、そして59号からは新日本プロセスの「つづら」さんの漫画になりました。段ボールのアートには「よく分からない」という意見が寄せられ、常任理事会でもあまり評判がよくありませんでした。漫画に対しては「品位が落ちる」という声もありましたが、「分かりやすい」「面白い」「楽しい」と概して評判は良かったと思います。

III 編集局会議と誌上論争のあり方

編集局会議の風景

編集局会議では、次号・次々号の内容の確定、発行号の進捗状況の点検、『通信』の拡大状況などを議論します。3号分が少しづれながら同時進行している感じです。編集プランは3ヵ月先、半年先を予測しながらアイデアを出し合って決めていきますので、社会・経済情勢と学界・研究者動向を日常的に目配りしていないと発言できません。だから、編集委員のみなさんはとてもよく勉強されていました。

そして芦田編集長も、重森編集長も、暖かい包容力のあるお人柄ですので、編集局会議ではODも院生も自由に意見を言いあって、明るく活発な

雰囲気で行われていました。

こうした編集局会議は、基礎研の常任理事会の終了後であったり、同じ時間に事務所の片隅で開かれたりします。したがって、編集局会議の話は常任理事の方々にも筒抜けですので、いろいろな意見が寄せられます。とくに理事長の森岡先生はいつも貴重なアドバイスをなされ、発想の柔軟さと創造性には驚かされました。

私は編集局会議で決まったことを整理して、事務局会議（事務局長の小沢修司先生と西田さんと私の3人）に報告し、実行していきます。

『通信』の編集委員は手弁当なのですが、同じように執筆者にも原稿料が出ませんので、原稿依頼には気を遣います。ただ、時間の都合でダメな場合を除けば、ほとんどの方は快く引き受けて下さり、基礎研と『通信』の評価の高さを再認識することも多かったです。

基礎研には「働きつつ学ぶ」労働者研究者がたくさん結集されていました。優れた研究をしながらも、成果発表の機会の乏しい労働者研究者の方々には、編集局としても意識して原稿や座談会出席を依頼してきました。神戸製鋼所におられた十名直喜さんはじめ、たくさんの方が後に大学の先生になられました。

誌上論争のあり方と編集局の立場

編集の仕事をしていると、ときには難しい問題に直面することがあります。88年4月の編集局会議で、ある先生の著書をめぐっての座談会を開くことが企画されました。座談会にはその本に対する批判論文（持ち込み原稿）を55号に書かれて



た方にも来ていただいて、両者の主張を闘わせようとしたのです。もう少し経過をいえば、『通信』が批判論文を掲載したことに対し、その先生が基礎研に不満をもらされているということを編集局の方で聞きつけたので、関係を修復しようとしたわけです。

私がその先生に電話して座談会への出席をお願いすることになったのですが、依頼の途中から興奮されてきて、怒られてしまいました。

「4月はじめ頃、……座談会をやりたい……が、日取りの都合はどうか、との電話連絡があった。……【批判】論文掲載の前と後では、事情が変わっているのに、これはいったいどういうつもりなのだろうか。……連絡者（編集委員）[梅原のこと]は、なんてことないようなくちぶりであったが、それは唯物弁証法と唯物史観をいかに理解するかにかかわるから」（57号、73ページ）云々と、後に掲載された論文に書かれる始末です。

結局、座談会はできず、その代わりに先生から反批判論文が送られてきました。これは批判論文の3倍以上もある長大なもので、しかも相手の人格を傷つけるような文章まで含んでいます。編集局では書き直しを要請するなどして対応し、この問題で半年くらい悩まされました。掲載した書き直し論文の冒頭が上記の文章です。

所外の方を交えた誌上論争のあり方の難しさは、それ以前の30号台の「再生産論争」でも経験しています。そのときは人格攻撃ばかりではなく、字数制限の「200字詰め原稿用紙〇〇枚」という表現の裏をかいて、原稿用紙の1マスに2字書き込んだ原稿が送られてくるという、常識では考えられないことまであったようです。

誌上論争のあり方と編集局の立場を鮮明にする必要から、57号の「編集後記」（重森編集長の執筆）に次の文章が載りました。

「本誌は、経済科学の創造的発展とその担い手の交流を目指しています。そのためには論争的なものを積極的に掲載していきたいと考えています。もちろん、批判的論文を掲載したからといって、その見解を支持しているわけでないことはいうまでもありません。あくまでも、それぞれの分野における理論的発展を期待し、できるかぎり自由で広範な討論の場を提供したいと願うだけです。

す。」

「ただ、いうまでもないことですが、論争は建設的なものでなければならず、とりわけ互いに経済科学の創造的発展を願って努力している者のあいだでは、相手の人格を傷つけることがあってはならないと思っています。率直かつ建設的な論争を期待するところです。」

誌上論争に関してはその後もいろいろなことがありました、編集局の立場はすべてここに凝縮されており、そして全体として正しく処理されてきたと確信しています。

IV 「構造転換」と 「生活の豊かさ」の分析

80年代後半の日本経済

さて、51号から60号が発行された80年代後半は、世界と日本の経済が激しく揺れ動いた時期です。80年代前半、アメリカのレーガン政権は「強いアメリカ」（軍拡とドル高）を掲げ、サプライサイド経済学とマネタリズムと合理的期待形成仮説を混合したレーガノミックスを経済政策の柱としましたが、それは「双子の赤字」（巨額の経常収支赤字と財政赤字）を招き、85年には純債務国に転落してドル高・対外借入依存政策の「サステイナビリティ・ショック」（ポール・クルーガーマン）を引き起こして行き詰りました。

85年9月のG5（アメリカ・日本・西ドイツ・フランス・イギリスの5カ国蔵相・中央銀行総裁会議）プラザ合意は、ドル高・円安をドル安・円高に急激に反転させることによって、ドル暴落の危機を解消しようとするもので、それを支えるために各国は協調して金利を引き下げました。また、日米経済摩擦も激化し、アメリカは日本に内需拡大要求を強めていました。

これら円高・金融緩和・内需拡大策は、一時的には86年の円高不況や87年秋の株価暴落（ブラックマンデー）を引き起こしましたが、対外的には日本企業の多国籍化を本格的に促進し、国内では地価・株価など資産価格のバブル現象を引き起こして、日本の経済社会を構造的に転換するも

のでした。日本は名実とも経済大国となり、景気もバブルによって「絶好調」となる下で、「過労死」「ウサギ小屋」「介護地獄」など、勤労国民にとっては「豊かさ」を実感できない現実が浮き彫りになっていました。

「構造転換」と 「生活の豊かさ」の分析

この時期の基礎研の取り組みもまた、こうした日本経済の変動と課題に対応したものでした。その際、キーワードになったのが「構造転換」と「生活の豊かさ」——これはのちに労働時間研究を踏まえた「ゆとり社会」となります——でした。

「構造転換」については、『講座・構造転換』全4巻（青木書店、87年）となって結実しました。『通信』でも『講座・構造転換』の出版を記念した座談会を54号に、その特別モニター書評を56号と57号に掲載しました。

「生活の豊かさ」については、『労働時間の経済学』（青木書店、87年）と『ゆとり社会の創造』（昭和堂、89年）が出版されました。

『通信』の特集もこれら2つを柱として、「構造転換」については、51号「軍拡と軍縮の経済学」、53号「アジアと日本」、54号「構造転換と日本の経済学」、55号「経済民主主義の動向」、57号「ギャンブル・キャピタリズムの凋落」、58号（88年12月）「現代経済をどうとらえるか」で取り上げています。

編集実務をしながら興味深く読んだものをあげますと、51号では藤岡惇先生の「軍縮と開発の経済学」とくに「民需転換」の提起、53号では藤原貞雄先生の「企業主義帝国主義」の提起、54号では宮本憲一先生の新自由主義・新保守主義と「大衆資本主義」の関わり、55号では野澤正徳先生の経済民主主義論の歴史と現状の課題の整理、57号では小西一雄先生の「ネズミ講的金融構造」の分析、58号では森岡先生の「われわれのなかの段階論」批判などです。

「生活の豊かさ」については、52号（87年3月）「文化の経済学」、56号「労働過程研究の視点」、59号（89年4月）「いま“豊かさ”を考える」、60号『『ポスト福祉国家』を問う』という特集を行って

います。

52号の木津川計先生の「中年よ、からだをきたえておけ」は、どこからこういう素晴らしい言葉が出てくるのかと感心させられました。56号では森岡先生と成瀬先生からブレイヴァマンの『労働と独占資本』(74年)における労働過程研究の意義とそれを受けた研究の必要性の提起がなされ、58号では座談会も行われました。59号では「豊かさ」問題のシンポジウムが行われ、角田先生が人間性、関係性、物的、時間的、生態系(エコロジー的)の5つの側面から「豊かさ」概念を整理されました。60号では、北村裕明先生によるサッチャーリズム下のイギリス福祉国家の解体についての報告と、藤岡純一先生によるスウェーデンの福祉国家維持の報告が対照的な内容で、非常に面白いものでした。

これらの問題提起や分析視点は現在でも引き継がれ、いっそう深められ、拡大されるべきものと思います。

V おわりに

—親と子は共に育つ—

『通信』の編集事務の仕事をしてよかったですのは、研究所内外のいろいろな方と知り合え、経済情勢の分析の勉強ができ、また原稿を書く要領みたいなものがつかめたことです。

そのおかげで私も自分の研究が進み、91年4月に鹿児島経済大学(現・鹿児島国際大学)に就職することになりました。後任には京都大学の大学院生だった森岡真史さんになっていただき、66号の編集の途中でバトンタッチしました。

編集局の裏方として、自分なりにいろいろ苦労しながら育てた『通信』は、私にとっては我が子のようなところがあります。同時にその『通信』が私を育ててくれました。「親と子は共に育つ」と申しますが、まさにその通りだと思います。あらためて基礎研と『通信』に感謝申し上げる次第です。

(うめはら えいじ 所員 大阪経済大学)

Message

新たな発展を期待

成瀬龍夫

『経済科学通信』の永い歴史には、3つの時期があったように感じられます。

第1の時期は創刊からしばらく続いた、いわば「手作り」の時期、第2の時期は企画の内容や装丁が洗練され専門誌らしくなった時期、そして少なからぬ専門誌が前世紀末までに消えて行ったなかで生き残り、むしろ専門誌としての市民権を不動にした第3の時期、です。

私は自分が大学院生、その後の駆け出しの大学教員のときであった「手作り」の時代の『通信』がとても懐かしく、当時は毎号熱心にスミからスミまで読んだものです。

それにしても、『通信』はよくも21世紀まで生き残ったと思います。それができた理由はいろいろ考えられますが、まず基礎研の会員が『通信』にアイデンティティをもって大切にしてきたこ

と、会員の中には、最初は読者で、やがて執筆者になった方も少なくないでしょう。『通信』は、まず会員にとって研究者としての一種の自己成長の記録のようなものでした。また、歴代の編集者・編集局員が熱心に、たまには自己犠牲的に改善努力を続けてきたことも評価されます。そして何よりも適宜の特集内容で優れた専門家に筆をふるつてもらい、経済学に関する専門誌として水準を落とすこともなかったことがあげられるでしょう。

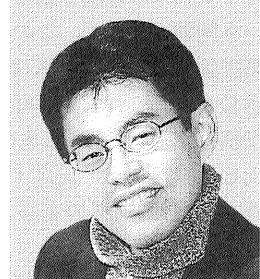
『通信』は、21世紀にも生き残っていくことができるのか、私は、上記の3つの要素が今後も失われないならば、充分に風雪にたえて新たな発展を遂げると確信しています。

100号、おめでとう。

(なるせ たつお 所員 滋賀大学)

労働過程研究から 企業社会批判へ —ソ連・東欧崩壊を背景に—

第61号～第70号



MORIOKA Masashi
森岡 真史

本誌61号から70号が刊行された1989年11月から1992年7月までは、何よりも「ベルリンの壁」の撤去に象徴される東欧革命とそれに続くソ連解体の時期であり、また日本では、90年以降の株価下落にもかかわらず、「バブルの崩壊」がまだそれとしては認識されず、日本の経営の国際競争力の高さを前提とする議論が礼賛・批判を問わず盛況をきわめた時期でもある。本稿では、この時期の『通信』の内容を①東欧・ソ連の崩壊に関する特集、②技術変化と労働過程に関する特集、③日本型企業社会論に関する特集、④その他の特集、⑤種々の連載企画の5つの柱に沿って概観する。

なお、筆者は、1990年春の大学院入学の直後から本誌編集局に加わり、翌91年度の66号から梅原英治氏の後を次いで事務局を担当するようになった（編集局長は68号まで重森暁氏、69号から二宮厚美氏）。こうした事情から、以下の概観も、若干の個人的な感想を交えたものとなっていることをお許し願いたい。

I 東欧・ソ連崩壊をめぐって

社会主义の問題は、63号「世界史のなかの社会主义」と、66号の「再考！社会主义」で特集された。66号で芦田亘論文がドイツについて述べた、

「東ドイツとソ連の政治・経済の行き着いた状況からする限り、まずもって西ドイツへの吸収による統一、市場経済制度への完全移行による基礎的な経済の再建こそが、緊急にも、また長期的にも必要不可欠であったことを承認せざるをえない」という苦渋の評価は、ニュアンスの違いはある、一連の事態に対する具体的な政策次元での一つの反応を代表するものである。63号で東欧各国の改革史を回顧した田口雅弘・堀林巧・田中宏の各氏もまた、少なくとも当面の課題としては、資本市場を含む市場経済導入の必要を当然とみなしている。同時に、91年12月のソ連の崩壊に到るまでは、社会主义の枠内での抜本的改革への期待がなお根強かったのも確かである。それだけに、ソ連崩壊が基礎研とその周辺の人々に与えた影響は、『通信』の誌面に現れた以上に深刻であったとみなければならない。

理論的次元での反応としては、社会主义と資本主義を生産手段の所有関係によって区別するそれまでの通説に疑問を呈した63号の芦田亘論文が注目に値する。同論文は、2つの体制を区別する基準を、労働・人間主体の発達の軸と資本の効率・利潤原理の軸の「どちらの軸が究極において優位に立ち…発展の基本的方向性を規定しているのか」という実質に求め、市場と私的所有、さらには「資本所有に応じた分配」までもが、一定の条件と範囲においては社会主义の構成要素になる

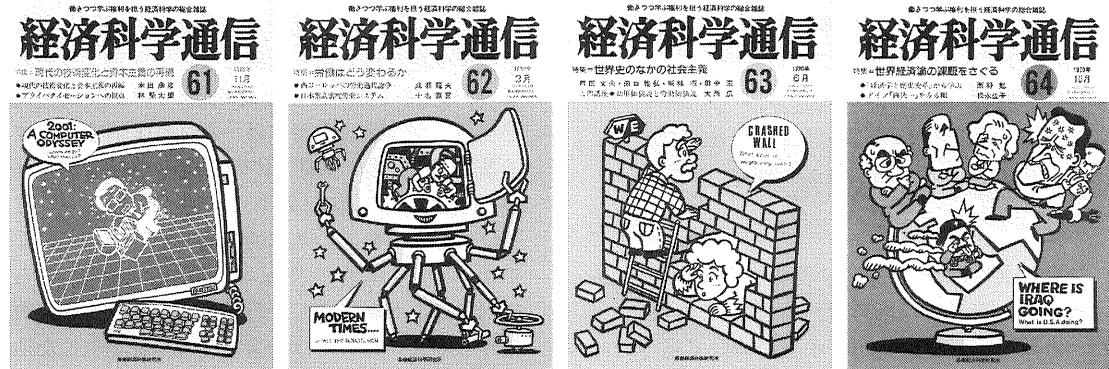
と論じた。このように生産手段の国有化や中央計画を相対化し、価格や市場メカニズムを包括するよう社会主義の概念を拡張する場合、それがはたしてマルクスの理論体系と整合的なものであるかという問題が生じる。この点について、66号の大野節夫論文は、マルクスは「非市場社会主義」を構想したが、これは「不可能なシステム」であると指摘した。ただし、資本の存在をも許容する芦田氏とは違い、大野氏は「協同的社会主義」により資本・賃労働関係の克服は可能であるという展望を示している。

資本主義／社会主義の概念規定の見直しに関しては、直接にはブレイヴァマンを論じた62号の大西論文についても言及する必要がある。同論文は、資本主義を機械制大工業段階のもとでの労働に対する専制的指揮のシステムとして定義し、資本主義の支配は専制的指揮が生産力の発展にとって促進的である限りで合理的・必然的なものであると主張する。この立場によれば（後に大西氏自身が精力的に展開するように）ソ連・東欧の崩壊は、国家資本の専制から私的資本の専制への体制内移行に過ぎず、真の社会主義は自由で個個的な労働が生産力発展の絶対条件となる段階においてのみ展望しうる。大西氏の議論は一見特異なものに思えるが、専制的指揮のテーゼと史的唯物論の公式に忠実に——批判者からみれば機械的なままで——依拠している点では、むしろラジカルな＜マルクス回帰＞派に属すると見ることもできる。ただ、大西氏が資本の専制と闘う立場と、一定の発展段階のもとで資本の専制の必然性を承認する立場との峻別を強調し、真のマルクス主義においては後者が優先される主張したことは、広義

の運動体である基礎研内で少なからぬ反発を呼んだ。

社会主義体制の歴史については、筆者は66号で「スターリン体制の形成・確立・展開」に関する粗い素描を試みた。これは、これまで社会主義と呼ばれてきた体制はどのようなものであったかという歴史的事実の認識に関わる問題は、社会主義とは本来何であるか（あるべきか）という問題に劣らず重要だと考えたからであり、今もその考えは変わっていない。

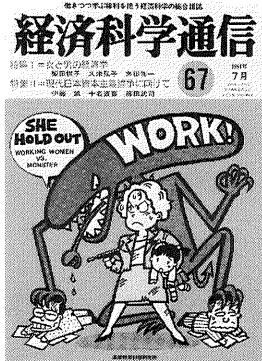
基礎研の内外を問わず、かつて社会主義（共産主義）の理念を擁護していた人々の立場は、おおざっぱに言えば、その後、①マルクス主義的な社会主義の理念を放棄する流れ、②市場、エコロジーその他のいろいろな非マルクス的（とされる）要素を盛り込むことで社会主義概念の修正（再生、発展）をはかる流れ、③＜本来のマルクス＞に即して社会主義の概念を再定義する流れ、の3つに分岐した。この分岐は社会主義への関心の全般的な低下とともに進行しており、『通信』誌上でも、上記の2回の特集以降は、社会主義を正面に掲げた大きな特集は組まれていない（ただし、1993年には上記の特集をもとに、基礎研の実質的な編集により『経済システムの転換』が刊行された）。しかし、20世紀社会主義の経験に立ち帰り、それをふまえて望ましい（あるいは来るべき）近未来社会像を——それを「社会主義」と呼ぶべきか否かを含めて——構想する課題は、ソ連・東欧崩壊から10年を経た今日、改めてより大きな意義をもつようになっていると言えよう。



II 技術変化と労働過程

61号の特集「現代の技術変化と資本主義の再編」(第12回研究大会の諸報告を中心に構成)と62号の特集「労働はどう変わるか」はいずれも技術と労働の問題をとりあげている。この問題に80年代以降の資本主義の新しい流れ(段階)という角度からアプローチした61号では、米田康彦論文が不均等発展の激化と多国籍企業の台頭による国民経済の枠組みの揺らぎに注目し、また林堅太郎論文がサッチャーリズム下の「プライバティゼーション」(資本主義的「私化」の諸政策の体系)の実態をとりあげている。

両特集を読んで目につくのは、「ME化」または「ME革命」がキーワードとしてひんぱんに登場し、その資本主義へのインパクトが一つの主題となっていることである。62号の小林正人論文は「ME革命」を、「IC[集積回路]の小型化と量産、価格低下によってコンピュータ革命が普遍化」し、「あらゆる機械がプログラム制御になった」事態として規定している。こうした事態は今日もなお進行中である。しかるに、今では「ME化」「ME革命」はほとんど耳にしなくなり、インターネットの急速な普及とともに「IT化」「IT革命」に完全にとって代わられた(「IT化」も最近やや下火になってきたが)。「IT化(革命)」は「ME化(革命)」の延長か、あるいはそれとは質的に異なる全く新しい技術段階なのか。これは今日の「IT化」をめぐる議論において十分には明らかにされていない問題であろう。



より直接的な生産過程にそくして技術と労働の問題にアプローチした62号では、成瀬龍夫論文がブレイヴァマン以前と以後の西欧における労働過程研究を、また渡辺峻論文経営管理論的視点からの労働過程研究をそれぞれサーベイしており、これらはいま読んでもたいへん参考になる。西欧の研究で出されたマルクスへの批判点として成瀬氏は、(1)大工業による「労働の同質化」というテーゼへの実証的視点からの疑問、(2)「管理に対する多様な資本の側の戦略」「労働者に対して『同意』」を組織するという心理的な過程の分析の弱さ、の2点を紹介している。第2点の労働者の「同意」という問題は次節でふれる企業社会論の中心論点の一つとなった。一方、第1の点については、マルクスの時代にどうであったかという点について多様な見方があるだけでなく、61号の桜井幸男論文が示しているように、「ME化」というリアルタイムで進行中の過程が労働に及ぼす影響をめぐっても、熟練解体論、二極分離論、知的高度化論など、「多様な議論が存在」した。今日の「IT化」影響についても同様である。このことはたんに認識の相違というよりも、労働過程それ自身に安易な一般的化を許さない多面性・複合性があることを示しているように思われる。

ところで、労働過程を実証的・具体的に研究しようとすれば、工学、医学、社会心理学等からの知見も欠かせない。この点で、西淀病院副院長(当時)の田尻俊一郎氏による労働現場の状況と過労死に関する医学的分析(65号)は学ぶところが多い。

上記2号の特集中で、ラジカルな問題提起という点で目立っているのが、技術それ自体とその

利用の仕方を切り離して理解する通説を批判した重本直利論文である。同論文は、変革すべき対象は、コンピュータの資本主義的利用だけでなく、資本主義的に規定されたその「構造と機能」それ自体であると説く。論文中で批判された野口宏氏は64号で、機械それ自体の変革が必要というには、「『ラダイツ運動』と変わらない」、資本主義下の生産力発展の進歩性を否定するのでは「実践への展望は見いだせない」と反論し、重本氏は67号で再度自説を繰り返している。重本氏の立場は、技術の利用の仕方よりも技術そのものの性質を重視する点で大西氏に通じる面があるが、資本主義の中から非資本主義的な技術が生み出される可能性を否定する点では全く対極的である。

III 日本国企業社会の解剖

62号で仲野組子・森岡孝二論文が日本のマルクス経済学における労働過程研究の立ち後れを指摘し、「今日の日本では、労働過程分析を基礎に据えて資本主義的分析を行う必要性はどの国にもまして大きい」という提起を行ったとき、日本では長時間過密労働とそれをもたらす「企業社会」のあり方に人々の関心が集まりつつあった。基礎研では90年代に入って、この問題を労働過程分析と日本経済の構造分析の接点に位置する格好の主題として連続的にとりあげた。『通信』誌上でも、本稿が取り扱う範囲だけで、65号「企業社会ニッポン」、68号「解剖! 企業社会ニッポン」(91年度研究大会の諸報告をもとに構成)、第70号「働きすぎ／働くさせすぎ社会の構造」(92年度春



期研究交流集会の諸報告をもとに構成)と3号にわたって特集されている。また、67号の第1特集「現代日本資本主義論争に向けて」もこの系譜に含めることができる。

65号の渡辺治論文は、「日本の企業の特殊な労働者支配の構造こそが日本社会の構造の質をなしている」という視点から「過労死」現象に焦点をあて、「日本の企業が労働者を特別に働かせる、また働くことを受容させる構造」の形成史と現状を分析している。同論文によれば、日本では、石油危機以降に大企業から経済全体に広がった特殊な競争構造により、「『資本論』の世界がもっとも純粋な形で実現するような社会システム」が実現した。67号の伊藤誠論文もまた、近年の資本主義の変化に原理的相貌の強まりを見出すが、日本の独自性を強調する渡辺氏と違い、これを世界規模での流れととらえ、日本の事態も、「他の先進諸国に通ずる経済危機とそれへの対応が特殊な形態をとつて進行している」とみるべきだと論じている。筆者は当時気づかなかったが、ここには資本主義一般と日本資本主義の関係、さらには欧米と日本の関係のとらえ方をめぐる、かなり大きな方法論的立場の相違がある。

この相違に即して言えば、企業社会の形成を「下支えする社会的基盤や条件」となった市民社会としての未成熟性を指摘する光岡博美論文、日本特有の「インフォーマル性」や「企業の前近代的な共同体的性格」を強調する十名直喜論文(いずれも65号)、労資協調や系列関係による「囲われた競争」に注目する篠田武司論文は、いずれも日本資本主義の異質性を重視したうえで、渡辺氏とは反対に、これを後進性とみる立場を示している。また、行きすぎた資本主義か、前近代かという問題とは別に、十名氏がこの時点で、日本企業の「強み」は、人事評価の恣意性、個人の独創性や専門性に対する低評価等の「弱み」の上に成り立っていると論じていたのは先見的であった。

68号の特集は研究大会でのシンポジウムと討論の再録である。同シンポジウムは、筆者が参加したこの種の企画の中では、参加者の熱気という点でも、討論のかみあいという点でも、もっとも成功したもの一つであったと思う。奥村宏論文

は、日本では株式会社が実体化して経営者と従業員を包み込んでいるという有名な「法人資本主義—会社本位体系」論の要約である。熊沢誠論文は、日本企業における正社員の「働きかせ方」を緻密に考察しており、ホワイトカラー労働者に対して過大なノルマを「きっとやります、やらせてください」と「自己申告させる」しくみのくだりは特に筆者の印象に残っている。討論で熊沢氏は、日本の労働者の多くは「価値意識としては集団主義」的であるが、「生活を守る手段としては徹底的に個人としてがんばってゆかなければならぬと考えている個人主義者」になっており、「日本の労働者が復権させるべきものは何よりも生活を守る手段としての集団主義」であると指摘した。この指摘は、個人主義と集団主義の関係を考え直すうえで、大いに示唆的であり、「日本社会のなかで裁判闘争がこれほど重みをもち、唯一の闘争形態となっていることのもつ意味は深刻である」という渡辺治氏の指摘とも重なり合うものである。成瀬龍夫論文は、トヨタシステムをフォーディズムに代わる新しいシステムとみなす潮流を批判しており、当時のトヨタシステム礼賛の状況をよく伝えている点でも興味深い。

70号の特集では、過労死労災認定闘争弁護団の一員である川人博氏が、過労死問題から感じた経済理論・経済統計の現状への疑問と期待を包括的に提起した。労働者やILOの労働時間統計の問題点を詳細な検証を行った福島利夫論文はこの提起に部分的に応えている。伍賀一道論文と仲野組子論文は、それまで大企業中心に行われてきた企業社会分析の視野をその周縁にある労働市場にまで拡大したもので、前者では不安定雇用労働者・女性パート労働者・外国人労働者の増加と「働きすぎ社会」の関連が、後者では特に外国人労働者受け入れに関わる政府・財界の底辺労働者創出政策が分析されている。

ここで、後に企業社会論が家族やジェンダーの問題を取り入れる起点となった67号の特集「女と男の経済学」についてもふれておこう。当時、男女雇用機会均等法施行からすでに5年を経ていたが、弁護士久米弘子氏の報告が示すように、部分的前進にもかかわらず、「雇用のあらゆるところに男女差別が根強く大きく残っている」状況で

あった（今もそうだが）。柴田悦子論文は、婦人問題論争・女性問題論争の歴史を整理し、その意義を「従来、社会学の領域として聖域化されていた家族・家庭問題へ経済学的アプローチを可能」にした点に求める。角田修一論文は、柴田論文でふれられている「マルクス主義フェミニズム」の問題提起を真摯に受け止めたうえで、この潮流がそれ以前の近代フェミニズムと同様、「資本制大工業における男女の結合労働の意義と古い家族制度解体の促進作用を過小評価している」点に理論的な弱点があると指摘した。67号の特集自体はまだ企業社会論と直接結びつくものではなかったが、70号ではすでに前述の伍賀論文が、性別役割分業のあり方を日本の「働きすぎ社会」と不可分のものとする視点を打ち出しており、こうしたジェンダー視点の攝取が、後に「日本型企業社会と女性」（第77号）、「日本型企業社会と家族」（第78号）などの特集につながってゆくのである。

企業社会論に関する一連の特集は大きな反響を呼び、『通信』に掲載された基礎研内外の論者の論文をもとに編集された『日本型企業社会の構造』は、基礎研の出版物としては『人間発達の経済学』以来のヒットとして、短期間に版を重ねた。この成功の要因としては、テーマ設定が当時の切実な問題にストレートに応えるものであったこと、研究所外のすぐれた研究者との学問的交流を繰り返したこと、従来の理論的枠組みにこだわらない柔軟なアプローチを試みたこと、などの諸点をあげることができよう。しかし、現在からみると、日本経済の暗転を予期しえなかつた点は別にしても（筆者自身も株価の急落の影響は限定的なものだと考えていた）、一連の分析にはいくつかの限界があった。ここでは、理論面の問題として、資本主義一般と区別される「日本型企業社会」の概念上の位置が必ずしも明確にされなかつた点、また実証面の問題として、生産過程における労働者支配の構造に关心が集中するあまり、そうした構造と日本経済のその他の構成要素（企業内の統治システム、政治家・官僚と企業の関係、資本市場の株価・地価本位的構造、国際市場での競争環境など）とのかかわりでとらえる視点が弱かつた点をあげておきたい。

IV その他の特集

64号の特集「世界経済論の課題を探る」はシリーズ『今日の世界経済』の各巻の編集者（関下稔、中村雅秀、林堅太郎、奥田宏司、森岡孝二の各氏）が行った報告と討論の記録であり、資本主義による社会主義の吸收、アジアNIEs台頭の評価、日米関係、多国籍企業による知的独占、ME革命の国際的波及過程、国際金融恐慌の可能性、国際通貨ドルの行方、日本の生産システムと日本資本主義の特殊性の把握など多岐にわたる問題が論じられている。アメリカ経済の長期的衰退という当時の認識は、90年代後半のアメリカの繁栄を知るわれわれからみて一面的なものに映る。しかし、ここ10年間余りの日米経済の急激な変化は、景気循環レベルの諸現象から長期的傾向に関する判断を下すことがいかに困難であるかを物語っており、そうした点からみれば、アメリカの衰退というテーマの当否に結論を出すのは時期尚早であろう。

69号の特集「地域再生の課題」は中谷武雄編集委員（当時）を中心として四国在住の所員により編集された。内発的発展論を中心に地域経済論をサーベイした福田善乙論文を受けて、中谷論文が全国的なリゾート開発推進政策の問題点を、鈴木茂論文が愛媛県のリゾート開発計画の現状を、橋本一論文が香川県における地域開発史を、それぞれ詳細に検討している。リゾート事業が地域経済の活性化につながるには、地域の基幹産業の振興政策（産業おこし）との連動、景観や歴史的観光資源の積極的活用、住民の主体的参加などの条件が必要であるという鈴木・橋本両氏の指摘は、80年代のリゾートブームが自然環境と地方財政に残した負の遺産を想起するとき、重い意味をもっている。

V 種々の連載企画

特集以外の連載企画を見ると、まず「研究者群像」では、木原正雄先生、関恒義先生、故藤本武

先生、宮本憲一先生、黒川俊雄先生、故川口弘先生、早川和男先生（登場順）といったそうそうたる方々が、それぞれに味わい深いお話をされている。なかでも川口先生のインタビューは、単独で聞き手をつとめたことや、誌面には出ていない心温まるロマンスをお聞かせいただいたことで、筆者にとって特に思い出が深い。

この連載の「特別編」として、64号では、大企業に勤務しながら20年にわたって「働きつつ学ぶ」経済学研究を続けた十名直喜氏が登場し、現場で働きながら学ぶことの「何物にも変えがたい強み」を熱く語っている。

63号から始まる「入門講座 近代経済学とマルクス経済学」は、大西広氏を中心として企画された連載であり、効用価値説と労働価値説の「補完関係」を論じた大西自身による第1回に続いて、筆者も第2回（64号）で労働価値論の問題点を指摘し、価格と利潤に関するマルクスと新古典派の把握の相違についての当時の自分の考えを述べた。その後、68号で二神孝一氏が新古典派の労働市場論を、69号で吉田央氏が取引費用論を、70号で伊藤国彦氏が経済循環論をとりあげている。（連載は71号以降も中断を伴いながらなお数回続いた。）大西氏は企画の趣旨について、「近代経済学とマルクス経済学の違いを明確にし、また両者の接点を探り出す」「それをやってはじめて本当のマルクスやエンゲルスやレーニンを『初発見』（『再発見』ではない）できる」と述べているが、これは必ずしも執筆者に共有された認識ではなかった。また筆者も、編集局員として講座に関わる中で、異質な理論間の＜対話＞や相互攝取が思っていたほど簡単ではないことを痛感した。

68号からの新連載「現場からの発信」は、もっと現場に根ざした内容を、という読者の要望に応えるべく、労働と生活の「現場」の問題を相互発信する場を設けたものである。編集局としてもかなりの意気込みをもって臨んだが、はりきりすぎて第1回に一挙4本を掲載したのがまずく、その後発信者の組織が続かなかったために、残念ながらまもなく息切れに終わった。

二宮編集長（当時）の発案により69号からスタートした新連載「権利を創る」は、人権や民主主義の「具体的な内容は、たえず現実の歴史のなか

で、人々の努力とたたかいのなかで創造されてゆくもの」という立場から、さまざまなく新しい闘争にスポットをあてようとした企画である。第1回は当時話題を呼んだ『三洋電機はんパートのおばちゃんでえらいすんまへん』(有田芳生著)の主人公である三洋電機定勤パート労働組合(解雇撤回による和解後解散)に、また第2回は残業規制・業界民主化闘争のため『10000人の証言

—損保労働の原点を問う』をまとめ全日本損害保険労働組合にインタービューを行った。筆者はどちらの取材にも参加したのだが、今回久々に読み直してみて、新鮮な感動があったし、また権利の創造において個々の具体的な運動や闘争がはたす役割の大きさを改めて確認し直す機会となった。

今回10号分の『通信』を通読して改めて認識したのは、日本型企業社会論という課題設定が

(次頁へ続く)

Message

「生活賃金（リビング・ウェイジ）」論の展開を

中川スミ

いまアメリカの地域レベルでは、地方自治体と契約を結ぶ企業はそこで雇用される労働者に「リビング・ウェイジ（生活賃金）」を保障しなければならないという「生活賃金条例」を制定する運動が、労働組合や学生活動家、女性団体や市民団体などの連合体を担い手として拡がっているという。この運動は組織率の低下に悩む労働運動の再生の契機としても期待されており、日本の労働運動でもこの経験から学ぼうという動きが始まっている。他方、ILOは労働の国際的基準として「ディーセント・ワーク（人たるに値する労働）」を掲げてきた。

働く人々にとって「生活できる賃金」の要求は当然すぎるものであるが、この要求は、時代や社会によって異なる階層の人々によって異なる文脈のもとで掲げられてきた。戦後日本の場合、「生活賃金」の要求は「生活給」、すなわち男性労働者が妻子を養うに足る賃金（＝「家族賃金」）の要求として了解され、男性労働者を中心とする労働組合運動のなかで掲げられ、闘われてきた。

だが、同じ時期に進展する「雇用の女性化」のもとで、日本の女性労働者は増大し、いまでは雇用労働者の4割を占める。その女性労働者は、日本に特有な賃金・労働条件の重層的格差構造のなかで、低賃金、低条件の労働に位置づけられてきた。この低賃金の女性労働が「日本の経営」の国

際競争力を支える基盤の一つとなってきたのである。さらにバブル崩壊後の長期不況の今日では、ただでさえ高かった女性労働者の非正規雇用率が恐ろしい勢いで上昇し、いまや5割に迫ろうとしている。

ところで雇用の「流動化・多様化」、すなわち非正規化は、近年、女性だけでなく男性労働者にも及んでおり、いわゆる「日本の雇用慣行」の動搖・解体が進行している。その結果、妻子を養うに足る賃金としての「家族賃金」を保障される階層は限りなく小さくなるとともに、男性が妻子を養うべきだという考え方そのものが人々を拘束する力も弱まってきている。これはまさに、「家族賃金」が実態としても規範としても解体しつつあることを意味している。若い男女は、ともに働くければ生活が成り立っていないことを知っているし、そのような条件なしには、結婚や出産に踏み切ることさえできない状況が広がっている。

男女がともに「ディーセント・ワーク」で働き、ともに「家族責任」を担えるような新しい家族のあり方をつくりだすこと、そのための「リビング・ウェイジ」の新しい内容や、性・年齢・学歴・雇用形態などに問わらず労働に応じて支払われる生活賃金の基準を新たに構想していく課題が、私たちの前にある。

(なかがわ すみ 所員)

持っていた求心力の大きさである。基礎研の研究大会や『通信』の特集テーマは90年代後半以降拡散傾向にあるが、今一度、多くの人々を引きつ

け共通の土俵での議論を可能にするような魅力ある問題の探求が必要であろう。

(もりおか まさし 所員 立命館大学)

Message

『関係性の経済学』の構築を！

福田善乙

私たちはいま額に汗しながら毎年500兆円にのぼる富（国内総生産=GDP）を生みだしており、十分経済的な豊かさの条件をつくりだしている。しかし、現実はリストラ、賃下げ、医療費や税負担の増加で豊かさを実感できないでいる。一方、雪印食品や日本ハムなどの不正偽装問題、東京電力のトラブル隠し問題、協同という名がつく農協の不正出荷問題などモラルハザード（倫理の欠如）が横行している。他方、無差別殺人といわれるような殺人事件も多くなっている。

いま、なにが問題になっているのか。「豊かさ」といってもいろいろの基準があるが、そのなかでもっとも欠けているのはなにか。私は「関係性」（循環性を含む）の欠落ではないか、すなわちお互いの「関係性」が貧困になっているのではないか、と思っている。

国と国との関係、人と自然・環境との関係、人ととの関係、親と子との関係、職場・学校・地域での人ととの関係、生産一流通一消費をめぐる人ととの関係が市場原理やグローバリゼーションのもとでズタズタに引き裂かれているように思われる。

そのなかで人間は引き回され、「不安」というよりも「不信」の時代になっている。だから、こ

のお互いの不信を取り除き、どのように信頼関係をつくりだすのかが大切になっている。このズタズタに引き裂かれた関係を再生するためには、人間がお互いに豊かになっていくこと、すなわち「共生性（共創性）」が大切になっている。テレビドラマの「北の国から」は自然・環境の大切さや家族愛だけでなく、「手間返し」「結」という「絆」が強調されていたが、そこに一つのヒントがある。

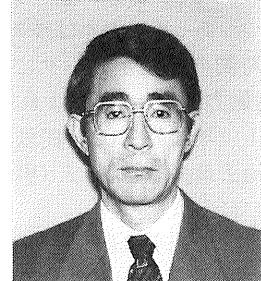
それゆえ、「豊かな関係性とはなにか」「関係性をどうつくるか」「共生（創）性とはなにか」「共生（創）性をどのようにつくるのか」を基軸にすえた、すなわち「関係性」をキーワードにした経済学が求められているように思われる。それは「人間の相互発達の経済学」になるのかも知れない。

現在、「Quality of Life」（生命の質、生活の質、人生の質）や労働の質が問われているとき、「関係性の経済学」「共生（創）の経済学」の構築を提唱したい。私がいま街路市、朝市や直販所などの調査にとりくんでいるのも、この「関係性の経済学」を求めてのことである。

(ふくだ よしお 所友 高知短期大学)

本誌の集団的討論から 生まれた日本型企業社会論

第71号～第80号



MORIOKA Kouji
森岡 孝二

I キーワードは「企業社会」

本稿は『経済科学通信』の71号（1992年11月）から80号（1996年2月）までを対象とする。この間の第一のキーワードは、この期に先行する数号にも登場する「企業社会」である。

この言葉は、もともとは、「職場社会」や「仕事の世界」を基礎に一定の価値、利害、文化などを共有する企業内コミュニティをさすものとして用いられてきた。しかし、1980年代の後半から、この言葉は、「企業中心社会」というときと同じように、企業内社会にとどまらず、家族社会や地域社会を含め、企業が社会を支配するような、日本の社会システムの一般的特徴をあらわすものとしても用いられるようになった。

本稿が扱う本誌各号の特集や論考においても、「企業社会」という言葉は、労働者の家族生活や消費生活が視野に入れられている点で、多くの場合、後者の意味で使われている。そのことは、すでに65号（1990年12月）で「企業社会ニッポン」が、また68号（1991年11月）「解剖！ 企業社会ニッポン」が特集され、市民社会をも包む「企業社会ニッポン」の変革が課題となっていた点からも明らかである。これらの特集論文に他のいくつかの論文を追加して生まれた、基礎研編『日本型

企業社会の構造』（労働旬報社、1992年）——これは『人間発達の経済学』（青木書店、1982年）につぐ基礎研ベストセラーになった——をみれば、そのことはいっそうはっきりするだろう。

この時期に日本社会の全体構造が「企業社会」として語られるようになった背景には、1980年代をとおして、日本がいよいよ経済大国、企業大国になりながら、日本人は相変わらず働きすぎで、国民生活はいっこうに豊かにならないという現実があった。日本は1人あたり国民所得でみれば世界でもっとも豊かな国の一でありながら、1人あたりの自由時間でみれば先進国のうちでもっとも貧しい国である。こうした現実を説明しようとして、経済学、社会学、政治学を巻き込んで、「豊かさ」論がにわかに盛んになってきたが、その際に、「働きすぎ社会」日本の「豊かさ」の特異性を規定するキーワードとして浮かび上がってきたのが、広い意味での「企業社会」であった。

企業社会論の企業内社会論から全体社会論へのこうした転換の決定的な推力となったのは、1980年代後半における過労死の社会問題化である。大阪では、1981年に全国に先駆けて弁護士や産業医を中心に「急性死等労災認定連絡会」（現在の「過労死問題連絡会」の前身）が発足した。翌年には同会代表の田尻俊一郎氏ら3人の医師によって、『過労死』（労働経済社）という研究書が出版された。しかし、「過労死」という言葉とそれが

示す社会病理現象が広く社会問題化したのは、それから7年後の1988年に、大阪（4月）と全国（6月）で「過労死110番」が開設されてからである。金融と生産が過熱してバブルがピークに達しつつあったこの年は残業時間の増大によって労働時間の延長がピークに達した年でもあって、『労働力調査年報』によれば、1988年の週60時間以上（年間約3100時間以上）の超長時間労働者は過去最高の777万人（男性に限れば約4人に1人）に上った。

本誌で過労死問題を正面から取り上げた論考は、60号（1989年7月）の拙稿「過労死—働きすぎ社会の告発」が最初であろう。この年、基礎研は、それまでの資本論講座の積み重ねを基礎に、『資本論』（第1巻）を「働きすぎ社会」を批判し、「ゆとり社会」の創造を説いた書物だと見る視点から、『ゆとり社会の創造—新資本論入門12講』（昭和堂）というテキストを出している。このなかでも日本が「働きすぎ社会」であることを示す冷厳な事実として見据えられているのは過労死問題である。

過労死問題が企業社会論の視野を企業内から企業外の社会へと広げる契機となった理由については多言を要しない。先に挙げた拙稿には、NHKドキュメンタリー'89「過労死・妻は告発する」からとった「妻は告発する」という節がある。そこでは過労死は、死ぬまで働く男たちの問題であるだけでなく、夫や親を会社に奪われた妻たちや子どもたちの問題でもあることが強調されている。こういう状態を前にしては、企業が家族を押し潰すまでに深く社会に侵入することによって、社会のありようが家族や地域にいたるまで

「企業社会」と化していることに目をつぶることはできない。

II 企業社会論でどんな特集が組まれてきたか

71号から80号までに、企業社会に関するテーマで企画された特集は、合計7号に上っている。以下で個別に内容に立ち入ることはほとんどできないので、煩をいとわず題目と筆者を列記しておこう。

特 集

第71号（1992年11月）

特集テーマ：企業社会の転換と文化

残業およびサービス残業の実態と労基法改正の必要性（森岡孝二）

レギュラシオン学派による「日本の労使関係」論批判（黒田兼一）

日本型産業社会の現状と展望（池上惇）

消費社会と文化（角田修一）

眞の「文化経済学」とは何か（大西広）

第73号（1993年7月）

特集テーマ：企業社会の変革と人権論

労働法における個人と集団（西谷敏）

第3世代の人権論と発達研究の課題（田中昌人）

企業社会からの自立と人権・主体形成（二宮厚美）

第74号（1993年12月）

特集テーマ：24時間化社会

24時間化社会における労働と生活（鷲谷徹）

24時間社会と放送（田比良敏夫）

働きすぎ社会と家族（佐藤卓利）



第76号(1994年5月)

特集テーマ：日米における労働時間短縮の障害

資本主義と労働時間（ジュリエット・ショア）

『働きすぎのアメリカ人』翻訳の経過（川人博）

『働きすぎのアメリカ人』を読んで（中川スミ）

脱テーラー主義への展望について（若森章孝）

近代企業、その境界と制約（ルイス・ヒロセ）

日本型企業社会と性別役割分業をめぐって——大

会印象記（中川スミ）

第77号(1994年10月)

特集テーマ(1)：日本型企業社会と女性

日本型企業社会を超える（大沢真理）

日本型企業社会と女性労働・家族（中川スミ）

企業社会克服の戦略（木下武男）

第78号(1995年4月)

特集テーマ：日本型企業社会と家族

日本型企業社会と家族（木本喜美子）

日本の労働者の人権と家族（宮地光子）

日本型福祉社会と家族（佐藤卓利）

第79号(1995年8月)

特集テーマ(2)：企業社会と経済の国際化

日本型企業システムとその転換の現局面(十名直喜)

国際産業調整と地域経済の変容（岡田知弘）

持続可能な発展を築くグローバル・システムと

ローカル・イニシアチブ（遠州尋美）

どのような転換をはかるべきか(アイリーン・スミス)

住民が主人公の地域づくりに向けて（木村雅英）

これらの特集に収められた論考以外にも、71号から80号の間には、書評を含め広狭の企業社会論を直接・間接にテーマとしたものがいくつもある。以下にそれらをリストアップしておこう。

論文・講演

「福祉国家の日本の特質と現段階」72号（横山寿一）

「日本型生産システムのゆくえ」74号（大須正明）

「トヨタ生産方式と労働のありさま」74号（千田忠男）

「日本型企業社会と労働時間」75号（森岡孝二）

「日本型企業社会と労働組合運動の課題」講演、79号(下山房雄)

「男女賃金格差と人事考課」78号（黒田兼一）

書評

望田幸男・大西広著『ゆれる大人=男性社会』71号（古来勝巳）

川人博著『過労死社会と日本』71号（水野喜志彦）

基礎研編『日本型企業社会の構造』72号（米田康彦）

西谷敏著『ゆとり社会の条件』73号（伍賀一道）

J・ショア著『働きすぎのアメリカ人』74号（有井行夫）

十名直喜著『日本型フレキシビリティの構造』74号（成瀬龍夫）

森岡孝二編著『現代日本の企業と社会』77号（井上秀次郎）

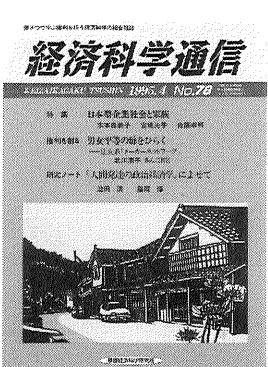
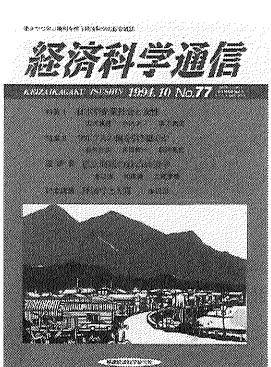
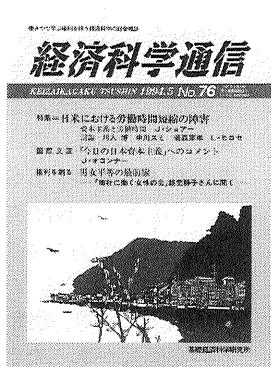
基礎経済科学研究所編『文化中心社会の条件』77号（後藤和子）

野村正實著『トヨティズム』（青木圭介）

森岡孝二著『企業中心社会の時間構造——生活摩擦の経済学』（岩城穣）

III 企業社会論の残された課題

日本社会を企業社会としてとらえようとする場合、出発点および基礎となるのは狭い意味での企



業社会である。当然、特集を含む前出の諸論考のなかでも、生産システム、労働時間、労使関係、賃金、人事考課、女性労働など、労働者の職場生活にかかわる問題群が考察されている。

しかし、職場社会から出て広義の企業社会を見ようとすれば、これもまた前出の諸論考にあるように、企業を取り巻く産業社会、消費社会、家族社会、地域社会が考察の対象に上ってくる。また、それとともに、問題が人間の尊厳や個人の尊重や両性の平等にかかわる限りでは、個人の自立や権利能力や人権の状態が論点として浮かび上がってくる。

これらの点では、本誌の編集はおおむね成功しており、各論文はそれぞれに与えられた課題に応えている。しかしながら、発展させるべき課題がないわけではない。

その一つは、すでに本誌65号において、渡辺治氏の『豊かな社会』日本の構造』(労働旬報社、1990年)に寄せて、十名直喜氏が「日本型企業社会の構造とその変革視点」で述べていた日本社会の「近代性」の特質、あるいは「前近代性」「後進性」の残存の有無の問題である。米田康彦氏は、本誌所収の諸論文をもとに編まれた『日本型企業社会の構造』(9人の筆者のうち4人——渡辺治氏、伊藤誠氏、奥村宏、熊沢誠氏——は所外)を書評して、「おおまかな印象でいえば、基礎研メンバーの側に前近代的要素を強調する色彩が強いのにたいして、それ以外の論者が(それぞれ方法を異にしながら)近代的要素を重視する意見が多いように見受けられる」(72号、62ページ)と指摘している。

米田氏の読み込みは、やや単純にすぎるよう

思われる。十名氏がいうように、渡辺氏は、「戦前の講座派が重視した日本社会の後進性の根拠は、戦後改革と高度成長によって基本的に一掃された」(45ページ)といい、近代化された日本社会への「資本主義原理の過剰貫徹」を説いている。米田氏は渡辺氏のような見解をもって、「近代的要素を重視する意見」とみなし、それとの対比において、十名氏のような考えを「前近代的要素を強調する色彩が強い」とみているのである。しかし、十名氏は、渡辺氏の見解にたいして、一方で「日本社会の前近代性の根拠は法律や制度等といったフォーマルな面では戦後改革と高度成長によって基本的に一掃されたといえよう」として肯定しながら、他方で「契約関係や公式のルール等に基づかない社会慣行や人間慣行等のインフォーマルな面においては根深く生き残り、地下に潜行しながら現代社会への無視することのできないほどの大きな影響力をなおも行使している」と異を唱えているのである。

基礎研が重視してきたマルクス『資本論』の労働日章が私たちに教えてくれるのは、資本主義原理の貫徹は社会の近代化を促すのではなく、むしろ資本主義原理の過剰貫徹に対する規制の確立、すなわち労働時間の制限と短縮こそが社会の近代化を促すということであった。このことからすれば、資本主義原理(市場原理あるいは利潤原理と言い換てもよい)が十分な社会的な規制を受けずに過剰貫徹する社会——それは労働者を奴隸状態においやる——を近代化された社会ということはできない。今日の日本が社会的規制の不足が資本主義原理の過剰を生み出している国だとすれば、マルクスの視点はなお有効性を保っている。

ただし、労働時間の規制論ではマルクスも批判を免れない。彼は女性を男性の従属的存在にとどめる家父長制が資本主義によって利用される関係を認識しているながらも、家父長制は資本主義の発展とともに消滅していくものと考えていたようと思われる。当時、J. S. ミルが指摘していたように、工場法(十時間法)は、女性を子どもと同様に自己決定能力をもたない従属的存在とみなして、女性を保護するという名目で女性労働を特別の制限下におき、女性の職域や就業機会を狭めるという側面があったが、マルクスは家父長制の頑



固さを軽視したせいもあって、工場法のこの側面にはまったく注意を向けていない。

マルクスの責任ではごうもないが、資本主義の発展にもかかわらず家父長制を起源とする性差別が職場と家庭の両面において残りつづけてきたし、日本ではいまも強固に残っていることは周知のことである。これも社会の近代性の評価にかかる重大な論点である。

話がマルクスにそれたが、日本社会の「企業社会」的特質とその「近代性」と「前近代性」の歴史的性格をめぐる議論は、本誌ではまだ決着がつけられていない。これを深めるにはマルクスの問い合わせ直しを含む、私たちの資本主義理解の問い合わせ直しが避けられないだろう。

企業社会論として残された課題でいま一つ指摘しておくべきは、消費社会の問題である。76号では『働きすぎのアメリカ人』(窓社、1993年)の著者のジュリエット・ショアを招いて行われたシンポジウム「資本主義と働きすぎ社会——日米における労働時間短縮の障害をめぐって」の記録が特集として掲載されている。そこでショアは、アメリカにおける障害として、消費主義（コンシューマリズム）の問題を取り上げて、消費主義の時代には、労働者は労働生産性の上昇があるもとでも、労働時間の短縮ではなく、消費の増加、したがってまた所得の増加を追い求める傾向があるという。彼女はそれを「ワーク・アンド・スペンド・サイクル」（働きすぎと浪費の悪循環）と名づけ、アメリカ人がいかにその悪循環に陥っているかを問題にしている。この論点をより全面的に展開したのが消費の競争的契機に注目して、アメリカの中産階級上層の過剰消費を分析したショアの『浪費するアメリカ人』(岩波書店、2000年)である。

1990年代末までについていえば、アメリカは貯蓄率が非常に低く、日本は反対に非常に高いという違いがあるが、消費主義は現代の日本に共通する現象である。この点を踏まえ、ジェンダー関係や、ジェネレーション関係にも留意しながら、現代の日本では企業社会が人びとの消費生活にどのような影を落としているか、また逆に消費社会が労働社会をどのように規定しているかを考察することは、これまでのところ本誌ではほとんどな

されていない。71号の角田氏の消費社会論や74号の特集の24時間社会論は、それにいたる橋渡しとはなるが、橋の向こうにはまだ渡っていない。

IV バブル経済はなぜ分析されなかったか

本稿の対象とする71号から80号は、1992年から96年にわたっている。この間は1980年代の後半に発生したバブルの崩壊が誰の目にも明らかになり、日本経済がかつてない長い不況に突入した時期であった。

にもかかわらず、この間に本誌においてバブルの発生と崩壊について正面から考察した論考は、企業社会をテーマにした論考に比べて少ない。標題から見るかぎり、部分的に触れたものも入れてせいぜい広くとっても、71号の入門講座6「近代経済学からみたマルクス地代論」(石上秀昭)、73号の入門講座8「『不況』の経済学」(伊藤国彦)、75号の「金融改革のもたらしたもの」(伊藤国彦)、同号の「バブルと円高」(松本朗)、78号の「90年代不況と日本経済の行方」(菊本義治)、同号の書評の山口義行・小西一雄著『ポスト不況の日本経済』(松本朗)、79号の「国際産業調整と地域経済の変容」(岡田知弘)くらいである。

現実の変化をあとから追いかける経済学にとっては、現実が激しく変化する時代であればあるほど、理論的・思想的現実と歴史的現実との間にある程度のタイムラグが生ずることは避けられない。しかし、本誌においてバブルの発生と崩壊に関する考察が少なかった理由はこれだけでは説明できない。

株価の動きからいえば、バブル崩壊の兆しは、1990年の夏には見えはじめ、92年になると、故・宮崎義一氏の『複合不況』(中公新書)がベストセラーとなるなど、人びとの関心はバブル崩壊後の不況に集まっていたが、『経済白書』は93年にいたって、不良債権問題について致命的弱さをともないながら、ようやく「バブルの発生・崩壊と日本経済」を主題に取り上げた。この場合の現実

と理論のズレは、事態を冷厳に観察せず、万事楽観的に描き出そうとする政府・経済企画庁の理論的、政策的スタンスの結果だと説明することができる。

本誌におけるバブルと不況をめぐる現実と理論のズレが『経済白書』のそれと異なることはいうまでもない。このズレの理由については、本誌編集委員会が企業社会論を特別に重視し、バブル経済論や不況論を犠牲にしてでも、企業社会の諸問題の考察に誌面をさいてきただからであると説明できるかもしれない。しかし、この場合の企業社会論は、狭義の企業社会論ではなく、企業中心あるいは会社本位と言われる日本社会の全体構造に及ぶような広がりをもつものであってみれば、この理由はあたらない。なぜなら、経済的な側面からみた日本社会の全体構造には、バブルを発生・崩壊させた企業・銀行関係とそれを内包した金融・財政システムが深くかかわっているに違いないからである。

ここで振り返れば、68号の特集「解剖！企業社会ニッポン」には奥村宏氏の「『会社本位』の構造」が入っていた。彼は株式所有の法人化と法人の株式相互持合いを特徴とする企業間関係を重

視して、日本資本主義を「法人資本主義」ととらえ、そこから「会社本位主義の構造」を説明している。これの理論的成否をめぐっては議論があるが、奥村氏の法人資本主義論を一つの企業社会論とみなすなら、私たちの前に企業間関係や金融システムを重視した企業社会論の有力な先行研究があることは確かである。私が書いたものを含め、奥村氏の論考を除く本誌の考察がこの視点を欠いていたということが、おそらくは、本誌が企業社会論を集団的に展開しながら、日本資本主義に特有の企業間関係や金融システムの諸問題を取り込んで、バブルの発生と崩壊、そしてその後の長期不況を全面的に論ずるまでに至らなかつたほんとうの理由であろう。

本稿が対象とする期間には、「21世紀への挑戦」（基礎研25周年記念号、1993年6月）と、「入門者の経済学」（75号、1994年3月）の総特集が組まれている。これらについてもいうべきことは多いが、本稿もまた企業社会論に紙幅をさきすぎて、他のことを取り上げる余地がなくなってしまった。まことに「言うは易く行うは難し」である。

（もりおか こうじ 所員 関西大学）

Message

一度きりの人生を有意義に

小野 満

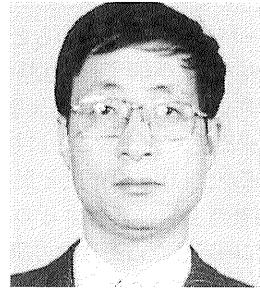
「通信」100号おめでとうございます。私が基礎研にはじめて出会ったのは1975年の「資本論講座」でした。「通信」はたしか13号で、とても難しくてほとんど理解できていませんでした。基礎研に参加したという実感がもてたのは、77年大阪第3学科「金融・流通・協同組合論」ゼミに参加したときでした。以来25年、よくここまで育てていただいたものと感謝しています。まさに「通信」とゼミのおかげです。基礎研で学んだ一番大切なことは、自分で考えるということ、それを表現することです。私も今年「古希」を迎え、

職場も半分離脱している状態です。定年後の人生を「第2の人生」という考え方がありますが、私はこの考え方はとりません。個人にとって人生は一つです。その大切な時間を「貨幣」の獲得のために割かねばならないというのは悲しい事実ですが、その中で時流に流されることなく自分の考えを確立しそれに基づく人生を歩みたいものです。「通信」がその支えになってくださることを期待します。すばらしい「第2の人生」などというものは待っていてもきません。

（おの みつる 所員 染色会社）

資本主義と市場の生命力、 東アジアの明暗への注目

第81号～第90号



FUJIOKA Atsushi
藤岡 恒

81号（1996年6月発行）から90号（99年7月発行）までが、私の担当となった。米国は空前のIT好況に沸き、日本の不況はいっそう深刻化し、東アジア諸国は、中国をのぞいて通貨金融危機に直面し資本主義の光と影の両面を体験した時期である。この3年間に発行された10号分の雑誌をまとめて読んでみた。

まず全体の論調を概観するために、各号の特集を紹介しよう。81号は「岐路にたつ社会福祉」、82号は「インターネットの経済学」、83号は「企業・国家・市民社会」、84号は香港の中国への返還をにらんで「中国の香港」、85号は「新国際分業とアジア」、86号は「規制緩和と労働」、87号は「国際金融システムとビッグバン」、88号は「what's NPO?」、89号は「不況のゆくえ」、90号は「中小企業の挑戦」をそれぞれ特集している。81号から86号までの編集局長は大西広さん、87号以降は森岡真史さんに交代したが、大西広・神谷章生さんが副編集局長となり、森岡さんを支える体制を組んで編集された。

最初に81号をとりあげる。この号の白眉は、大泉英次さんの「住専・不良債権問題と不動産金融」であろう。ただ惜しむらくは、住専への公費投入の是非という時論の枠内での議論であり、いささか視野が狭い。本来の対象は、今次デフレ不況の根源をなす土地と株式の資産デフレの問題であるはずだ。数十年にわたって資産インフレを作

り出すことで、景気の正常な循環を押しつぶしつつ高度成長をとげてきた日本のような国が、矛盾の極に資産デフレに反転したばあい、どのようなすさまじいデフレ圧力にさらされるか。世界史はこのような事態を、1929年のアメリカ、90年以降の日本、そして2001年以降のアメリカと、三度経験しているが、このような経済的惨事から何を学んだらいいのか。本来、土地とはどのような財貨であり、どのように取り扱うのが正しいのかも論じてほしかった。そうでなければ、多数の自殺者を含む犠牲者は浮かばれまい。

1995～96年は「インターネット元年」と呼ばれ、情報技術革命のブームに火が着いた年であるが、82号では一転して「インターネットの経済学」を特集している。編集局の時代感度の良さには脱帽するが、「インターネットの経済的意義」を論じた野口宏論文を除くと、IT革命の「基礎」的で「経済科学」的本質に触れた論稿は乏しく、やや期待はずれの感がする。なおこの号から、誌面刷新の改革が行われ、トピックスや政治学入門シリーズが始まった。副編集局長の神谷章生さんが、政治学入門の第1回目として、「制度の政治学と比較政治学」を書いている。

1996年の夏季研究集会は、「21世紀の企業原理と市民社会」というテーマで行われたが、83号の特集「企業・国家・市民社会」は、その成果を収録したものである。山口定さんの記念講演は、

「ポスト福祉国家政治と市民的自立」という論稿にまとめられている。短文ゆえに意味が判然としないところもあるが、ケインズ主義的な福祉国家は、すでに寿命が尽きた。こんご諸国家は、グローバリゼーションのもとで国際競争に打ち勝つための「競争国家」の性格を強めることは避けられず、国家財政は国際競争力を開拓する分野に、もっと投入されることになろう。したがって福祉国家が、自立した市民と民間部門とを前提にした「福祉社会」に変容するのは必然であり、この動きに即応した市民運動の刷新が望まれるという趣旨のようであった。同様の問題意識をさらに膨らませ、体制内の新自由主義型改革の応援団を買って出るまでになったのが、後房雄報告であった。81号所載の横山寿一さんや岡崎祐司さん、それに二宮厚美・渡辺治さんたちの「新型福祉国家」をめざす路線とは、方向を異にしていることは明らかである。

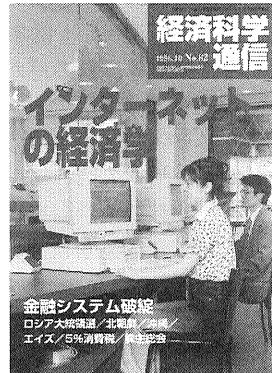
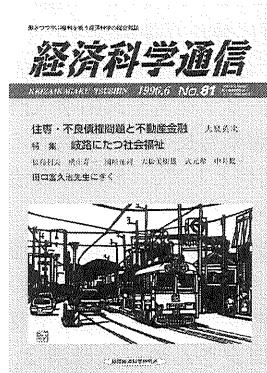
「アンチ福祉国家」の福祉構想としての「市民所得保障制度」を提唱する小沢修司さんの見解、88号所載の川口清史さんの見解、91号所載の「スピリチュアル・シングル主義」を掲げる伊田広行さんの見解、さらに言うと評者のアジェンダ提案(96号所載)などは、両陣営の中間に位置し、福祉国家の建設と市民社会の強化とを結合することで、「政府の失敗」「市場の失敗」の双方を乗り越えようとする志向をもっている。惜しむらくは、討論が生えのまま終わっている。何が相違点かを確定したうえで、建設的な論争組織のイニシアティブをとってほしい。関連して小堀眞裕さんの「市民・企業・国家をめぐる英国政治の動き」は面白い。小堀さんは、集団主義や団結という名

のもとに、個人の自立や自己決定権を侵害されることに対する感度が低い旧(国家主義的)左翼のありかたを批判する。そして個人主義が、資本主義に接合され利己主義に至るか、新しい「ラディカル政治」の地平に至るか、という2つの道があると述べている。この指摘は、個人単位主義を提起するとともに、そこに至る道は2つあり、「エゴ・シングル主義」の道と「スピリチュアル・シングル主義」の道とが対立しあっていると論じる伊田広行さんや評者の見解とも近い。

96年の研究大会の全体会では、3人の先輩研究者による重厚な報告がなされた。醍醐聰さんの「企業活動の情報公開と市民監視」、森岡孝二さんの「企業活動の市民的監視と株主オンブズマン」、横田 茂さんの「大蔵省改革の課題——財務官僚制の市民的統制をめぐって」がそれであり、その内容は83号に掲載されている。

84号は、香港の中国への返還を特集している。まず、香港で銀行員の生活を体験してきた佐藤進さんが、「香港返還の歴史的意義」を論じ、イギリス統治下で享受してきた「ブルジョア民主主義」が、中国統治下で「ブルジョア独裁」に包摂されていく可能性が高いと述べている。中国出身の桃国利さんは、中国本土との経済一体化が進む現状をサーベイし、大西広さんは、中国が着実に生産力を伸ばし、2020年には、国内総生産で世界一になるだろうという予測を公にしている。

またこの号から、「現代社会批評」シリーズが始まった。黒田慶子さんが、テレビの2つのヒット作——「ロング・バケーション」、「ふたりっ子」をとりあげ、そこに描かれた女性特有の人間発達上の困難を読み解こうしている。出色的の現代社会



批評であった。

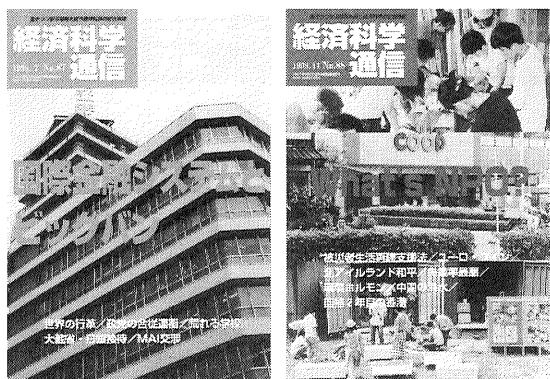
85号では、97年3月に高松の地で開かれた春季研究交流集会の成果をふまえ、「新国際分業とアジア」という特集を組んでいるが、前号に引き続き、「成長するアジアが突如おちいった通貨・金融危機」に注目した特集となっている。前号のテーマを補足すべく、浅井基文さんが「香港返還の意味と問題」というシャープな分析を寄せているし、自由大学院でアジアゼミを主宰している和田幸子さんが、通貨危機下で暗転するタイでの実地調査をふまえて「歴史的転換期の世界とアジア経済」を総括する論稿を寄せている。タイでは、60年代の日本を彷彿とさせる急激な社会変容が進んでいること、この変化は、強大な国際資本を介する抑圧と搾取の体系とは無縁ではなく、根底に自然界の掟に反する活動の押し付けがあるので深刻な環境と生命の危機を伴っていると述べる。と同時に、非暴力の立場にたつ市民運動を整然と展開する条件が成熟しつつあることを説得的に展開している。

上からのマネー主導の近代化は、人間の命の源たる自然と社会に修復不可能なダメージを与える。いったん自然と社会が崩れると、未来社会を造る材料も朽ち果ててしまうために、生産力・科学技術・軍事力の発展を野放しにしないタイプの「もう一つの発展」の道を、世界のNGOが探求してきた。この見地から樫原正澄さんは、「持続可能な農業と農村開発」をめざすオルターナティブな道を探求する東南アジアのNGOの実践と理論を紹介している。また鈴木茂さんは、愛媛県の主要工業都市を事例に、生産基地を中国に移す動きが、産地の空洞化を急速に進めていること

を跡付けたうえで、産地と東アジアとの共存共栄を図れるような国際分業を組織するには、どうしたらよいかを探索している。

鈴木さんの結論は、たいへん示唆的である。外来企業の分工場を誘致しただけの地域が、空洞化への抵抗力を持たないことは当然としても、これまで地場産業が自生的に集積して内発型の発展をしてきた地場産業都市も、いま2つのタイプに分化しつつあるという。すなわち「生産機能に特化して自前の販売チャンネルを構築してこなかった」地域——たとえば問屋の指示どおりの製品を量産し、消費者と向きあう努力を怠ってきた今治のタオル業界は、安価な輸入品の増大に直面して、崩壊の危機に直面している。これにたいして「素材だけでなく多様な製品を加工し、自前の販売チャンネルを構築してきた」地域と企業のばあい、大都会の生活者との同盟を形づくることができるので、新たな成長軌道に乗ることも可能だという。そこでは、「地域固有の技術とノーサウ（知的資産）を基礎に、域内市場だけでなく、全国市場さらには世界市場に販路を拡大しつつある」という。02年度の愛媛大学での研究大会で学んだ事例——美術館の一部に工場がある「タオル美術館あさくら」、有機みかん作りの地域協同組合「無茶々園」、それに内子町の開設した「石畳の宿」が、鈴木さんの指摘どおりになっており、興味深い。

85号所載の小野満さんの「日本と途上国の労働者の競争関係について」、橋本了一さんの「香川県東部の地場産業——手袋業の歴史と課題」は、先の樫原・鈴木さんの探求方向を事例的に跡付けるものとなっており、85号の特集をまとめ



りのよいものにしている。

86号の誌面批評を担当した小林世治さんの表現を借りると、基礎研内外には「資本主義の発展が行き着くところまでいかないと次の社会経済システムには移行しない」という理解、むしろそれを妨げることは移行を遅らせるし、われわれにも被害が及ぶ」ので、グローバリゼーション、自由化、民営化、規制緩和の促進こそが必要であり、その結果としての生産力上昇のなかでこそ、未来の社会主義社会が実現できるのだという「理論」がある。しかし労働分野の規制緩和は、この「理論」の示唆するように主体形成につながり、未来社会の形成につながるのか。主体は「資本主義の矛盾爆発に耐えられないし、新社会建設を担う以前にくたびれはててしまう」のではないか。規制撤廃に賛成すべきなのかという問題をめぐって多様な論者が追究した成果が、86号の「特集・規制緩和と労働」である。

まず伍賀一道さんが「規制緩和と労働」という総論的な論文で、労働基準、労働市場、労使関係にかかわる日本の規制緩和政策を正面から検討し、規制緩和によって日本経済の困難を開拓できるという通説の誤りを衝いている。ついで規制緩和が労働現場に何をもたらしているかを、千田忠男さんが鋭く告発し、森岡孝二さんが人間の尊厳と発達を確保するために、労働時間の規制が必要となる意味を原理的に明らかにし、中川スミ、仲野組子、布川日佐史さんの論稿につなげている。ただし要望を述べると、現下のグローバリゼーションとIT革命の情勢のもとでの労働市場の規制緩和が、いかに破滅的な「最底辺に向かう競争」と世界的デフレをもたらす元凶となっている



かを、もっと解明してほしかった。すなわち東側の解体のおかげで、労働力の売り手が20億人から60億人に激増し、他方資本側は、ITという抜群の労働節約型の機械を手にしたこと、さらに地場資本を不動の前提にしていたスマス・リカードの想定とは異なり、資本は日々と国境を越えるが、労働移民の制限は逆に強化され、移動能力における労使間のギャップが未曾有に拡大している。このような事態が、いかに破滅的な結果をもたらしているかの実証的分析がほしかった。

杉本昭七さんの97年の研究大会での講演が「資本主義の発展段階と統合資本主義」という論稿となって掲載されている。杉本さんは、渡辺治さんとの論争のなかで、米国の本質を「現代帝国主義」というタームで把握するのではなく、今や「統合資本主義」として捉えるべきだという主張を展開されている。宇宙と核と情報の霸権を背景に「ならず者国家」に先制攻撃を掛けようとしているブッシュ政権の動向、欧州連合との亀裂、APT（アセアンと中韓日）の胎動を踏まえても、なお杉本さんは「統合資本主義」として現状を捉えるのが正しいと考えておられるのか。その真意を質してみたいという思いにかられる論稿であった。

なお86号で目に付くのは、「権利を創る(8)」に登場された神田浩史さん（地域自立発展研究所）とのインタビュー記事である。勢いのある人、オーラを發する人というのは、どうして形成されるかの典型例をみる記事であった。第三世界相手の開発コンサル企業で6年間働き、ODAの受け手側の地域自立にも人間発達にも有効でさえあるODAがいかに多いかを身をもって学んだ原体験、調査研究・モニター系のNGO——地域自立発展研究所を京都の桂の自宅に開設された事情、95年秋のAPEC大阪会議に並行（対抗）してNGO側の集会を開く中心になった経験、そして「メコン・ウォッチ」やAPECモニターNGO連絡会議、京都自由学校などを組織され、ODA改革を政府に迫るNGO側の調整役を務め、今は世界フォーラム市民ネットの事務局長を務めている神田さんの人間形成の一端がよく分かる記事であった。

87号は、98年3月に金沢で開かれた春季研究集会の成果をもとに「国際金融システムとビッグ

「パン」という特集を組んでいる。特集の背景には、97年春から夏にかけてぱつ発した東アジア諸国の通貨・金融危機、および日本にマネー移動のいっそうの自由化と金融開国を迫る「金融ビッグバン」の時期が迫ってきたという事情がある。「タイの通貨危機」を扱った西口清勝さんの論稿、金融ビッグバンにたいして、「金融の地域化」、地域経済とコミュニティの再生のための地域金融の充実策を提言する松本朗さんの論稿が面白かった。この見地にたって、ぜひ郵便局の民営化問題も論じてほしい。

87号の白眉は海野八尋さんの論稿「地域国民のための金融・経済改革の道」であろう。「グローバリゼーション（ビッグバン）とは国際化の普遍的形態なのではなく、米国の覇権下で進む特殊な形態であり、多国籍企業と米系多国籍銀行による経営資源の世界的活用であり、国民経済の保全と地域経済の発展とは対立する」という事の本質を、この論文は喝破しているからである。金融ビッグバンの原案が、所轄の大蔵省ではなく、金融制度調査会の作業部会から出され、橋本首相のトップダウンで決まった経緯から、日本の支配層もグローバリゼーションをめぐって分裂していると海野さんは説く。橋本首相はじめ、ビッグバン推進派は、対米追随派であり、これにたいして、98年2月時点の自民党幹事長の加藤紘一氏は、円資産の安定確保、アジアにおける円圏形成を志向しており、ビッグバン慎重・修正派であった。他方、グローバリゼーションへの明確な対抗戦略は、世界のNGOが提起しているが、革新系のエコノミストは、「グローバリゼーションへの態度」という点では大混乱をきたしている」と海野さんは説く。すなわち、日本の金融自由化の遅れが金融危機の原因であるという捉え方からビッグバン推進を説く向寿一さんは、橋本首相と実践的には同じ立場であり、アジア圏の形成を重視する立場からビッグバンへの一定の修正を唱える中尾茂夫さんは、加藤幹事長と類似した位置にいるという。

小森治夫さんの著書『日本型地域開発』をめぐる高島嘉巳さんの親身なコメントも面白かった。総じて本誌には、対話の繰り返しのなかで、対話参加者の範囲を広げつつ、一致点を確認しつつ深

めていくという機能が求められているが、実際に1回限りの言いっぱなしに終わっていることが多いすぎる。そのなかでの一般の清涼剤であった。ただ注文を言うと、「水とか、大地とか、遺伝子とか、文化資源といった人間の命の根源にかかる地球共有財」については、そもそも誰のものであり、どのように利用させてもらうのが「正義」に適っているのかを、生物進化の歴史を踏まえて再検討されるべきだと思う。エコロジストとの交流や世界のNGOとの対話も忘れないでほしい。

88号は、98年夏に京都・御室の仁和寺会館で開かれた研究大会の成果を素材に「NGOとは何か」という特集を組んでいる。まず川口清史さんが、「福祉社会の形成と非営利協同組織」というテーマで報告にたった。「福祉国家の解体か再編か」というのが、この特集のモチーフの一つとなっているが、非営利共同組織の多様で豊かな発展をみれば、解体でも再編でもない、福祉国家を超える道を探りあてることができるというのが、川口さんの報告の趣旨であった。これにたいして、横山寿一さんは、「福祉国家のバージョンアップ型の再建」、すなわち新型福祉国家の建設というプログラムを堅持することが、最近流行の、そして川口報告にも影響を与えている「市民・企業・行政のパートナーシップ」論に対抗する道だと提言された。このテーマは、じつは83号の特集の再版であり、その到達点を整理して、解明すべき論点を絞ったうえで集中的に議論したならば、いっそう生産的な議論が期待できたであろう。他方、吉川英治さんはアマルティア・センの人間発達の概念にもとづいて、「福祉観の転換」を論じている。力作であるが、基礎研の中で蓄積してきた人間発達の経済学の形成プロセス、および福祉運動の現場から提起される問題とを交差させつつセンの議論を紹介し、双方の強みと弱点がどこにあるのかを明確にされたならば、いっそう分かりやすくなつたと思う。

99年3月に発行された89号は、バブル崩壊から9年をへてもなお回復しない日本の「平成不況」とはいったい何なのか、その本質を探る特集を組んでいる。わが国の勤労者を苦境に追いやる、自殺者を続出させている今次不況を特集したのは、この3年間で89号だけである。しかもこ

の号で、この問題に正面から挑戦しているのは、所外の岩下有司さん、所内では増田和夫さんだけのが寂しい。長期不況論を正面から論じ、民衆の側にたつ脱出策を説得的に展開した論文が、驚くほど少ないのでどうしたことだろうか。

なぜそうなったのか。私たちは、「資本主義の全般的危機論」の影響から早期に脱することができ、資本主義の改良の可能性、民主主義的改革の理論化と政策探究に励んできた。70年代から80年代は、米ソ冷戦の漁夫の利をえて、日本経済は躍進につぐ躍進をとげた時期であった。そのために、いつしか私たちは、危機や恐慌、そして財政破綻を問題にする感性と理性を鈍らせてきたのではないだろうか。その結果、世界資本主義はさらに順調に成長する、グローバル化とIT革命は資本主義の力をさらに強くする、環境問題は無視できる、ということを暗黙のうえに想定してしまい、勤労者の体験との交流をつうじて資本主義の矛盾を体感したり、その本質を捉える力を衰えさせてきたのではないだろうか。

最後になるが、99年の春季研究集会を大阪のナニワ企業団地で開催したが、その成果が90号の特集「中小企業の挑戦」に結実している。大阪の地でも不況下でがんばっている中小企業がある。その典型例であるナニワ企業団地を会場にして、多数の業者の方々とともに、前進の秘密を探究したわけだ。「一人称（当事者）の経済学」づくりを標榜してきた基礎研の真骨頂を示す研究集会であった。まずは、この企画を推進した当時の事務局長の井内尚樹さんが、「中小企業のネットワーク化」こそが前進の秘訣であったと述べ、芳野俊郎さんが「ナニワ企業団地の金属加工工場群のネットワーク化」の現状を概説した。ついでナニワ企業団地、きづがわグループネット、東大阪

金属加工グループといった当事者からの迫力あふれる実践報告も活字化されている。久方ぶりに基礎研の強みを発揮した元気の元氣の号となってい

る。

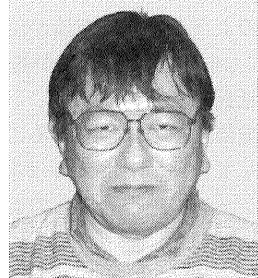
ここで10冊を通観したうえでの感想を述べたい。基礎研の強みというか魅力は、生活の場を異にする大学人と勤労者とが交流しあい、勤労者のもちこむ問題を理論的に深くつかむことで解決策をともに探っていく、そのダイナミズムにあった。患者とドクターとが病因を共同して探りあてながら、適切な治療法を紡ぎだすという方法を経済学分野に適用しようとしてきたのである。この初志からすると、ターゲットを絞ったうえで対話や討論の往復によって議論を深めていくという「相互通信」の迫力が足りないように感じた。いつしか執筆者の間で大学の専門研究者の比重が高くなったりもあり、労働や実践の真剣勝負の世界を最高の理論をもとにして捉え返してみる。そしてその結果を労働・実践の現場に還元し、そこで真理性を検証していくといった循環運動のしくみが弱くなっている。今次のデフレ不況の本質をすばりと捉えるといった、深みのある理論的分析も弱くなっているのではないか。

しかしとはい、日本経済の高度成長とソ連の崩壊といった事態に見舞われたにもかかわらず、このような組織が立派に生き残ることができ、資本主義か社会主義かという二元論の世界を超えて、民主主義の問題、人間発達（主体形成）の問題を経済的基盤のうえで考察できる土台を作ってきたことは、十分に評価できることである。真価が問われるには、これからである。成果は伸ばし弱点は正して、前進していくことを望みたい。

（ふじおか あつし 所員 立命館大学）

市民社会論と ポスト企業社会論の交錯

第91号～第99号



KAMITANI Akio
神谷 章生

I はじめに

筆者に与えられた課題は『経済科学通信』91号から99号の総括である。時期としては1999年12月から2002年8月にいたる世紀の転換をはさんだ3年間である。この間の通信の特集は以下の通りである。

- 91号 「市民社会」を問う
- 92号 「市民社会」の周縁
- 93号 環境・市民・公共事業
- 94号 福祉国家の可能性
- 95号 20世紀マルクス経済学：回顧と展望
- 96号 ポスト企業社会を探る
- 97号 環境の思想と実践
- 98号 テロ・報復戦争後の世界
- 99号 「構造改革」とは何であったか

この3年間は「市民社会」あるいは「市民」をめぐる討論とその基底にあるグローバリゼーションや経済の構造改革をいかに捉えるかといった特集が続いた。さらにニューヨーク世界貿易センターをはじめとするアメリカ国内へのテロとそれに対するアフガニスタンへの報復戦争の意味を議論の俎上にのせた。

もちろん、特集の一つひとつは時折の課題に臨機応変に対応した結果ではあるが、このように時

系列として並べてみると、そこには「市民社会」とグローバリゼーションをどのように捉えられるかといった時代の課題に基礎研が総力を挙げて解明しようとしているという姿勢が感じられる。

II 「市民社会」論と「環境」をめぐる 諸論考—91・92・93・94・96・97号

91号の特集は、筆者も関わった『新世紀市民社会論』（基礎研編、大月書店、1999年）をめぐって開催された99年夏の研究大会でのシンポジウムを受けて特集化されたものである。当日の報告者を含む9人の執筆者が「市民社会（論）」をめぐって論考を寄せた。編集局長の森岡真史によれば、『新世紀市民社会論』では「市民社会」の実現が社会変革の目標とされていることに、「若干の所員・読者」から疑問が提起されたことが、シンポジウムや特集のきっかけであった。

さて議論の中身であるが、大西広、碓井敏正、神谷章生の議論は、グローバリゼーションの中で揺らぎつつある国民国家、市民社会（大西は日本型企業社会と同義であると言明）、ジェンダーや家族関係が、日本社会を総体として新しい方向にもたらす可能性を持っているという議論を展開した。それに対して藤岡惇は、「資本主義の自由主義的再編」ではなく「社会・文化」の領域への国

家や企業の権力の移管を主張する。森岡孝二は、奥村宏の提起を受けて、マルクス主義における企業改革論の欠如を承認し、現行の株主運動が「市民による企業の制御」であり、市民社会論としてこのような企業改革論が位置付けられる必要を説いた。小林世治は本書が基礎研のこれまでの議論の延長線上にないこと、「市民社会」が資本主義の虚偽意識の一種であることを看過していると指摘している。中川スミは本書の「市民社会（論）」にジェンダー視点からの切り込みが必要であったと指摘した。

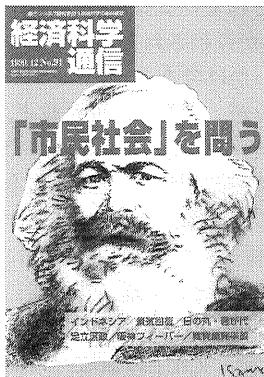
続く92号はまさに『新世紀市民社会論』とそれに対する91号の議論からはみ出した「市民社会の周縁」を特集した。そこで掲げられたテーマは、高齢者（横山寿一）、障害者（佐藤卓利）、部落（奥山峰夫）、請負労働（白井邦彦）、若者（宮内拓智）、学校教育（高村貢）ドメスティック・バイオレンス（雪田樹理）、中国残留孤児（中原雄一郎）、在日朝鮮人（笠井弘子）である。「周縁」の問題は、市民社会（論）の虚構性を暴くためではなく、「市民社会」化が遅れているがゆえの困難と「市民社会」化が進んだがゆえの病理が複雑に絡み合っているのである（森岡真史編集局長）。多様な市民社会の相貌を描いた特集といえよう。

93号では植田和弘の「21世紀の環境問題と社会経済システム」を総論とし、長良川河口堰（柏谷志郎）、吉野川第十堰（K・U）、環境再生のまちづくり（傘木宏夫）、環境評価（友野哲彦）、ISO14001（佐古井一朗）、遺伝子組み換え（江尻彰）、環境の世纪の将来構想（佐々木建）、エゴからエコへ（藤岡惇）らを各論として配置している。全体としていえることはこの特集において

も、住民あるいは市民運動の活性化が従来の国策や既定路線に対する大きな異議申し立ての力となっていることが活き活きと描かれていることであろう。

94号では新自由主義の荒れ狂う時勢に対抗して、この数年対抗軸として一部で呼ばれている「新福祉国家」戦略を多分に意識した特集として「福祉国家の可能性」を掲げた。所収論考は、社会保障と税財政問題（藤岡純一）、NPMと福祉国家の変容（山本隆）、「福祉国家」と社会福祉をめぐる考察（岡崎祐司）、家族主義的福祉国家日本の変容（神谷章生）、グローバリゼーションと福祉国家（柳ヶ瀬孝三）、貧困・社会的排除の新局面と21世紀「福祉国家」（小沢修司）である。本特集の議論が同一の方向を志向しているわけではない。しかし、全体として現代の国家再編の中でいかなる福祉戦略が模索されているかという意味で、再編のあり方を個々の論者がそれぞれの認識の中で探求しようとしているということは確かであった。

96号では「ポスト企業社会を探る」と題された特集が編まれた。「ポスト」という表現は、基礎研の「企業社会論」の後継という意味と日本型企業社会の後継という意味が重ねあわされたものと推測する。いずれにしてもあれほど「強固な殻」として前提されていた日本型企業社会の「脆さ」の淵源がどこにあったのかは、問われなければならない問題ではないだろうか。その意味で、「ポスト企業社会論」を特集した「通信」の意味は大きい。特集では、労務管理をめぐる動向と21世紀の課題（黒田兼一）、ポスト日本型企業社会とジェンダー（石田好江）、男性中心社会をどう改



革するか（森岡孝二），福祉国家の内実：分権・自治・参画そして自己決定（佐藤卓利），「IT革命」と，「企業社会」の解体と再編成（井上秀次郎），コンピュータシステムの変遷とIT労働者（高野雅章），こうすれば持続可能な日本ができる（藤岡惇）の諸論考が掲載された。

97号は「環境の思想と実践」と題して特集が編まれた。そこに掲載された諸論文は，総論としてサステナビリティの政治経済学（宮本憲一）が巻頭に置かれ，各論として，価値論のポテンシャル（梅澤直樹），環境論と価値論（吉田文和），アマルティア・センにおける環境と価値（吉川英治），環境の倫理について（牧野広義），地域からサステナビリティ社会を創る（藤井絢子），ボン合意と資金供与メカニズム（大島堅一）の諸論考が掲載された。とりわけアマルティア・センに関する2つの論文は，読者に読みやすくかつ重要な議論の提供であった。また，シンポジウムを受けて掲載された宮本論文や藤井論文なども分かりやすく，かつ重要な問題提起であった。

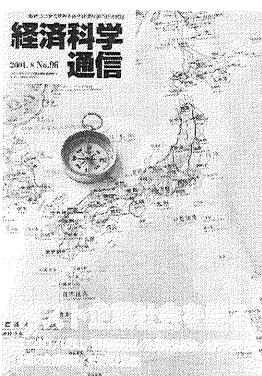
III 同時多発テロと構造改革への問題提起—98号・99号

2001年9月11日は世紀の転換を象徴する事件であったかもしれない。歴史の転換は過去との連続の延長線上で把握されなければならないし，この事件もまたそうした要素を多分に含んだものであることは間違いない。にもかかわらず，日本ではゴールデンアワーであったこともあり，乗客を乗せた旅客機がWTCに突入する光景を目撃し

たものも多かった。国際政治学者の藤原帰一（東京大学）は近著『デモクラシーの帝国』において「ヘゲモニーの分有」の時代から「自己愛と自閉」の「帝国」への変貌を象徴する事件として9・11を捉えた。本誌では，以下の論考で社会科学の課題として提起した。

収められた論考は，テロ・報復戦争と現代資本主義，社会科学の課題（環洋一），グローバル化とイスラム・テロリズム（碓井敏正），アメリカにとっての2001年9月11日（森岡孝二），戦争が答えではない（小杉功），同時多発テロ以来の英國政治の動き（小堀眞裕），日本国憲法と自衛隊海外派兵（倉田原志），新疆，インドネシア，湾岸，アフガン（大西広）であった。「イスラーム原理主義は，中東地域の政治的経済的閉塞状況の中で多くの若者を引きつけてきた」（環）ことが指摘され，それが政治経済のグローバル化の中でさらに拡大している。また，イスラム的連帯の普遍性を指摘している碓井論文も注目されてよい。一般にイスラム＝後進地域とされているが，必ずしもそうとばかりは言えないのかも知れない。さらに，同時多発テロの当日，ニューヨークに滞在していた森岡はThe Day Afterを伝えつつ，アメリカの論調を追っている。小堀はアメリカと共同歩調を取るイギリスの世論がアメリカへの批判を強力に内包している現実を突きつけている。こういった多様な批判的視角を提供した意義は強調されてよい。

99号ではそのアメリカに追従する日本の政治経済の現実を6人の論考により検討している。それらは，総論的議論として，日本型企業社会と産業企業システム再編（十名直喜）と今次不況分析



からの問題提起はなにか（松本朗），各論的議論として，地域経済における不況打開の試み（芳野俊郎），戦後日本の金融システム—変遷と展望（山西万三），現代日本企業社会の歴史的位置（長島修），構造改革を経済史的にみると（渡哲郎）の6本であった。日本型企業社会の再編・解体を考えるに当たって十名論文は重要であろう。「日本の産業・企業システムの劣化，競争力の低下が進む中，日本型企業社会の硬直的で閉塞的な状況はシステムの根本的な変革を妨げる障害ともなっている」「アジアは個人に自立を求め，その活力を生かす社会に変身しつつある。日本では，集団主義がほころびをきたし個人は士気を落としているが，日本の組織は個人を生かせないどころか自立しようとする個人まで押しつぶそうとするというアジアからの批判」（十名）など，グローバリゼーションへの批判とともに日本的集団主義がその中で改革されなければ，アジアの中の日本も心もとないということなのであろう。また，日本型企業社会を「拘束された労働者」という概念で説明した長島論文は，現代の「拘束から解放された」労働者が新たな共同性を獲得しなければ孤立化・分散化を避けられないとする。筆者も新たな共同性の登場を共有する一人であるが，問題はどのような論理によって共同性が獲得されるかであろう。新自由主義という荒波を受けてきた，あるいは現在もさらにいっそう大きな荒波に見舞われている個人が孤立化する様相に対し対抗軸を立てるときの根拠は今後もまた論争となっていくであろう。



N 20世紀のマルクス主義 — 95号

マルクス経済学の現代的発展を信条としてきた基礎研にとって21世紀に入って第1号となった95号では「20世紀マルクス経済学：回顧と展望」という特集号を編集した。基礎研の「人間発達論」，「企業社会論」と展開してきた歩みを総括した編集局長森岡真史は，これまでの基礎研のマルクス経済学が「原論」に関わる問題の検討の弱さを持っていたことを指摘し，さらにまたこれまでの基礎研の理論展開がはらむ無自覚な「マルクスとの緊張」を原論レベルで自覚化し，多くのマルクス経済学者たちの「百家争鳴」とならんことを企図したものであった。

詳細な総括は96号における北村洋基「誌面批評」に譲るが，ここではそこでは触れられていな問題提起をしたい。ひとつは，マルクス経済学と銘打ったこととの関係である。基礎研の諸議論は人間発達にしろ，企業社会論にしろ，マルクス経済学のカテゴリーを出発点にしてはいるが，すでに周辺諸科学（社会学，心理学，教育学，法学，政治学等々）との相互浸透が著しい。であるならば，この間の議論の中で「社会科学」としてのマルクス主義の評価がなされてもよかつたのかもしれない。事実，シリーズとして「政治学入門」「現代社会批評」の連載が掲載されているし，福祉国家（社会）論にかかる特集も編まれている。今後，トータルな「百家争鳴」が待たれるところである。もうひとつは，第一の問題提起と矛盾するようではあるが，各論的論争としてのマルクス経済学の論点も詳細に追う必要もあるかもしれない。百家争鳴は，単なる「犬の遠吠え」に終わっては無意味である。講座派，市民社会派，正統派，宇野派，分析的マルクス派，制度学派等々，マルクス経済学及びその亜流の包含関係も傍目には不鮮明になっているが，今何が論争点であり，何が解決されてきたのかを『経済科学通信』が先頭に立って議論を提起していく必要があるだろう。その中で「科学としての経済学」のマルクス的展開が生まれるのかもしれない。

V 補 遣

91号から99号まで通読して、いくつか落とした問題を指摘したい。ひとつは、すでに若干触れたことではあるが、連載企画「政治学入門」と「現代社会批評」が99号をもって終結した。前者は17回（95号は含まず）、後者は15回の掲載であった。基礎研としてのウイングの広げ方を示唆したものであった。

二つ目は、この間、6編の投稿論文が掲載されている。若干の例外もあるが、大学院生を中心とした若手研究者の発表の場となりつつある。学会としての基礎経済科学研究所の今後のあり方、及び後継者育成の課題ともかかわり重要な方向である。質の高い「学会誌」としての機能もさらに追求されてよいだろう。

三つ目として、筆者の論考（94号掲載）に対する森岡批評とそれへのレスポンス（96号）など議論として掲載されたのは非常によかったのではないか。ただ、諸論考の中には同様に議論されてしかるべきものもあるように思われた。それらに対する議論は喚起されていない。百家争鳴の有機的な論争への昇華が今後の課題となるだろう。

『経済科学通信』が100号を迎えた現在は、それが発足したころのある種の希望に満ちた時代とはまったく異なって見えているかもしれない。にもかかわらず、当時も今も変わらないものがあるとすれば、歴史の変革は日常の積み重ねの中から拾い上げ、自らの力で獲得するものであるということであろう。決して、他者からの強制ではない。そのための理論的実践的な知的水準の向上にこそ、この雑誌の使命があると思われる。

（かみたに あきお 所員 北海道教育大学）

Message

『通信』編集作業を経験して

佐々木潤子

まずははじめに、『経済科学通信』（以下、『通信』）が100号を迎えたこと、お喜び申し上げます。

なぜ私のような者が、このように申し上げるかといいますと、私は実に短い間ではありますが、立命館大学の大学院生の頃、1年程、『通信』の編集局にて、事務局を担当させていただいておりまして（87号～89号）、その当時のことが、懐かしく思い出されるからです。

法学を専攻しているとはいえ、その中でも租税法をやっているため、経済学、特に財政学についての基礎的な知識ぐらいは持ち合わせている（つもり）でしたし、編集局の事務「程度」なら、と気軽に担当をお引き受けしたのですが、その思いこみは大きな間違いでした。編集は単なる事務作業ではありません。特に校正の作業は、経済学・政治学の専門的な知識がなければ、全く手がつけられません。森岡編集局長をはじめ、編集局のみなさんに助けられながらでなければ、とても務まりませんでした。

100号のうち、たったの3号分しか事務局を担当しませんでしたけれども、編集局の仕事の大変

さは実感しました。タイムリーである程度読みやすく、かつ専門的な内容も盛り込み、所員や読者の皆さんたちに、どれだけ「読んでよかった」と思っていただけるか。それらのモットーを常に念頭に置きつつ、トピックス・特集など全ての記事について、どのようなテーマを、どなたに書いていただかくか、を編集局会議で議論するところから始まって、原稿執筆の依頼、集まった原稿の校正（筆者校正と局内校正）、表紙・トピックスに使用する写真の収集・選定。ある程度、形になってきたところで、ページ数の調整（字体・図表・写真の大きさなど）、広告の調達などなど…。これらの労力の集積が、毎号の『通信』なのです。

執筆者の方々、それから編集担当の方々（私もまだ編集局に名前は残っていますが、距離的な問題からほとんど参加できていないことを謝罪しつつ）、そして、所員・読者の方々がそろってこそこの『通信』です。これからも、経済科学研究所の機関誌として、次は200号を目指していきましょう！

（ささき じゅんこ 所員 香川大学）

歴史の岐路で迎えた『通信』100号

岡 宏一

私と基礎研とのお付き合いはかれこれ20年になる。『経済科学通信』もそれ以来といえる。

60年代後半に大学生活を送り、1969年に某電機メーカーに就職した。

学生時代は大学の民主化闘争、労働者になってからは労働組合の民主化・革新自治体の誕生と、それこそ歴史の奔流の中での格闘であった。文字どおり東奔西走して青春を駆け抜けた。

それが70年後半よりクリーピングインフレーション、stagflationの嵐の中で翻弄される我が身だけが残され、革新自治体は次々と消滅し、労働運動も大きく右旋回をしているように見えた。

私たちの20代は何だったのだろうか？この突き当たった闇の先には果たして出口があるのだろうか？そんな思いが頭の中を去来していた。

そんな時、大阪梅田の清風堂書店で手にした薄っぺらの雑誌が『経済科学通信』だった。

そして挟んでいたチラシで基礎研の夜間通信研究科を知り、京都府大で開かれた開講式に臨んだ。

開講式で、池上惇先生の「資本論・帝国主義論の最高の講義をやります」という言葉を聞き、「通信」のあちこちで目にしていた「人間発達の経済学」という言葉が開講式で複数の人より発せられ、何かよく解らないがとにかく参加して、学び・討論すれば「日頃の疑問」も解けるのではないかと研究科に入学した。

「資本論・帝国主義論」の講義は仕事の都合（平日の夜間）で出席出来ず、事務局から送られてきた講義テープで受講した。しかし休日開かれていたゼミナール（大阪第五学科）は欠かさず出席した。

ゼミは林弥富（大阪外大）・本多三郎（大阪経大）の両先生が指導担当で、20代・30代の労働者と大学院受験生（M0）たちが10数人集まって毎回にぎやかなゼミだった。

そんなゼミ生と研究所を結ぶ役割も『経済科学通信』は担っていたように思う。執筆者は、今では基礎研を代表する経済学者やマルクス経済学の重鎮たる重森先生、森岡先生、柳ヶ瀬先生、二宮先生たちが新進の経済学者として論陣を張っていた。労働者の投稿もかなりあったように思う。別刊として研究科の修了論文集も『労働と研究』

（年刊）として発行され、私も「イタリヤ経済の基礎構造」という論文を載せていただいた。

2年間の研究科の間に論文を執筆し、その間にゼミで発表するだけでなく、大阪支部例会・研究科の春季合宿・研究所の研究大会で発表させていただき、『経済科学通信』にも研究紹介のような文章を書いた記憶がある。

『経済科学通信』は今から思うと粗削りな雑誌であったけれど、「経済学を変革するぞ」という熱意があふれていたように思う。

今は20年前とは状況が大きく変わり、「基礎研」も『経済科学通信』も我国の経済学の中での位置も重さも違っているが、「世の中を経済学で切って、明日を展望したい」という気持ちはあの頃よりも大きくなっていると思う。

私も、脳卒中で中途障害者になり、中途障害者作業所を設立し運営する運動に加わり、潜在化している障害者の労働資源を顕在化する道を探らざるをえなくなっている。

20年前とは違った意味で、明日の灯火を探る労働者・市民が増えている。大学や大学院への社会人入学が増加しているし、『資本論』をもう一度学びたいという人々も増えているという。

現在を『資本論』を刀に解剖し、未来への道を探る経済学の出番だと思う。

「人間発達の経済学」の出番だと思う。

そういう意味で、労働者・市民の研究する権利を保障し、共同研究への道を指し示す、そういう役割を『経済科学通信』は担ってほしいと思っている。

池上先生は「研究科の修了生が100人を超えたら歴史の流れが大きく変わる」と言われたように記憶している。

『経済科学通信』が100号を迎えた今、歴史は大きな岐路に立っている。『経済科学通信』の出番は今。頑張って欲しい。

私も微力ながらお手伝いさせていただこうと思っている。

（おか ひろかず 所員 中途障害者作業所・工房ヒューマン）

表紙イラスト作成の思い出

川本 浩

『経済科学通信』創刊 100 号、おめでとうございます。

私はイラストレーターになりわいとしている者であります。

ご記憶の読者の方がおられたらうれしい限りですが、10年あまりも前になるでしょうか、『経済科学通信』誌の表紙が、何やらマンガみたいなイラストだった一時期がありました。何を隠そう、って隠さなくてもいいんですが、あれを描いていたのです。

たしかベルリンの壁崩壊を題材にしたものも描いたと記憶をしていますので、月日の流れは瞬く間というほかありません。

時事問題やら映画やら、素材をあれこれ引っ張り出してきて、ひとコママンガ的な絵に仕立て上げる。雑誌の性格上、そういうに風変わりな表紙だったろうと思うのですが、本当に自由にやらせていただいて、とても面白く、やりがいのある仕事のひとつでした。もっとも今思えば、若書きということもあって、雑誌の品位を落としてなかつ

たか大いに不安ですが。

そういえばひとコマイラストの直前に、ダンボール紙のようなもので作った立体オブジェの写真が表紙だったときもありましたが、あれも私が作っておりました（汗）。

まだ駆け出しだった私、いろいろやってみようと思っていたところへ場所を与えてもらっていたわけですね。ぎりぎり青春だった頃の懐かしい思い出です。

この 10 年、当時勤めていた会社を辞めてフリーランスとなりどうやらこうやら仕事を続けています。不況と、IT による出版・印刷業界の構造変化の影響で、まことに荒波に浮かぶ筏舟のごとき状況ですが、そんな私を探し出して（？）一文を書かせていただいた編集局の皆さん、ありがとうございました。

これからも『経済科学通信』が課題多き 21 世紀の経済の灯台でありつづけますよう。

（かわもと ひろし つづら堂）

『経済科学通信』総目次

(第1号／1970年6月～第100号／2002年12月)

●第1号 (1970年6月)

巻頭言

「研究教育自治体労働者像について」

—1970年代の研究者たち— (吉村民人)

研究発表

『宇野学派』の経済学方法論と日本資本主義分析の検討と批判
(経済大学院日本資本主義研究会)

「ルカーチの物象化論の報告と討論」(基礎研春季合宿の記録)

実践記録

「高校生の未来と生きがい—ある教育現場からのレポート」

「労働者の『資本論』学習から」(醍醐聰)

●第2号 (1971年3月)

巻頭言

民主主義的共同研究の現段階と我々の経験 (中島哲郎)

特集 会員の実践記録

1. 私立学校の真の民主化のために

2. 東部戦線異状あり (片桐正俊)

3. 新しい研究者集団像 新会員の意見 (青柳憲子)

研究ノート

社会化論的国独資論批判の一観察

—国有化問題を中心に— (重森曉)

新年研究集会の記録

社会資本論の現代的課題

経済学基礎理論研究会午後の部の内容

経済学基礎理論研究所設立申し合わせ事項

●第3号 (1972年1月)

新たな前進をめざして (重森曉)

基礎理論研究所における編集委員会の役割について (中島哲郎)

共同研究集会の記録

第2回 現代「合理化」と労働者の生きがい (梅垣邦胤)

第3回 円・ドル問題と労働運動 (事務局)

最近の問題意識から

現代の合理化—最新の局面

国鉄のマル生運動 (吉川頬麿)

基礎研の歩み一年表ふうのメモー

(1966年秋から「大学紛争」まで) (柳ヶ瀬孝三)

基礎研活動日誌 (編集部)

経済学基礎理論研究所・入会のしおり

●第4号 (1973年1月)

総特集 現代の経済科学運動

今日の経済学教育の課題 (森岡孝二)

『日本資本主義研究会』の経験と教訓 (重森曉)

経済学研究と労働者教育 (梅沢邦夫)

古典の学習と価値観創造への試行錯誤

= 京大CE研究会連合の一年の歩み= (福田利之)

経済学学習における自主編成と共同

学習カリキュラムについて (池上惇)

院生の研究と教育活動 (加藤一郎)

東京基礎研の歴史・現状・課題 (荻野喜弘)

教育系大学院における自主ゼミ活動の発展 (岩田年浩)

●第5号 (1973年5月) 300円

巻頭言 創刊にあたって (池上惇)

インタビュー

島恭彦教授に聞く—研究の歩み自治研活動のことなど—

(付・島教授戦後著作・論文一覧)

研究論文

価値法則と労働力価値規定 (辻英太郎・成瀬龍夫)

学会、研究報告 研究ノート

京都府における民力培養型公共投資政策の基本的特徴

(柳ヶ瀬孝三)

国家独占資本主義論の方法について (森岡孝二)

書評 宮本憲一著『地域開発はこれでよいか』 (重森曉)

事務局通信 基礎研運動の現段階

●第6号 (1973年8月) 300円

インタビュー 見田石介教授に聞く—哲学から経済学への歩み—

研究論文

帝国主義の経済的危機の理論

—國家独占資本主義の必然性への視点(1)— (芦田亘)

研究調査 革新自治体の農政—その新しい課題— (村田武)

学会報告

アメリカ戦時経済と優先制度

—予算制度改革論における一論点— (林堅太郎)

出版紹介

『現代世界恐慌と資本輸出』の刊行に思う (坂井昭夫)

論文批評

「科学的財政学の基礎理論」—池上惇氏の「不生産的階級と生

存競争の組織化」をめぐって (加藤一郎)

活動日誌

京都府政府研究に豊かな理論提起—第7回共同研究集会・京都府

政の科学的総合分析より— (成瀬龍夫)

●第7号 (1973年11月) 350円

研究論文

「公共経済学」をめぐって (加藤一郎)

大工業理論への一考察 (上)

—芝田進午氏の所説に触れて (戸名直樹)

現地ルポ ダムと地域住民—吉野川・早明浦ダム— (重森曉)

資料研究 A・ユア『工場の哲学』と『資本論』 (吉田文和)

連載講座

『資本論』研究入門1 (池上惇)

『帝国主義論』研究入門1 (森岡孝二)

特集 広がる基礎研運動

「筑波」型研究教育と基礎研運動 (小野秀生)

東京における基礎研運動の現状

愛媛経済研究会だより

働きつつ学び研究することの意義と展望

●第8・9合併号 (1974年4月) 350円

情勢分析

インフレーションと日本経済

—「石油危機」、産業再編の動向にもふれて— (岡林二郎)

研究ノート・論文・報告

「独占価格インフレ」論に関する覚書 (青木圭介)

大工業理論への一考察 (下)—芝田進午氏の所説に触れて (戸名直樹)

独占企業に働く技術労働者の状態—コンピューター・メーカー

富士通の場合— (塚谷静司)

連載講座

『資本論』研究入門2 (池上惇)

『帝国主義論』研究入門2 (森岡孝二)

特集 広がる基礎研運動 (続き)

「準備層」の活動形態 (代表者会議)

大阪支部の報告 (大阪支部事務局)

●第10号(1974年9月) 400円

座談会 経済科学運動と経済学若手研究者

研究論文 値値論の意義について

—置塙信雄氏の所説に関する連載(揚武雄)

研究ノート

現代都市政策の論点—都市開発問題を中心に— (成瀬龍夫)

経済科学運動論

研究者・教育者養成機関としての大学院の現状

—京大大学院における院生の研究・教育条件— (加藤一郎)

連載講座

「資本論」研究入門3 (池上惇)

「帝国主義論」研究入門3 (森岡孝二)

●第11号(1975年2月) 400円

インタビュー

中村静治教授に聞く—工場・技術・経済学—

研究論文

資源危機における日本鉄鋼業の原料炭問題と今後の動向(上)

(戸名直樹)

研究ノート

再生産=恐慌論ノート

—富塙、井村、吉原各氏の所説を素材に— (後藤康夫)

連載講座

『帝国主義論』研究入門4—第二章 銀行とその新しい役割—

(森岡孝二)

学会動向

政策科学と公共サービスの財政学

—第31回日本財政学会の報告から— (林堅太郎)

研究会便り ある労働者グループの「資本論」研究

●第12号(1975年6月) 400円

研究論文

住民要求と公共経済学 (芦田亘)

資源危機における日本鉄鋼業の原料炭問題と今後の動向(中)

(戸名直樹)

研究報告

戦後社会政策論の再検討—現代的課題のための覚え書き(その1)

(向井喜典)

現代技術の到達点とその評価について—シュハルデン「現代科

学技術革命論」の検討を中心に— (吉田文和)

連載講座

『資本論』研究入門4—第8章 労働日、第一節労働日の限界

(池上惇)

研究会便り

「資本論」を読む会の一年間 (都留文科大学) (倉増寿幸)

経済学散歩道 ベトナム革命と私—青春の断層— (吉村健二)

活動日誌

働きつづく権利の確立をめざす基礎研活動の発展のために

—1975年定期総会の報告—

●第13号(1975年10月) 400円

総特集 基礎経済科学夜間通信大学院

「基礎研」の新しい提案によせて (鳥恭彦)

夜間通信大学院に賛し、老婆心から一言呈す (中村静治)

今日の経済科学教育の課題—基礎経済科学夜間通信大学院の設

立にあたって— (池上惇)

各学科における研究教育の目標と学習の方法について

実践的、理論的課題に応える大学院を (初村尤而)

基礎経済科学夜間通信大学院に期待します (青山秀司)

事務局員になるにあたって—母への手紙— (西田達昭)

大学院設立関係資料 (設立準備委員会)

基礎経済科学研究所規約

●第14号(1976年1月) 500円

追悼文 見田石介先生の遺訓 (福島利夫)

研究論文

公教育費分析基礎理論研究序説 (柳ヶ瀬孝三)

資源危機下における日本鉄鋼業の原料炭問題と今後の動向(下)

(戸名直樹)

連載講座

『資本論』研究入門5—第八章 労働日、第二節 (池上惇)

『帝国主義論』研究入門5

—第三章 金融資本と金融寡頭制(その1) (森岡孝二)

学会動向

経済理論学会第23回大会に参加して (角田修一)

日本財政学会第32回大会に参加して (加藤一郎)

社会政策学会第51回大会の感想 (成瀬龍夫)

読後感 中村静治『技術論論争史 上・下』 (重森暁)

活動日誌

基礎経済科学夜間通信大学院の活動報告

「自治体論ゼミ」の実験 (溝手芳計)

平和論学科(新設)への呼びかけ

●第15号(1976年5月) 600円

特集 資本主義と土地所有

本源的蓄積論の諸問題

—「市民主義的マルクス理解」批判序説— (尾崎芳治)

資本製生産様式と人間自然・土地自然との関連

—『資本論』における分析の整理— (梅垣邦胤)

国債管理と金融政策

—資金動員のための競争機構の再編— (二宮厚美)

論点をめぐって

変革を迫られる日本鉄鋼業

一本誌掲載の戸名論文に思う— (林堅太郎)

連載講座

『帝国主義論』研究入門6

—第三章 金融資本と金融寡頭制(2) (森岡孝二)

特別企画 経済科学運動の今日的課題

経済科学教育の理論的諸問題

一夜間通信大学院春季合宿より— (池上惇)

経済史研究の当面する一課題について—講座マルクス主義研究

入門第4巻歴史学】によせて (藤岡惇)

隨想 若い経済学徒へ 今日必要なことは (木原正雄)

書評

谷田庄三著『現代日本の銀行資本』 (小野秀生)

岡倉古志郎・寺本光朗編『チリにおける革命と反革命』

(芦田亘)

活動日誌

夜間通信大学院春季合宿交流集会の報告 (合宿実行委)

所員便り ケルンだより (山田誠)

読者からの便り 戸名論文への疑問

●第16号(1976年9月) 600円

特集 国独資論争の現段階

国家独占資本主義論と現代資本主義分析—国家独占資本主義論

争の一省察— (森岡孝二)

ヨーロッパにおける国家独占資本主義論争の主要論点によせて

— (池上惇)

〔翻訳〕 R.ヒルファーディング「現代の諸問題」(上)

(国独資研究会)

研究会報告

社会主義・経済研究の現状と課題をめぐって (基礎研・社会主義研究会)

誌上討論

本誌連載の「帝国主義論」研究入門 (森岡孝二著) を読んで

(阿知羅隆雄)

書評 石田望著『物価指数—その実態に無関心でよいか』 (岩井浩)

経済科学文献情報(1) (藤岡惇)

新刊紹介 「日本の経済危機」の刊行によせて (坂井昭夫)

●第17号(1976年11月) 600円

夏季合宿特集 経済科学の今日的課題

資本論・現代資本主義・民主主義—夜間通信研究科1976年夏

季合宿研究集会の報告—（池上惇）

池上報告に関する討論（芦田文夫ほか）

「社会主義的民主主義」の課題と経済学（小淵港）

研究ノート

「先進国革命」論と国家論—レリオ・バッソー「社会構成体と

国家形態」（未翻訳）の紹介を中心として—（芦田亘）

翻訳

R.ヒルファーディング「現代の諸問題」（下）

（国独資研究会）

調査報告

喜入、そして志布志—西南地域開発の一断面—（重森暁）

連載講座

「帝国主義論」研究入門7—阿知羅氏の問題提起にこたえて—

（森岡孝二）

経済科学運動

発足1周年を迎える夜間通信研究科の到達点（藤岡惇）

書評

ゾーン＝レーテル、水田・寺田訳『精神労働と肉体労働』

（二宮厚美）

活動日誌

夜間通信研究科夏季合宿研究集会の報告

基礎研運動の現段階—1976年度定期総会の報告—

夜間通信研究科1977年度開講式の報告

●第18号(1977年4月) 650円

論文

ヨーロッパにおける国家独占資本主義論争の主要論点によせて(2)

（池上惇）

地主的土地清掃と南部経済の変貌過程（藤岡惇）

アダム・スミスの国家論（中谷武雄）

学会動向

日本財政学会第33回大会（鈴木茂）

経済理論学会第24回大会（後藤康夫）

社会政策学会第53回大会（伍賀一道）

書評

坂井昭夫著『国際財政論』（杉本昭七）

保田芳昭著『現代マーケティング論』（加藤義忠）

熊野聰著『共同体と国家の歴史理論』（吉田秀明）

南充巳著「戦後重化学工業段階の歴史的地位」（吉田文和）

経済科学運動

民主教育の創造と教育労働者の課題（岡武祐史）

婦人研究者の実態と婦人研究者運動（横田綾子）

活動日誌

広がる基礎研運動とその特徴（事務局）

●第19号(1977年7月) 650円

特集 現代資本主義における労働と生活

本特集を組むにあたって（編集局）

第1部「労働と生活」研究の基礎視角

生存競争・階級闘争・全面発達（二宮厚美）

史的唯物論における労働と家族（本多三郎）

第2部 職場からの学習・研究報告

産業文化の意義と役割（田中勇蔵）

消費者信用と貧困化（山西万三）

賃金決定の「国家的独占」と国民春闘（横山寿一）

論文

労働力流動化政策と教育・訓練・生活手段（上）（松田和男）

連載講座 「帝国主義論」研究入門(8)（森岡孝二）

書評

戸田慎太郎著『現代資本主義論』（独占理論研究会）

読書案内

中国新聞社編『ルボ地方公務員』（本田洋一）

V. グルシコフ・V. モイエフ著、田中雄三訳『コンピュータ

と社会主义』（田中宏）

隨想

『資本論・帝国主義論年表』の編集を終えて（鶴田広巳）

『現代福祉経済論』の刊行によせて（成瀬龍夫）

基礎研だより

夜間通信研究科春期合宿の報告

「両大戦間世界資本主義研究会」の紹介

東京支部の所員構成と研究学科の紹介

●第20号(1977年10月) 650円

20号記念特集 働く者の経済学研究と資本論

本特集によせて—「経済科学通信」20号の軌跡（重森暁）

【インタビュー】林直道先生に聞く

—今日の経済学研究と『資本論』

【座談会】経済学を働く者の発達のために（池上惇、他）

研究体制論と基礎研運動（中島哲郎）

ヒルファーディングと経済民主主義—ドイツ社会民主党キール大

会における演説を中心に（小淵港）

連載講座 「帝国主義論」研究入門(9)（森岡孝二）

書評

林直道著『恐慌の基礎理論』（角田修一）

飯盛信男著『生産的労働の理論』（山西万三）

誌上討論 大工業理論の理解をめぐって（戸名直樹）

隨想

経済学教育の一つの現場から

—1年間の回顧と反省—（加藤房雄）

ドイツ民主共和国聞きかじり（村田武）

基礎研だより

夜間通信研究科夏期合宿の報告

東京支部産業・金融機構研究学科の活動紹介

『経済科学通信』既刊号内容目次

●第21号(1978年2月) 650円

特集 技術・産業論研究入門

技術論研究と産業分析の連関（中村静治）

【インタビュー】市川弘勝先生に聞く—産業分析への私の歩み—

現代技術論の成果と課題

—中村静治『技術論入門』によせて—（吉田文和）

技術・産業論の現代的課題と理論的諸問題（戸名直樹）

職場からの研究報告

恐慌下の地域の変貌と変革への契機

—高知県の実態をふまえて—（太田紘志）

研究動向分析

最近の「新中間階層」論の理論的諸特徴（林弥富）

「法人資本主義」論についての覚え書—経済理論学会の報告・

討論を手がかりとして—（坂井昭夫）

読書案内

島恭彦『インフレーション—その政治と経済』（池島正興）

隨想

夜間通信研究科の2年間に想う（中橋幸二郎）

基礎研運動の現況と研究者管理うらばなし

—M先輩への手紙—（西田達昭）

●第22号(1978年6月) 650円

特集 労働問題研究の基礎視角

労働問題研究の課題によせて（戸木田嘉久）

労働運動と財政民主主義（二宮厚美）

労働者階級状態論に関する覚書

—F. エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』を素

材として（光岡博美）

労働力流動化政策と教育・訓練・生活手段（中）（松田和男）

イギリス貴族の大土地所有と都市開発（島浩二）

職場からの研究報告

公的扶助労働論—仲田論文「生活保護ケースワーカーの『シラ

ケ』の考察」の批判的検討—（武元煦）

- 座談会
日本経済分析と統計学の課題（野沢正徳・川口清史・小野秀生）
書評
野村秀和『現代の企業分析』（田井修司）
政治経済研究所編『転換期の中小企業問題』（岩井浩三）
産業調査雑感
岡山県の被服縫製業の調査を終えて（下野克己）
基礎研だより
夜間通信研究科 78年春期合宿の報告
- 第23号（1978年9月） 650円
特集 働く者の経済学研究と夜間通信研究科
科学と労働運動の結合をめぐらして
—夜間通信研究科3年間のあゆみ—
〔学科案内〕
技術・産業論学科／自治体論学科／金融流通協同組合論学科／
労働農民運動論学科／社会構成体発達史論学科
〔研究科への期待〕
働きながら学ぶということ（儀我壮一郎）
哲学屋の期待（秋間実）
〔研究科の感想〕
夜間通信研究科と私（小森治夫）
私の問題意識と夜間通信研究科（馬越洋一）
職場からの研究報告
構造的不況下における中小企業労働運動の経験（中原優）
「講座現代経済学」の刊行をめぐって（森岡孝二）
〔鼎談〕「講座現代経済学」と住民の発達問題
（野村拓・中村寅四郎・池上惇）
読書案内
杉本昭七『現代帝国主義の基本構造』（松野周治）
芝田進午編『公務労働の理論』（松下英爾）
研究情勢分析
日本独占資本主義の確立をめぐって（長島修）
読者の通信
大学づくりの日々に寄せて一生駒山麓の地より—（IK生）
基礎研だより
第1回研究大会の報告
- 第24号（1979年2月） 650円
大会特集 独占資本主義はどうとらえるか
本特集によせて（編集局）
独占資本主義論の方法と体系（高須賀義博）
金融資本と独占利潤法則（森岡孝二）
森岡報告についてのコメント（佐々木秀太）
研究展望
独占資本主義論の動向をめぐって（森岡孝二・佐々木秀太）
経済学基礎教室
日本の軍拡志向の経済的側面（坂井昭夫）
誌上討論
科学的な科学技術労働論展開のために（鈴木章二）
書評
ハリー・ブレーヴァマン『労働と独占資本』（二宮厚美・中原優）
雑誌文献紹介(1)
基礎研だより 研究所総会・研究科開講式を終えて
読者からのたより
「講座現代経済学I」を読んで（杉本末吉）
- 第25号（1979年7月） 650円
シンポジウム 現代の階級理論と労働者階級（I）
第1部 最近の階級理論の諸潮流
(報告1) 現代の労働者階級論争をめぐって（成瀬龍夫）
(報告2) 國家論と階級論
(ミリバント・ブーランツィス論争から)（芦田亘）
(報告3) 「現代高度産業社会」と社会学的階級論（林弥富）
(報告4) 法人資本主義論と階級論（二宮厚美）
- アダム・スミスの労働論（中谷武雄）
国有林「城下町」の様相（太田紘志）
イラン革命の経済的背景（松尾光喜）
研究展望
会計学・企業分析論の動向を語る（野村秀和）
誌上討論
現代経済学の体系と独占資本主義の理論（森岡孝二）
書評
山崎隆三編『両大戦間期の日本資本主義』（上・下）（長島修）
雑誌・文献紹介2
- 第26号（1979年11月） 650円
シンポジウム 現代の階級理論と労働者階級（II）
第1部 最近の階級理論の諸潮流をめぐって（討論）
(芦田亘・池上惇・後藤康夫・成瀬龍夫・二宮厚美)
エコロジー経済学の大工業論および資源論批判
—資源論研究序説—（戸名直樹）
労働力流動化政策と教育・訓練・生活手段（下）—炭坑離職者
援護会と雇用促進事業団に着目して—（松田和男）
研究展望
日本資本主義論の課題と方法（山崎隆三）
『講座・現代経済学』の刊行をめぐって(2)
講座Ⅱ・Ⅲ巻『資本論と現代経済』を読んで
(服部文男・黒滝正昭)
『資本論』と工場法（小森治夫）
修了論文作成の苦勞話（上田秋助）
書評
鈴坂真ほか編『ヘーゲル論理学入門』（勝木吐夢）
雑誌文献紹介(3)
基礎研だより
5年目を迎える夜間通信研究科
- 第27号（1980年春季） 650円
シンポジウム 現代の階級理論と労働者階級（III）
第2部 現代日本の労働者階級
<報告1>中小企業労働者の状態
—大和硝子労組の闇いを通して—（中原優）
<報告2>階級論の最近の動向と官僚機構研究の重要性
(池上惇)
<報告3>新しい労働者階級としての公務労働者（柳ヶ瀬孝三）
税務労働論（小森治夫）
流域下水道をめぐる諸問題（小林秀樹）
研究展望
国家独占資本主義論争と国家独占の概念（芦田亘）
海外論調・翻訳
カール・マルクスと今日のブルジョア政治経済学（上）ヘルベルト・マイスター（訳津波古充文）
書評
J.ニューフィールド他『ニューヨークが死ぬ時』
(佐々木雅幸)
小野一郎『現代社会主義経済論』（音羽周・田中宏）
A.ハント編『階級と階級構造』（湯本誠）
雑誌文献紹介(4)
基礎研だより
第2回研究大会の報告（鶴田廣己）
研究所定例総会・研究科開講式を終えて
衣笠支部活動報告
- 第28号（1980年夏季） 650円
現代日本における資本主義分析の諸課題（井村喜代子）
シンポジウム 現代の階級理論と労働者階級（完）
第2部 現代日本の労働者階級をめぐって（討論）
(芦田亘・中井博敏・中原優・成瀬龍夫・柳ヶ瀬孝三・二宮厚美)
現代民主主義への一考察—民主主義の継承性の問題に関連して—
(斎藤勝弥)

海外論調・翻訳

- カール・マルクスと今日のブルジョア政治経済学（下）ヘルベルト・マイスター（訳 津波古充文）
『講座現代経済学』の刊行をめぐって（3）
「剩余価値の生産」をめぐる二、三の問題（藤岡惇）
内田義彦『資本論の世界』の理論的意義（後藤康夫）
古典の読み方
『剩余価値学説史』とマルクス研究（赤間道夫）
書評
小野・吉信編『兩大戦間期のアジアと日本』（川北昭夫）
水津雄三『日本中小零細企業論』（安満弁吉）
雑誌文献紹介（5）
基礎研だより
夜間通信研究科80年春季合宿の報告
下鴨支部活動報告
すすむ全面改訂作業—資本論・帝国主義論年表—

●第29号（1980年9月）800円

研究大会特集 現代世界経済と日本資本主義

- 本特集によせて（編集局）
現代世界経済と日本資本主義（中村静治）
新国際経済秩序と現代民主主義（中村雅秀）
誌上討論
独占資本主義論の方法と論理
—高須賀義博氏のレーニン理解にかんして—（重田澄男）
古典の読み方
マルクス「フランス三部作」を読む（上）（鶴田廣巳）
科学運動
科学労働者の責任と義務
—盜用「学位論文」訴訟によせて—（水野正夫）
学際交流
法律学の課題と発達の経済学（葦名元夫）
書評
森岡孝二『独占資本主義の解明』を読んで（鶴田満彦）
E. S. グリンバーグ『巨大企業と国家』（馬頭忠治）
基礎研だより
第3回研究大会・分科会の報告
高知支部の活動報告
紹介 『労働と研究』第3号

●第30号（1981年1月）800円

第30号記念特集 今日の経済学研究と教育

- 座談会・マルクス経済学の研究動向と教育問題
一井沼（中央大学） 上野俊樹（立命館大学）
高木彰（岡山大学） 平井規之（一橋大学）
藤岡惇（立命館大学） 米田康彦（福島大学）
司会：森岡孝二（関西大学）
労働者の経済学研究と経済学の革新（池上惇）
夜間通信研究科の5年間
誌上討論
レーニンの国家独占資本主義概念について（再論）
（小松善雄）

論文

- 日本のエアゾール産業と独占支配—中小企業と独占支配体系—
（高田好章）
調査報告
私のみたイタリア（重森暁）
書評
「技術の経済学」の現代的視角
—吉田文和『環境と技術の経済学』の意義をめぐって—
（北条豊）

●第31号（1981年5月）800円

特集 職場の管理体制と労働実態—現代の労働と民主主義(1)— 本特集によせて（編集局）

巨大工場の職場と民主主義—最近のルボ・報告書の分析—

（藤岡惇）

大企業管理体制と労働者（馬頭忠治・青木司）

労働運動右傾化と中小企業労働組合の状態

—「傷なめ共同体」の発生と変革の展望—（中原優）

論文

国家資本概念をめぐる諸説（上）（佐中忠司）

電々調達開放問題と新たな日米経済関係の展開

（芦田亘・山本正夫）

誌上討論

経済学の方法と独占資本主義の理論

—鶴田満彦氏の書評によせて—（森岡孝二）

坂井昭夫『公共経済批判』（寺西俊一）

雑誌文献紹介（8）一般論文（竹味能成）

81春闘をめぐって（浪江巖）

新刊紹介 J. オコンナー『現代国家の財政危機』の翻訳出版

によせて（二宮厚美）

科学運動

ささやかな経験—資本論研究会を続けて—（岡宏一）

夜間通信研究科 81年春季合宿の報告（事務局）

●第32号（1981年9月）800円

特集 地域における労働者発達の諸条件

—現代の労働と民主主義（II）—

本特集によせて（編集局）

戦後日本の労働基準行政（青木圭介）

戦後日本の高成長と労働者—主体形成に関する若干の論点—

（光岡博美）

地域の中小零細企業と業者・労働運動の課題によせて

（永吉秀幸）

講演

ヨーロッパ社会の動向—留学から帰って—（池上惇）

論文

日本鉄鋼業の資源・エネルギー戦略（上）（北条豊）

国家資本概念をめぐる諸説（下）（佐中忠司）

誌上討論

「再生産論」と資本主義分析

—二宮厚美、中村静治両氏への反論—（大島雄一）

現代資本主義分析の方法と技術論

—中村静治氏の本誌論文によせて—（北村洋基）

基礎研と私

地域と生きがい—自分自身の生き方から見て—（松崎直敏）

ひろし君、ガンバレ！—あらぐさ教室の子どもたち—

（橘孝）

紹介 『労働と研究』第4号

●33号（1981年12月）800円

特集 現代世界の資本と労働—現代の労働と民主主義（III）—

本特集によせて（編集局）

フランス資本主義と労働問題（上）（安部誠治）

ユーゴスラヴィアにおける自ら主管理利益共同体（小山洋司）

総合商社における労働の動向とその明暗（宇多真揆也）

第4回研究大会記念講演

現代資本主義分析の課題（置塙信雄・相葉洋一）

誌上討論

流通主義的「再生産論」と資本主義分析

—大島雄一氏の批判に答える（中村静治）

科学運動

学生の「様変わり」と経済学教育

—研究・討論集会（於北大）に参加して（柳ヶ瀬孝三）

教科としての経済学史—経済学史学会関西部会1981年大会共通論題シンポジウム—（中谷武雄）

書評 島恭彦監修『講座現代経済学V—現代経済学論争—』（的場信樹）

基礎研だより

第4回研究大会の成功と連帯の実績（実行委員会事務局）

- 34号（1982年3月） 800円
特集 現代の労働と民主主義、その理論的展望
—現代の労働と民主主義（IV）—
本特集によせて（編集局）
ブレイヴァマン『労働と独占資本』をめぐって（富沢賢治）
オコンナー『現代国家の財政危機』をめぐって（中谷武雄）
ブレイヴァマンをどう乗りこえるか（藤岡惇）
オコンナーの財政危機論と主体形成論（藤岡純一）
ブレイヴァマン・オコンナーの理論的交錯（二宮厚美）
論文
戦後価値論論争の展開—宇野・久留間論争の系譜を軸として—（関根猪一郎）
日本鉄鋼業の資源・エネルギー戦略（下）（北条豊）
書評 重森暁『地域と労働の経済理論』（鈴木文彦）
誌上交流
哀しみと怒りの北炭夕張をどう受けとめるか（喜多源三郎）
紹介 「労働と研究」第5号
- 第35号（1982年7月） 800円
座談会 日本経済分析と労働者発達の諸条件
—『講座・現代経済学』全六巻完結を記念して—
I 『講座・現代経済学』の特色
II 日本資本主義分析と発達の経済学
池上惇／上野俊樹／宇多真揆也／小野秀生／桜井香
戸木田嘉久／森岡孝二
論文
現代の「地域」をめぐる対抗
—自治省「コミュニティ構想」の問題点—（山田博文）
研究ノート
IRIとFIATとの協力—イタリア私的独占体の80年代への1つの対応—（岡宏一）
誌上討論
基礎研の『資本論』研究をめぐって（上）（梅垣邦胤）
「再生産論」と再版生産力説
—技術段階説～中村静治氏への再反論（大島雄一）
翻訳
イギリス工場監察官報告書
—1859年10月31日付ロバート・ペイカー報告—（坂本悠一）
科学運動 働きつつ学ぶ私の経験（小森治夫）
基礎研だより
現代資本主義研究会の発足について
1982年春季合宿研究交流集会の報告
誌上交流
講座 現代経済学の完結によせて（桜井 香）
- 第36号（1982年9月） 800円
第5回研究大会特集 現段階の諸矛盾と日本型賃労働
本特集によせて（編集局）
現代日本資本主義分析の方法（鶴田満彦）
織維産業における生産・流通機構（安満弁吉）
日本農業の変革と地域農業（江尻彰）
現代日本の社会的分業＝具体的有用労働の編成と階級階層構成
—現代日本の階級構成と発達理論—（土居英二）
論文
トヨタの高蓄積と労働者の労働・生活（中川勝雄）
フランスの資本主義と労働問題（下）（安部誠治）
書評
池上惇・高島進編『日本資本主義と国民生活—講座今日の日本資本主義—9』（神谷明）
科学運動
図書館と大学教育（沢居紀充）
研究者の権利と共同研究のあり方（塚谷靜司）
誌上交流
大学づくりと生協づくり
- 阪南大学生活協同組合設立始末記—（中島哲郎）
基礎研だより
現代資本主義研究会からの報告
広げた交流、深めた理解 第5回研究大会成功す
- 第37号（1982年12月） 800円
特集 現代日本の技術進歩と人間発達—日本経済分析の基本課題(1)
本特集によせて（編集局）
座談会・「情報化社会」と人間発達
青水司／阿知羅隆雄／草川昭／重本直利／中村雅秀
柳ヶ瀬孝三
「情報化」と住民の発達（池上惇）
「情報化」における技術と労働（青水司）
情報システム化と意識管理—その日本の特質の解明にむけて
—基礎的研究—（重本直利）
論文
『資本論』における technisch と technologisch（上）（須藤浩行）
価値論論争の現局面と今後の課題
—貨幣の必然性の視点から—（関根猪一郎）
誌上討論
基礎研の『資本論』研究をめぐって（下）（梅垣邦胤）
科学運動
第2回中小工業全国交流・研究集会ルポ（掛章孝）
書評
S.ホランド著
仁連孝昭・佐々木雅幸他訳『現代資本主義と地域』（岡田知弘）
小松善雄著『国家独占資本主義の基本構造』によせて（山田博文）
- 第38号（1983年4月） 800円
特集 現代日本の官僚機構—日本経済分析の基本課題（II）—
本特集によせて（編集局）
政官財癒着の中の官僚機構（芦田亘）
産業政策と経済官僚機構（佐々木雅幸）
府県自治体とその官僚機構化の諸段階（小森治夫）
臨調・行革を考える—現場からのレポート
大阪城と400年まつりから「すばるプラン」へ（山田正明）
「行政改革」と自治体中小企業行政（山田昇）
「国民の食糧」を守る労働を（伊藤憲章）
保健婦労働と官僚制（中村淑子）
論文
IC産業と地域雇用問題（鈴木茂）
『資本論』における technisch と technologisch（下）（須藤浩行）
誌上討論
「再生産論の具体化」と再生産論
—大島・中村論争に関連して—（高木彰）
科学運動
「経済学教育をめぐる研究・討論集会」（第2回）の報告（米田康彦）
書評
上野俊樹『経済学とイデオロギー』（中谷武雄）
森岡孝二『現代資本主義分析と独占理論』（上田健作）
『人間発達の経済学』公開討論会の報告（藤岡惇）
基礎研だより
現代資本主義研究会からの報告(2)
- 第39号（1983年6月） 800円
総特集 没後百年—マルクスの現代的再生めざして
マルクス没後100年をどう記念するか（編集局）
I 記念シンポ・歴史認識と社会変革
マルクスにおける歴史認識と社会変革（重田澄男）
労働日の制限・短縮と人間の発達（森岡孝二）

- 民衆発達の経済史を求めて (藤岡惇)
 討論のまとめ
II 私の生活とマルクス
 迷った時は基本に帰ろう (安満弁吉)
 マルクスと私と基礎研と (森本裁般)
 マルクスのコミュニケーション認識に新たな光を (田中秀幸)
 『フランスにおける内乱』と革新自治体 (山田昇)
III マルクス理論と現代
 現代資本主義と相対的過剰人口論 (伍賀一道)
 フランス「三部作」と資本主義国家論 (鶴田廣巳)
 労働運動発展の展望とマルクス (中原優)
 マルクスの貨労働概念と変革主体 (内山哲朗)
 環境危機とマルクス主義 (寺西俊一)
IV 動向
 マルクス没後百年をめぐる他誌の動向 (江尻彰・竹味能成)
 書評 本山美彦『貿易論序説』によせて (中尾茂夫)
 寄贈本紹介
 人間・社会・歴史研究会編著『人間・社会・歴史の研究』
 『季刊 社会科学通信』(武蔵野社会科学研究所)
 基礎研刊行物紹介 『労働と研究』第6号
- 第40号(1983年11月) 800円**
特集 現代日本の労働者と中間層
 —日本経済分析の基本課題(Ⅲ)—
 本特集によせて (編集局)
 労働・生活の危機と労働運動 (横山寿一)
 農協労働者の状態と主体形成 (鈴木文憲)
 中小業者運動における「仕事おこし」
 「地域づくり」とその課題 (永吉秀幸)
 第6回研究大会記念講演
 労働者階級論の問題点と課題—「労働者階級の発展水準」の概
 念をめぐって— (芝田進午)
 論文
 臨調「行革」における大企業と中小企業との対抗
 一計量分析による一試論— (大西広)
 小特集・『人間発達の経済学』をめぐって
 『人間発達の経済学』を読んで
 (北見地域・基礎経済科学研究所)
 『人間発達の経済学』の内容紹介 (今井幸二)
 翻訳
 ゲ・ア・バガトゥーリヤ「マルクスとエンゲルスの理論的遺産
 における『生産諸力』概念」 (訳 徳永盛一)
 書評
 池上惇『地域づくりの教育論』 (大麻南)
 芝田進午監修本間・小林著『社会科学としての保険論』
 (山西万三)
 基礎研だより
 現代資本主義研究会からの報告(3)
 第6回研究大会の報告
 基礎経済科学研究所創立15周年記念—懸賞論文募集
- 第41号(1984年3月) 800円**
特集 日本経済の国際関係
 本特集によせて (編集局)
 現代日本の国際的環境—現代帝国主義と日本資本主義の若干の
 理論問題— (中村雅秀)
 地域経済の国際化—直接投資交流政策を中心に— (岡田知弘)
 座談会 貿易摩擦と日本経済
 江尻彰／北藤憲治／閔下稔／高田好章
 竹本邦彦／中村雅秀／中尾茂夫／吉田昭臣
 論文
 「社会資本」概念の基礎的考察
 一般的・共同社会の条件と「社会資本」— (佐中忠司)
 日本の労働者の人間的発達と階級的主体形成 (成瀬龍夫)
 婦人労働者の発達課題一生保労働者の実態を中心に—

- (野崎律子)
- 誌上討論
 再生産論と日本資本主義分析の課題 (山本義彦)
 科学運動
 第3回経済学教育をめぐる研究・討論集会に参加して (角田修一)
 書評
 小嶋昭道著『社会科教育の歴史と理論』 (本田清春)
 池上惇著『民主主義日本の憲章』 (菊地修平)
 基礎研だより
 北見地域の学習・調査・研究運動
 基礎経済科学研究所創立15周年記念—懸賞論文募集—
 誌面批評 No.39 (音羽潤)
●第42号(1984年6月) 800円
卷頭言特集 現代社会の「構造転換」を考える(I)
 本特集によせて (編集局)
 今宮謙二／島恭彦／山口正之
 座談会 情報化のもとでの構造転換の意味するもの
 青水司／芦田亘／小森治夫／永吉秀幸／藤岡博
 論文
 日本資本主義の「合理化」再編成と大企業労働者の主体形成
 (北条豊)
 職場からの研究報告—釜ヶ崎労働者の状態— (宇田綾生)
 経済学を劇にした学生と教師 (土居英二)
 インタビュー・この人に聞く 武元煦さんに聞く
 書評
 重森曉編『日本財政論』 (梅原英治)
 柏尾昌哉著『生活の経済—現代生活様式をめぐって—』
 (角田修一)
 中村静治『現代自動車工業論』 (安井恒則)
 社会科学研究セミナー編『社会科学研究年報(1983年版)』
 (山西万三)
 基礎研だより
 現代資本主義研究会からの報告(4)
 東京支部の現状と今後の方向 (東京支部)
 『人間発達の経済学』学習会を行なって (柳幸夫)
 誌面批評
 芝田進午「労働者階級論の問題点と課題」を読んで
 (重本直利)
 No.40 (宇田綾生)
●第43号(1984年10月) 800円
本特集によせて
卷頭言特集 現代社会の「構造転換」を考える
 現代イデオロギー対決の構図 (鯉坂真)
 真に平和で豊かな社会をめざして (木原正雄)
 構造転換と教育協調 (高浜介二)
 特集 現代の消費構造の転換
 座談会 現代の消費構造の転換を考える
 江尻彰／小沢修司／近藤文男
 佐藤卓利／的場信樹／山西万三
 現代マーケティングと消費・生活者像 (二宮厚美)
 生活協同組合の発展構造 (的場信樹)
 論文
 私達の“地域づくり街づくり”運動 (町田豊治)
 インタビュー・この人に聞く 小嶋昭道さんに聞く
 誌上交流
 彦根市における学童保育の運動 (杉山悟)
 書評
 池上惇『管理経済論』 (矢野明人)
 アンリ・クロード著 久保田順 田部井英夫訳
 『多国籍企業と帝国主義』 (板木雅彦)
 笹川儀三郎 石田和夫編『現代企業のホワイトカラー労働』
 (竹田昌次)

鈴木文彦、宮本昌博、佐藤哲郎著『労働組合の再生』（重森暁）
全商工労働組合通産行政研究会編『問われる通産省』
(小森治夫)

基礎研だより

現代資本主義研究会からの報告(5)

基礎経済科学研究所創立15周年記念懸賞論文の審査結果

誌面批評 No.41 (坂井昭夫)

●第44号(1984年12月) 800円

巻頭言特集 現代社会の「構造転換」を考える

社会主義にも「構造転換」が (上島武)

スタグフレーションと「構造転換」 (高須賀義博)

特集 現代の労働と情報化

本特集によせて (編集局)

情報ネットワークと現代資本主義 (石沢篤郎)

「情報化」時代と中小企業 (永吉秀幸)

情報化をめぐる討論 (柳ヶ瀬孝三)

職場からのレポート

「テクノストレス」の現場から (電子産業) (日下三郎)

自動化と労働 (鉄鋼産業) (隈部紀彦)

熾烈な電子機器販売競争の中で命廢り滅らす営業マン (情報産業) (坂健二)

ME化とムダ排除運動 (機械産業) (中山久雄)

論文

企業管理における販売管理確立の現代的意義 (齊藤雅通)

日本の産業調整を考える (小林世治)

15周年記念懸賞論文

現代日本の鉄鋼労働者像一鉄鋼労連の労働者意識調査へのアプローチをとおして (北条豊)

インタビュー・この人に聞く 水野喜志彦さんに聞く

書評

横田茂著『アメリカの行財政改革』 (佐々木雅幸)

加藤睦夫・坂野光俊編著『現代日本の財政問題』 (西村貢)

関下稔、鶴田廣巳、奥田宏司、向壽一『多国籍銀行』

(中尾茂夫)

坂井昭夫著『軍拡経済の構図』 (新聞智)

基礎研だより

「情報化論」をめぐって議論沸騰す

第7回研究大会実行委員会

誌面批評 No.42 (真鍋能章)

宇田綾生『釜ヶ崎労働者の状態』を読んで (上掛利博)

●第45号(1985年4月) 800円

巻頭言特集 現代社会の「構造転換」を考える (IV)

流通分野における「構造転換」 (保田芳昭)

特集 今日の「構造転換」と経済学の課題

本特集によせて (編集局)

Stagnation 克服策と利潤規制

—Keynes 政策を超えるもの— (甲賀光秀)

生活様式の転換と主体形成 (川口清史)

[コメントI] 「構造転換」の一観点

—グラムシとブレイヴィアマンにふれて— (青木圭介)

[コメントII] 現代日本の労働者生活について (森岡孝二)

論文

今日の地方公営交通問題 (林久和)

機械制大工業と労働力の流動化にかんする一考察

—今日の技術革新の社会的帰結検討のために— (音羽周)

臨調軍拡路線への平和と民主主義の代案—「経済的国家」の国

民統合から「政治的国家」の国民統合へ— (大西広)

共働き家族と労働時間の短縮 (佐藤卓利)

インタビュー この人に聞く 森井久美子さんに聞く

書評

渡辺峻著『現代銀行業の労働と管理』 (石田和夫)

平井都士夫・一ノ瀬秀文・橋博・向笠良一編

『現代経済における競争と規制』 (小林世治)

ジェームズ・ウェッセル著、鶴見宗之介訳『食糧支配』
(江尻彰)

基礎研だより

現代資本主義研究会からの報告(6)

大阪自治体論学科の近況報告 (大阪自治体論学科)

誌面批評 No.43 (松原豊彦)

●第46号(1985年8月) 1000円

巻頭言 現代社会の「構造転換」を考える(V)

地方自治の将来をどう考えるか (川妻千将)

特集 「構造転換」のなかでの労働時間と生活時間

本特集によせて (編集局)

日本資本主義の「構造転換」と労働条件 (青木圭介)

現代日本の労働時間とその短縮の展望をめぐって (湯浅良雄)

工場法と片山潜 (上) (坂本悠一)

同盟・総評の労働時間短縮闘争をめぐって (伍賀一道)

フランスにおける労働時間問題 (大和田敢太・矢部恒夫)

論文

指揮労働から貨幣の権力へ (北川與司雄)

書評 右田紀久恵・井岡勉編著

『地域福祉—いま問われているもの』 (武田宏)

基礎研だより

夜間通信研究科紹介…技術・産業・情報論学科 (京都)

研究科第11期生募集のご案内

公開セミナー「生産者から見た『資本論』の世界」のご案内

誌面批評 No.44 (小林正人)

●第47号(1985年12月) 1000円

巻頭言 現代家族の生活と労働を支える

地域づくりとその課題 (横田昌子)

第8回研究大会記念講演 日本の労働時間 (藤本武)

特集 日本経済の「構造転換」と「国際化」

日米貿易=経済摩擦の政治経済学 (関下稔)

テクノボリスと地域経済の国際化 (佐々木雅幸)

松下電器の海外進出の状況とその労働条件 (中村暢宏)

論文

資本家の所有と株式会社 (佐々木秀太)

工場法と片山潜 (下) (坂本悠一)

イギリス便り

ロンドンで見た暮らしのなかの経済学 (森岡孝二)

インタビュー 上田秋助さんに聞く

書評

山本広太郎著『差異とマルクス』 (関根猪一郎)

鈴木茂著『日本のエネルギー開発政策』 (松野周治)

二宮厚美著『地域と生活をつくりかえる』 (折原ゆき)

基礎研だより

現代資本主義研究会からの報告(7)

誌面批評 No.45 (加藤一郎)

●第48号(1986年3月) 1000円

巻頭言 公務労働組合運動のなかで (丸谷肇)

特集 地域・産業の「構造転換」

本特集によせて (編集局)

地域構造の転換と四全総 (重森暁)

国際化・情報化と東京圈再編成 (寺西俊一)

公共投資の構造転換と80年代 (加藤一郎)

小特集 臨調行革下の労働と生活—公務労働の現場から

国民「不」健康保険と住民生活 (太田紘志)

「行政改革」下ですすむ公的扶助労働における労働の貧困化 (中井健一)

地域の中小企業と商工行政の転換点 (山田昇)

大型間接税導入前夜の「合理化」の進行 (今村元)

地域からの報告 福祉のまちづくり (武元煦)

インタビュー 初村尤而さんに聞く

読書ノート

田中博秀著『解体する熟練』（上田健作・小林正人）
書評
　　ウィリアム・タブ著『ニューヨーク市の危機と変貌』
　　　　　　　　　　（小森治夫）
　　朱い実保育園職員会編『朱い実の子どもたち』（今井幸二）
　　静岡大学「経済劇」フォーラム著『舞台の上の経済学』
　　　　　　　　　　（市橋勝）
基礎研だより
　　11年目を迎えた夜間通信研究科（藤岡惇）
　　夜間通信研究科紹介　社会構成論学科ゼミナール
誌面批評 No.46（浪江巣）

●第49号（1986年6月） 1000円

卷頭言
　　地域のくらしと文化をよくするまちづくりの発想転換
　　　　　　　　　　（角橋徹也）
　　「生協規制」の背景と運動の進路（鈴木彰）
　　労働政策の転換と労働行政の方向（斎藤力）
特集 「金融革命」と国民生活
特集にあたって（編集局）
　　国際的な金融「革新」の波—その構造と意味（小西一雄）
　　情報化のなかの金融の位置
　　　—金融の情報化・システム化・カード化（山西万三）
　　「金融革命」下の生保資本と生保労働者の状態（野崎律子）
　　「金融革命」下の消費者金融被害の状況（明石由紀夫）
講演
　　世界経済の構造転換と日本資本主義分析（松村文武）
インタビュー 宇田綾生さんに聞く
読書ノート
　　マルクス以降のマルクス主義（森岡孝二）
書評

仲村政文著『科学技術の経済理論』（青水司）
池上惇著『情報化社会の政治経済学』（重本直利）
中村孝俊著『「金融革命」とは何か』（竹味能成）
松村文武著『現代アメリカ国際収支の研究』（中本悟）
イギリス便り
　　スペインとフランスを訪ねて（林堅太郎）
基礎研だより
　　現代資本主義研究会からの報告（共同研究部）
　　夜間通信研究科紹介　金融・流通・協同組合論学科
誌面批評 No.47（横田綾子）

●第50号（1986年9月） 1000円

創刊50号記念総特集 「経済学の革新」
卷頭言 創刊50号記念によせて（編集局）
第1部 円高激震と日本の未来—国際化時代の経済学
公開講座「円高激震と日本の未来
　　—国際化時代の経済学について（森岡孝二）
　　レーガンのサミット戦略と円高日本（坂井昭夫）
　　アメリカ金融資本の蓄積戦略と日米経済摩擦問題（上田慧）
　　貿易まさつ下の日本の進路と内需拡大の二つの道（菊本義治）
討論のまとめ
第2部 座談会：基礎研運動が提起した理論的諸問題
（出席者） 大西広・上掛利博・小森治夫・重森暁
　　野崎律子・藤岡惇・森岡孝二（司会） 芦田亘
報告1 「人間発達の経済学をめぐって」（森岡孝二）
報告2 「地域・自治体・公務労働論に
　　かんする基礎研の理論活動」（重森暁）
報告3 「主体形成と生活者論
　　—歴史的・国際的視点からの問題提起」（藤岡惇）
第3部 現代社会の「構造転換」と労働者意識
　　労働者の自立とはなにか（福島利夫）
　　大企業労働者が人間らしい暮らしづくりをたたかいの基本にす
　　えるまで（今崎暁巳）
階級意識形成をめぐる理論的諸問題（成瀬龍夫）

第4部・わたしと『経済科学通信』
共感による主体形成への確信
　　基礎研への道—（小野寺わたる）
地域問題研究の契機となった『通信』（鈴木茂）
共同研究のあり方の原点を示した『通信』（高原一隆）
愛媛での思い出—そして今、東京で（細川孝）
労働者学習運動の取り組みから（橋本了一）
『通信』をメディアに経済学の新しい流れを（中谷武雄）
隨想 自叙伝こぼれ話(1)「八高交友抄」（島恭彦）
資料 『経済科学通信』総目次（第31号～第50号）

●第51号（1986年12月） 1000円

随想 自叙伝こぼれ話(2)（島恭彦）
特集 軍拡と軍縮の経済学
本特集によせて（編集局）
わが国における産軍官学協同の進展（木原正雄）
核軍拡競争の現段階とSDI（安斎育郎）
「軍縮と開発」の経済学をどう構築するか（藤岡惇）
民需転換（Conversion）は可能か
　　第一回研究大会全体討論のまとめ（中谷武雄）
戦後体制における軍事と経済学（新岡智）
論文 最近の国家論に対する一つの疑問（北川與司雄）
アメリカ便り ピッツバーグでの生活から（川口清史）
書評

森岡孝二編『勤労者の日本経済論』（林堅太郎）
柳ヶ瀬孝三・三上和夫編『教育費を見直す』（青木圭介）
重森暁編『日本公企業の再生』（水野喜志彦）
三富紀敬著『フランスの不安定労働改革』（伍賀一道）
内山昭著『大型間接税の経済学』（鶴田廣己）
インタビュー 石川雅博・梶原聰子ご夫妻に聞く
基礎研だより
　　新講座『現代の日本一構造転換の経済分析』の取り組みについて
現代資本主義研究会からの報告(8)
夜間通信研究科紹介 労働運動学科
誌面批評 No.48（高原一隆） No.49（山本久子）

●第52号（1987年3月） 1000円

随想 回想の安保闘争—自叙伝こぼれ話（最終回）（島恭彦）
特集 文化的経済学
特集「文化的経済学」によせて（編集局）
中年よ、からだをきたえておけ（木津川計）
文化・文明と商品経済・協同社会（平野喜一郎）
消費社会論の動向と課題（角田修一）
文化運動への着眼（井上英之）
ヨーロッパ社会学における文化の役割（井上純一）
職場の合理化と文化的価値意識の役割（中山久雄）
映画「母さんの樹」と労働組合運動（水野喜志彦）
伝統文化と市民文化—地域における共存と共同（森可秀）
論文
　　アメリカのビジネス・スクールにおける経営教育（廣瀬幹好）
インタビュー 岡宏一氏に聞く
書評

戸木田嘉久編『ME「合理化」と労働組合』（北条豊）
石田頼房著『日本近代都市計画の百年』（川瀬光義）
新刊紹介 基礎経済科学研究所編『労働時間の経済学』
基礎研だより
　　公開講座より／民營「国鉄」と公企業論の課題
　　香川支部／労働者を中心にざっくばらんな研究会活動
基礎研第10回研究大会 参加・報告者募集のお知らせ

●第53号（1987年7月） 1000円

インタビュー 研究者群像（第1回）杉原四郎先生に聞く
特集 アジアと日本
特集によせて（編集局）
日本・アジア・環太平洋（藤原貞雄）

日本型多国籍企業とアジア（佐々木建）
日本資本の東南アジア進出が問い合わせるもの（和田幸子）
食糧・農漁業問題におけるアジアと日本（森井淳吉）
ASEANと日本（西口清勝）
アジア NICs と日本経済をめぐる諸論点（田中祐二）
講演 転換する近代経済学とその超克（山口正之）
研究動向
経済学と人権論「領有法則転回論」の一論点から（赤間道夫）
書評
基礎経済科学研究所編『労働時間の経済学』（横山寿一）
高原一隆・増田洋編『地域問題の経済分析』（長谷川健二）
種瀬茂著『経済思想』（桜井幸男）
基礎研だより
86年度春季研究集会の報告（藤岡博）
活動を再開する東京支部（細居俊明）

●第54号（1987年12月） 1000円

インタビュー 研究者群像（第2回）一坂寄俊雄先生に聞く
特集 「構造転換と日本の経済学」
特集「構造転換と日本の経済学」によせて
第I部・座談会：『講座・構造転換』全4巻をめぐって
(出席者) 有本均・宇田綾生・角田修一・成瀬龍夫・森岡孝二
柳ヶ瀬孝三・米田康彦（司会）重森暁
第II部 第10回研究大会報告
現代経済学における国家論の課題（宮本憲一）
環境保護運動と現代資本主義（植田和弘）
今日の生活様式論の特質（高原朝美）
個人所得税の導入と社会主義の三つの型（田中宏）
現代の焦点 日本経済のもうひとつの進路
—87経済白書にふれて（柳ヶ瀬孝三）

研究ノート
唯物史観と人間発達史観
一池上惇『人間発達史観』を読んで（森岡孝二）
貿易摩擦と農業問題
一閑下稔『日米貿易摩擦と食糧問題』を読んで（江尻彰）
書評
ロバート・ディグラス著『アメリカ経済と軍拡』（中村達）
藤岡純一著『日本経済の展開と財政』（大辯誠一）
中村雅秀編『累積債務の政治経済学』（奥田宏司）
吉田文和著『マルクス機械論の形成』（重本直利）
スティブン・マリス著『ドルと世界経済危機』（向壽一）
研究所訪問 人間発達研究所（小沢修司）
基礎研だより 第10回研究大会のまとめ（高山新）

●第55号（1988年3月） 1000円

研究所訪問 社会科学研究セミナー 芝田進午先生に聞く
特集 経済民主主義の動向
日本における経済民主主義論の展開（野澤正徳）
サッチャーリズムと炭鉱ストライキ（増田壽男）
ラテンアメリカ危機からの再生を求めて（草野昭一）
ソ連社会主義のペレストロイカ（上島武）
論文
ボピュラー・キャビタリズムとイギリス地方自治（北村裕明）
日・米鉄鋼業における「合理化」・多角化の動向（十名直喜）
現代の焦点 地価問題と都市政策（寺西俊一）
歴史の探究 1929年世界恐慌（松野周治）
古典を読む
トマス・ペイン『コモン・センス』と『人間の権利』
（中谷武雄）
学界動向 現代都市論（川瀬光義）
投稿 コンピュータの内的発展法則（石沢篤郎）
書評
有井行夫著『マルクスの社会システム理論』（芝田進午）
R.バーバック、P.フリン著『アグリビジネス』（樋原正澄）
催し物案内 夜間通信研究科春季研究集会のご案内

●第56号（1988年7月） 1000円

研究者群像（第3回）山口正之先生に聞く
特集 労働過程研究の視点
いま、なぜ、労働過程研究か（森岡孝二）
現代労働過程論争とその意義
—ブレイザマンとそれ以降—（成瀬龍夫）
「情報化社会」は中小企業になにをもたらすか
—生産の短サイクル化と労働の不安定化—（安満弁吉）
労働現場をみる視点
—NTTにおける資本と労働の現段階—（水野喜志彦）
論文 現代社会と労働者協同組合（井上秀城）
現代の焦点
「社会福祉制度改革」と社会福祉の「产业化」（中井健一）
歴史の探究 昭和恐慌と高橋財政の展開（藤田安一）
古典を読む トクヴィルと『アメリカのデモクラシー』（堀雅晴）

学界動向 日本流通学会の発足に参加して（中村雅秀）
研究所訪問 大阪保育研究所（横山寿一）
海外通信 ハーヴェイ・シャビロさんへのインタビュー
研究ノート
高原朝美『富裕化と貧困化の論理』を読む（伍賀一道）
生協運動の危機と協同組合主義
—栗本昭『先進国生協運動のゆくえ』を読んで（的場信樹）
書評
上田秋助著『アディオス・ミ・サン・ドミンゴ』（藤岡博）
宝光井顕雄ほか編『現代日本の婦人労働』（宇田綾生）
渡辺峻著『現代の銀行労働』（山西万三）
モニター書評
基礎研編『講座・構造転換』第1巻（隈部紀彦）
基礎研編『講座・構造転換』第1巻（杉浦正和）
基礎研編『講座・構造転換』第2巻（尾内康彦）
基礎研だより 第11回研究大会のご案内

●第57号（1988年10月） 1000円

研究者群像 江口英一先生に聞く
特集 ギャンブル・キャビタリズムの凋落
特集によせて（編集局）
経済投機化と現在の金融不安（小西一雄）
地価高騰と土地税制（瀬川久志）
財テクブームと労働者の家計（佐藤卓利）
途上国債務戦略をめぐる対抗関係とIMFの役割（奥田宏司）
現代の焦点 税制改革と「構造調整」政策（梅原英治）
歴史の探究 ニューディール（佐々木雅幸）
古典を読む ジョン・スチュアート・ミル『自由論』（大西広）
文学と経済学 ディケンズの『リトル・ドリット』（森岡孝二）
学界動向 「世界都市」から見る都市経済の再生（井内尚樹）
研究所訪問 国民教育研究所 伊ケ崎暁生先生へのインタビュー
書評
鶴田廣巳・藤岡純一編『税制改革への視点』（今村元）
J.オコンナー著『経済危機とアメリカ社会』（横尾邦夫）
置塙信雄・伊藤誠著『経済理論と現代資本主義』（三輪憲次）
松石勝彦著『資本論の方法』（梅垣邦胤）
西川潤著『世界経済入門』（鈴木秋洋）
モニター書評
基礎研編『講座・構造転換』第3巻（柿沼昌芳）
基礎研編『講座・構造転換』第4巻（井沢嘉之）
基礎研編『講座・構造転換』第4巻（本宮正則）
基礎研編『講座・構造転換』第4巻（山岸明）
投稿 石沢「法則」を支えるもの（中村静治）
文献紹介
置塙信雄・鶴田廣彦・米田康彦著『経済学』
非核の政府を求める京都の会編『ハート・オブ・ピース』
富沢賢治ほか著『協同組合の拓く社会』
基礎研だより

基礎研公開市民セミナーのご案内
1988年春季合宿研究交流集会の報告（櫻原正澄）

●第58号（1988年12月） 1000円

研究者群像 戸木田嘉久先生に聞く

特集 現代経済をどうとらえるか

特集によせて（編集局）

現代資本主義論の反省課題（森岡孝二）

『資本論』と現代経済

—理論的認識の実践性をもとめて—（有井行夫）

「情報化社会」をどうとらえるか（小林正人）

座談会 國際化・情報化のなかの労働の変化

（出席）宇田綾生・中村暢宏・本多潤一・森井久美子

（司会）成瀬龍夫

歴史の探究 スターリン体制の成立と5ヵ年計画（中江幸雄）

研究所訪問 総合社会福祉研究所（梅原英治）

論文

「商品過剰論」と「資本過剰論」の生成・発展・消滅

（増田和夫）

私の研究から

ヴィレルメ協会『フランスにおける労働者の物質的・精神的状態』（清水克洋）

書評

山本繁著『大正デモクラシーと香川の農民運動』（川東鋭弘）

文献紹介 都市環境研究会『都市とウォーターフロント』

キーワード アルチュセール

基礎研だより 第11回研究大会の報告（藤岡博）

●第59号（1989年4月） 1000円

研究者群像 置塙信雄先生に聞く

特集 いま“豊かさ”を考える

特集によせて（編集局）

公開シンポジウム「いま“豊かさ”を考える」

新しいシリーズを始めるにあたって（重森曉）

報告1 「“豊かさ”概念をめぐって」（角田修一）

報告2 「生活空間は、いま豊かか」（梶浦恒男）

報告3 「眞の“豊かさ”と社会保障」（福島利夫）

報告4 「保育運動からみた“豊かさ”問題」（横田昌子）

参加者の発言と報告者の感想・回答

「豊かさ時代」と不安定就労の拡大（伍賀一道）

アメリカ経済のリストラクチャリングと階層構造の再編成

（湯浅良雄）

現代の焦点

現代天皇制イデオロギーの物質的基盤について（二宮厚美）

歴史の探究 ワイマール共和国の崩壊（長沢高明）

古典を読む ロバート・オーエン『社会に関する新見解』と『ランカスターへの報告』（的場信樹）

学界動向

経済理論学会第36回大会（藤岡博）

日本財政学会第45回大会（藤岡純一）

研究所訪問 大阪自治体問題研究所（江尻彰）

自著を語る 『シミュレーション税制改革』のこと（安藤実）

読書ノート

伍賀一道著『現代資本主義と不安定就業問題』（木村隆之）

書評

成瀬龍夫著『生活様式の経済理論』（下山房雄）

加茂利男著『都市の政治学』（重森曉）

横尾邦夫著『くらしと自治の財政論』（政田裕嗣）

文献紹介 松石勝彦著『現代経済学入門』

研究会だより 医療・福祉問題研究会（石川県）（勘昭三）

基礎研だより

第4回基礎研四国研究集会の報告（増田晃一）

第12回研究大会のご案内

●第60号（1989年7月） 1000円

研究者群像 柴田悦子先生に聞く

特集 「ポスト福祉国家」を聞く

特集によせて（編集局）

住宅問題から見た日本の「豊かさ」（早川和男）

シンポジウム：「ポスト福祉国家」を聞く

報告1 サッチャリズムとイギリス福祉国家（北村裕明）

報告2 スウェーデンの経済と福祉（藤岡純一）

報告3 日本における「福祉国家」の再編過程（中井健一）

全体討論のまとめ（岡崎祐司・上掛利博）

過労死—働きすぎ社会の告発（森岡孝二）

高齢化と都市行財政（武田宏）

豊かさとはなにか—三宅島民が発するメッセージ（末松三郎）

現代の焦点 レーガンの遺産とアメリカの選択（新岡智）

学界動向 マルクス・エンゲルス研究者の会（橋本直樹）

研究所訪問 銀行労働研究会（北島治）

書評

経済优先度評議会著『SDI スターウォーズの経済学』

（大西広）

吉田文和著『ハイテク汚染』（鈴木茂）

上杉忍著『バクス・アメリカーナの光と陰』（藤岡博）

基礎研だより 1989年度春季研究交流集会のまとめ

60号記念『経済科学通信』第51号～第60号総目次

●第61号（1989年11月） 1000円

研究者群像 木原正雄先生に聞く

特集 現代の技術変化と資本主義の再編

特集によせて（編集局）

現代の技術変化と資本主義の世界的再編運動をどうみるか

（米田康彦）

プライバティゼーションの動きをどうみるか（林堅太郎）

ME化と労働統制（桜井幸男）

「情報化論争」と『資本論』

—今日の実践的課題と向き合うための一試論（重本直利）

コンピュータと物象化—重本論文へのコメント—（竹内貞雄）

アバラン産業の高付加価値化と中小企業（安満弁吉）

古典を読む

エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』

（横山寿一）

学界動向 わが国におけるグラムシ研究の動向（松田博）

社会主義経済学会第29回に参加して（溝端佐登史）

投稿 大阪における零細業者の健康と生活・労働（大松美樹雄）

研究ノート

閔下稔・芦田亘・柳ヶ瀬孝三著『現代資本主義』を読んで

（市橋勝）

成瀬龍夫・小沢修司・武田宏・山本隆著『福祉改革と福祉補助

金』を読んで（川瀬憲子）

書評

大西広著『政策科学』と統計的認識論（高島拓哉）

大泉英次・山田良治編著『戦後日本の土地問題』（高島嘉巳）

基礎研だより 第12回研究大会盛況裏に終わる（藤岡博）

新刊案内 基礎経済科学研究所編『ゆとり社会の創造』

●第62号（1990年3月） 1000円

研究者群像 関恒義先生に聞く

特集 労働はどう変わるか

特集によせて（編集局）

シンポジウム：労働過程研究の現状と課題

報告1 西ヨーロッパにおける労働過程論争の展開（成瀬龍夫）

報告2 マネジメント論からみた労働過程研究（渡辺峻）

報告3 技術論からみた労働過程研究（小林正人）

討論 労働過程研究をめぐる諸論点と今後の課題

成瀬龍夫・渡辺峻・小林正人（司会）重森曉

マルクスの労働過程論をどう読むか（仲野組子・森岡孝二）

交通労働過程の変容をめぐって（林久和）

日本型高密度労働システムへの一観角（十名直喜）

ブレイヴァマンはどう乗り越えられるべきか（大西広）
学界動向
経済理論学会第37回大会（増田和夫）
日本財政学会第46回大会（中谷武雄）
書評 輛峻淑子著『豊かさとは何か』（川口民記）
モニター書評 基礎研編『ゆとり社会の創造』を読んで
労働組合関係者・若い世代に読んでもほしい本（川原一行）
自由時間獲得の重要性を力説（末松三郎）
書き手に求められる具体化能力（杉浦正和）
文献紹介 加藤睦夫『日本の税制』
基礎研だより 1990年春季合宿研究交流集会のご案内

●第63号（1990年6月） 1000円

研究者群像 十名直喜さんに聞く

特集 世界史のなかの社会主義

特集によせて（編集局）
世界史のなかの現存社会主義（芦田文夫）
「伝統的」システムの崩壊—ポーランド政治・経済改革の歴史的位置と課題（田口弘雅）
東欧変動と社会主義の古典的原理
—ハンガリー改革を素材として（堀林巧）
東欧社会主義の改革の理論的諸問題（田中宏）
85年以降のソ連・東欧の主な動き（編集局）
入門講座 効用価値説と労働価値説（大西広）
古典を読む 山田盛太郎著『日本資本主義分析』（岡田知弘）
現代の焦点 コメ市場開放問題とガット交渉（松原豊彦）
歴史の探求 IMF・世銀の創設（小林世治）
論文 アメリカでみた民衆参加の研究運動（藤岡博）
研究ノート 重森暁著『現代地方自治の財政理論』によせて
（内山昭）
書評
岡田知弘著『日本資本主義と農村開発』（遠藤宏一）
田口富久治著『ケインズ主義的福祉国家』（成瀬龍夫）
モニター書評
基礎研編『ゆとり社会の創造』を読んで（布村伸一）
基礎研だより
1989年度春季合宿研究交流集会の報告（井内尚樹）
第12回研究大会のご案内

●第64号（1990年10月） 1000円

研究者群像 藤本武先生に聞く

特集 世界経済論の課題をさぐる

特集によせて（編集局）
フリートーク：世界経済論の課題をさぐる
報告1 今日の世界経済をどうみるか（関下稔）
報告2 現代帝国主義とアジアをどうみるか（中村雅秀）
報告3 現代世界の生産力構造の変化をどうみるか
（林堅太郎）
報告4 現代世界経済と国際金融をどうみるか（奥田宏司）
報告5 現代資本主義と社会主義をどうみるか（森岡孝二）
討論 世界経済論の課題をさぐる
三宅島からの通信 1990年6月の三宅島民の選択（末松三郎）
入門講座 労働価値説と「マルクスの基本定理」（森岡真史）
読者からの質問に答える（大西広）
古典を読む 野呂栄太郎著『日本資本主義発達史』（松本剛）
現代の焦点 ドイツ「再統一」への一視角（松永佳子）
論文 尾崎芳治著『経済学と歴史変革』から学ぶ（西野勉）
論文 技術論における方法について（野口宏）
研究ノート <豊かさ>のフィロソフィーを読む（川口民記）
書評 宮本憲一・横田茂・中村剛治郎編『地域経済学』
（高橋直樹）
基礎研だより
第13回研究大会成功裡に終わる！
基礎研公開講座「世界史における現在」のご案内

●第65号（1990年12月） 1000円

研究者群像 宮本憲一先生に聞く（上）

特集 企業社会ニッポン

特集によせて（編集局）
現代日本の労働者生活と人権状況（渡辺治）
渡辺講演を聞いて（森井久美子）
日本型企業社会の構造とその変革視点—『豊かな社会』日本の構造』の検討を踏まえて—（十名直喜）
企業社会—日本の構図（光岡博美）
医師からみた今日の労働現場と過労死
—「合理化」のもとでの健康問題—（田尻俊一郎）
現代の焦点 土地税制改革（重森暁）
学界動向 資本主義と社会主义—経済理論学会第38回大会共通論題印象記—（角田修一）
論文
ボスト・フォーディズム論と地域（青木圭介）
国際収支の各項目とその経済部門別区分—マネーサプライと関連させながら—（奥田宏司）
書評
P. トンプソン著『労働と管理—現代労働過程論争』
（片山一義）

●第66号（1991年5月） 1000円

研究者群像 宮本憲一先生に聞く（下）

特集 再考！ 社会主義

特集によせて（編集局）
『資本論』の社会主義（大野節夫）
スターリン体制の形成・確立・展開（森岡真史）
東ドイツの市民革命とドイツ統一（芦田亘）
映画は社会主義をどう映してきたか（末松三郎）
現代の焦点 430兆円公共投資問題（梅原英治）
歴史の探究 マンハッタン計画と戦後冷戦（高橋信一）
論文 経済学における価値の物質的基礎域（大日方聰夫）
書評
川口和子・鈴木彰著『女性とパート労働』（江尻彰）
大沼・山田・鈴木・山田著『北海道経済図説』（岡田知弘）
戸木田嘉久編『リストラクチュアリング 労働と生活』
（水野喜志彦）
基礎研だより 春季研究合宿の報告

●第67号（1991年7月） 1000円

研究者群像 黒川俊雄先生に聞く

特集 I 女と男の経済学

特集によせて（編集局）
女性論・婦人問題論争から学ぶもの（柴田悦子）
男女雇用機会均等法の施行をめぐって（久米弘子）
経済学とフェミニズム（角田修一）
特集 II 現代日本資本主義論争にむけて

ボスト・フォーディズムと日本資本主義（伊藤誠）
質疑応答
日本型システムと「フレキシビリティ」（十名直喜）
日本資本主義と新自由主義（篠田武司）
古典を読む 島恭彦『近世租税思想史』（北村裕明）
論文 「それ自体」をめぐる方法論（重本直利）
書評
相葉洋一著『貨幣と景気循環』（近藤学）
青木司著『情報化と技術者』重本直利著『意識と情報における管理』（山西万三）
初村尤而著『大阪市役所のナカは闇』（小森治夫）
鈴木文薫著『地域づくりと協同組合』（江尻彰）
池上・林・淡路編『21世紀への政治経済学』（西堀喜久夫）
有井行夫著『株式会社の正当性と所有理論』（森岡孝二）

●第68号（1991年11月） 1000円

研究者群像 川口弘先生に聞く

特集 解剖！企業社会ニッポン

特集によせて（編集局）
「会社本位」の構造（奥村宏）
日本の経営の働きかせ方（熊沢誠）
フォーディズムと日本の生産システム（成瀬龍夫）

討論

用語解説

現場からの発信

学習塾の現場から（道旗一郎）
いま、学校での「労働者教育」（柿沼昌芳）
三宅島レポート・重大な二月の村議選（末松三郎）
若き金融マンの労働実態①（小西豊）
新連載企画の開始にあたって（編集局）
入門講座 効率万能主義は悪いこと？（二神孝一）
研究ノート 地域経済と「内発的発展」論（芳野俊郎）
書評
梅垣邦胤『資本主義と人間自然・土地自然』（赤間道夫）
ミリュコフ『日本経済に学べ』（村口信夫）
山田良治『戦後日本の地価形成』（高島嘉巳）
弁護団全国連絡会議編『過労死 KAROSHI』（松下英爾）
新刊紹介
野沢・木下・大西編『自立と協同の社会システム』（高山新）
基礎研だより 第14回研究大会報告と参加者の声

●第69号（1992年3月） 1000円

研究者群像 早川和男先生に聞く

特集 地域再生の課題

特集によせて（編集局）
地域経済論の現状と課題（福田善乙）
内需拡大・生活重視政策とリゾート（中谷武雄）
「えひめ瀬戸内リゾート」構想の特徴と諸問題（鈴木茂）
地域開発における地方自治の主張（橋本了一）
用語解説

現場からの発信

子どもの意見表明力と社会科の学力（麻生公道）
雲仙普賢岳災害・もう一つの断面（松下英爾）

入門講座

取引費用と流通費用（吉田央）
質問にこたえる（二神孝一）

権利を創る 三洋電機定勤パート労働組合

書評

高須賀義博著『鉄と小麦の資本主義』（鶴田満彦）
中村哲著『近代世界史像の再構成』（島浩二）
植田・落合・北畠・寺西共著『環境経済学』（池田伸）
ウルフ&レズニック著『二つの経済学』（森岡真史）
基礎研だより

英書講読会

四国研究集会

●第70号（1992年7月） 1000円

権利を創る 全日本損害保険労働組合

特集 働きすぎ／働かせすぎ社会の構造

特集によせて（編集局）
働くものの人権と経済学の課題（川人博）
労働時間の国際比較による日本社会の特質（福島利夫）
雇用問題からみた「働きすぎ社会」（伍賀一道）
労働市場の国際化と日本の底辺労働者（仲野組子）
海外通信 モスクワ見聞記（森井久美子）
現場からの発信
高齢者医療・政策・運動へのアプローチ（大松美樹雄）
構造調整の時代に（飯田太郎）
入門講座 経済循環はどうとらえるか（伊藤国彦）
論文
アメリカ電話産業における消費者保護政策の一考察（西田達昭）
書評

ハーヴェイ著『都市の資本論』（岡田知弘）

坂井昭夫著『日米経済摩擦と政策協調』（小林世治）

大西広著『資本主義以前の「社会主義」と資本主義以後の社会主義』（菊本義治）
基礎研だより

1992年春季研究交流集会をふりかえって

ゼミ紹介 大阪第3学科－「発言せなソソソ」の気風いや増して

70号記念『経済科学通信』第61号～第70号の総目次

●第71号（1992年11月） 1000円

研究者群像⑯ 浜林正夫先生に聞く

特集 企業社会の転換と文化

特集によせて（編集局）
残業およびサービス残業の実態と労基法改正の必要性（森岡孝二）
レギュラション学派による「日本の労使関係」論批判（黒田兼一）
日本型産業社会の現状と展望（池上惇）
消費社会と文化（角田修一）
眞の「文化経済学」とは何か（大西広）
現場からの発信④
構造調整下の東北農業・農村の実態（神田健策）
入門講座⑥ 近代経済学からみたマルクス地代論（石上秀昭）
論文
教育投資論の日本の特性（柿沼昌芳）
森林の公益的機能と危機的状況（落合貞夫）
海外通信 モスクワ見聞記2（森井久美子）
海外書評 ボトモア編『マルクス主義思想辞典第2版』（重田晃一）
書評

重森暁著『分権社会の政治経済学』（鎌倉健）
寺西俊一著『地球環境問題の政治経済学』（角田知生）
望田幸男・大西広著『ゆれる大人=男性社会』（古来勝巳）
川人博著『過労死社会と日本』（水野喜志彦）
基礎研だより
盛会に終わった第15回研究大会

ゼミ紹介③ 入門近代経済学
読者アンケートの結果について

●第72号（1993年3月） 1000円

権利を創る③ 埋め立て地をなぎさ公園に

一小西和人さん（『週刊釣りサンデー』社長）に聞く

特集 福祉国家、その現在と展望

特集によせて（編集局）
福祉国家の日本の特質と現段階（横山寿一）
ドイツにおける福祉国家の動向（小淵港）
スウェーデンの動向（藤岡純一）
イギリス福祉国家の現在と分業原理（柳ヶ瀬孝三）
入門講座7 経済成長と景気循環（伊藤国彦）
現場からの発信⑤ 鉄鋼製品メーカーの現場から（松本学）
海外通信 Y先生への手紙 —RETHINKING MARXISMの大会に参加して（角田修一）
書評

基礎経済科学研究所編『日本型企業社会の構造』（米田康彦）
水岡不二雄著『経済地理学』（高島拓哉）

●第73号（1993年7月） 1000円

研究者群像⑯ 下山房雄先生に聞く（上）

特集 企業社会の変革と人権論

特集によせて（編集局）
労働法における個人と集団（西谷敏）
第3世代の人権論と発達研究の課題（田中昌人）
企業社会からの自立と人権・主体形成（二宮厚美）
討論

地域からみた医療と人権 (筋昭三)
現場からの発信(6) いわゆる1つの「お役所」考 (薮谷あや子)
入門講座8 「不況」の経済学 (伊藤国彦)
海外通信
ラオスで考えたこと (平野喜一郎)
レーニンとエリツィン (大西広)
書評
奥田宏司編『ドル体制の危機とジャパンマネー』 (毛利良一)
松岡寛爾著『景気変動と資本主義』 (後藤康夫)
西谷芳敏著『ゆとり社会の条件』 (伍賀一道)
保田芳昭編『マーケティング論』 (山西万三)
基礎研だより
1993年度春季研究交流集会開催
ゼミ紹介(4) 企業社会を考えるゼミ

●経済科学通信 臨時増刊 (1993年6月)

21世紀への挑戦
基礎研の4半世紀と21世紀展望
25周年記念冊子の刊行によせて (25周年記念事業実行委員会)
基礎研25周年に思う (島恭彦)
【寄稿】基礎研25周年と経済学の課題

(有井行夫, 伊藤誠, 奥村宏, 川入博, 戸木田嘉久, 宮本憲一, 米田康彦)
インタビュー 「働きつつ学ぶ権利と私の経済学」 (池上惇)
座談会 ①基礎研の4半世紀と21世紀展望
(井内尚樹, 森岡孝二, 重森暁, 柳ヶ瀬孝三, 藤岡惇, 大西広, 小沢修司)
海外で触れた人権の経済学と基礎研 (柳ヶ瀬孝三)
ジュリエット・B・ショア 「万国の労働者、くつろげ」
(翻訳: 英書講読会)

座談会 ②夜間通信研究科に参加して
(小沢修司, 温井賢子, 高田好章, 十名直喜, 沼田延夫)
【投稿】基礎研運動と私 (大松美樹雄, 大日方聰夫, 柿沼昌芳, 高田好章, 十名直喜, 中川スミ, 中谷武雄, 西田達昭, 林久和, 藤木邦顕, 増田晃一, 水野喜志彦)

【資料】年表

●第74号 (1993年12月) 1000円

研究者群像 下山房雄先生にきく (下)

特集 24時間化社会

特集によせて (編集局)
24時間化社会における労働と生活 (鶴谷徹)
24時間社会と放送 (田比良敏夫)
働きすぎ社会と家族 (佐藤卓利)

論文
日本型生産システムのゆくえ (大須正明)

トヨタ生産方式と労働のありさま (千田忠男)

特別寄稿 「人間発達の経済学」によせて (島恭彦)

入門講座(9) 環境問題の経済学 (友野哲彦)

海外通信 ラオスで考えたこと(2) (平野喜一郎)

国際交流 民衆経済学センターの経験一・ショアさんに聞く
書評

J・ショア著『働きすぎのアメリカ人』 (有井行夫)
十名直喜著『日本型フレキシビリティの構造』 (成瀬龍夫)
基礎経済科学研究所編『戦後経済学を語る』 (山本広太郎)
藤江昌嗣著『移転価格税制と地方税還付』 (伊藤国彦)

基礎研だより 第16回研究大会 (藤岡惇)

●第75号 (1994年3月) 1000円

入門者のための経済学

巻頭言 回避する権利から発言する権利へ (二宮厚美)

第I部 現代経済学の諸課題

マルクス経済学 マルクス経済学における労働の概念
(米田康彦)

近代経済学 市場経済分析のひろがり (森岡真史)

財政学 財政民主主義の現代的再生を求めて (重森暁)
労働経済学 日本労使関係と労働者の主体性・自発と強制
(光岡博美)
金融論 金融改革のもたらしたもの (伊藤国彦)
経済史 「もう一つのイギリス史像」が問いかけるもの
(島浩二)
社会政策学 人権を基礎にした労働・生活分析 (横山寿一)
国際経済学 世界経済・政治経済学・地球市民社会
(閔下稔)
環境経済学 環境経済研究の動向と展望 (植田和弘)
第II部 揺れ動く日本と世界の現在―経済学の目からとらえる
バブルと円高 (松本朗)
日本型企業社会と労働時間 (森岡孝二)
ロシアはどうなる? (溝端佐登史)
第III部 経済学・3つのスム
統計データに親しもう (吉田央)
古典を読むことの効用 (大西広)
生涯学習のすすめ (藤岡惇)

●第76号 (1994年5月) 1000円

権利を創る(4) 男女平等の最前線

ー「商社に働く女性の会」越堂静子さんに聞く
特集 日米における労働時間短縮の障壁

特集によせて (編集局)
資本主義と労働時間 (ジュリエット・ショア)
『働きすぎのアメリカ人』翻訳の経過 (川入博)
『働きすぎのアメリカ人』を読んで (中川スミ)
脱テラー主義への展望について (若森章孝)
近代企業、その境界と制約 (ルイス・ヒロセ)
リプライ
日本型企業社会と性別役割分業をめぐって一大会印象記
(中川スミ)

投稿論文

時短、週休2日を口実にした交替制勤務改悪の実態とその改善の
方向 (奈良貞茂治)

国際交流 「今日の日本資本主義」へのコメント
(ジェイムズ・オコンナー)

海外通信

南部イタリアの風土と社会 (上) (高原一隆)

スウェーデンで思ったこと (温井賢子)

書評

経済学教育学会編『経済学ガイドブック』 (柳ヶ瀬孝三)
木原正雄・溝端佐登史・大西広編『経済システムの転換』
(齊藤久美子)
本多淳亮・森岡孝二編『脱「サービス」残業社会』 (浪江巖)
M.J.ビオリ・C.F.セービル著『第二の産業分水嶺』
(十名直喜)

基礎研だより ゼミ紹介(5) 福祉社会を考えるゼミ (岡崎祐司)

●第77号 (1994年10月) 1000円

座談会 憲法問題の政治経済学 (渡辺治 和田進 二宮厚美)

特集 I 日本国型企業社会と女性

日本型企業社会を超える (大沢真理)
日本型企業社会と女性労働・家族 (中川スミ)
企業社会克服の戦略 (木下武男)

特集 II マルクスの何を引き継ぐか

マルクスにおける労働論の射程 (有井行夫)
マルクスのはじまり (角田修一)

古典としてのマルクス (森岡真史)

海外通信 南部イタリアの風土と社会 (下) (高原一隆)

記念講演 経済学と人間 (水田洋)

書評

森岡孝二編著『現代日本の企業と社会』 (井上秀次郎)
基礎経済科学研究所編『文化中心社会の条件』 (後藤和子)
野村正實著『トヨティズム』 (青木圭介)

権利を創る(5) 男女平等の扉をひらくー住友系「メーカーネット

ワーク」北川清子さんに聞くー

特集 日本型企業社会と家族

日本型企業社会と家族 (木本喜美子)

日本の労働者的人権と家族 (宮地光子)

日本型福祉社会と家族 (佐藤卓利)

論文

90年代不況と日本経済の行方 (菊本義治)

男女賃金格差と人事考課 (黒田兼一)

研究ノート『人間発達の政治経済学』によせて

マルクスの使用価値と「固有価値の経済学」 (池田清)

近代個人主義の人間観をどう超えるか (藤岡博)

文献案内 (藤岡純一)

誌面批評 No.77 (中谷武雄)

書評

中谷武著『価値、価格と利潤の経済学』 (鶴田満彦)

山口義行・小西一雄著『ボストン不況の日本経済』 (松本朗)

神戸大学発達科学部社会環境論研究会編『人間発達と社会環境』 (山本健慈)

基礎研だより

共同研究集会の呼びかけ

●第79号(1995年8月) 1200円

特集1 阪神大震災と地域行政

神戸市都市経営の研究(1) (海田光平)

「大震災」を振り返る (友野哲彦)

震災直後の現場を歩く記 (末松三郎)

特集2 企業社会と経済の国際化

日本型企業システムとその転換の現局面 (十名直喜)

国際産業調整と地域経済の変容 (岡田知弘)

持続可能な発展を築くグローバル・システムとローカル・イニシアチブ (遠州尋美)

どのような転換をはかるべきか (アイリーン・スマス)

住民が主人公の地域づくりに向けて (木村雅英)

文献案内

講演 日本国型企業社会と労働組合運動の課題 (下山房雄)

戦後50年の論点

戦後社会科学ー求められる50年目の反省ー (大西広)

現存した社会主義の崩壊とマルクス主義の課題 (神谷章生)

「コミュニケーションの失敗」と政治経済学の課題

(柳ヶ瀬孝三)

海外文献紹介 (仲野組子)

誌面批評 No.78 (林弥富)

書評

森岡孝二著『企業中心社会の時間構造ー生活摩擦の経済学』

(岩城穂)

山西万三著『情報と消費の経済学』 (真部和義)

八田達夫著『消費税はやはりいらない』 (鶴田廣巳)

基礎研だより

●第80号(1996年2月) 1200円

特集

戦後50年を期に社会科学を再考し、未来を展望する研究集会

シンポジウムI 戦後日本の社会科学と社会主義

日本の社会科学と市民社会論 (新村聰)

20世紀社会主義の崩壊と経済学の反省 (田中宏)

予定討論

「丸山真男」と市民社会論 (富田宏治)

マルクスをどう考えるか (山本広太郎)

「市民社会」概念の視点とマルクス主義諸学の停頓

(鈴木富久)

中国社会主義の成立 (堀地明)

シンポジウムII 戦後日本の社会システムの変容と現在

ボストンフォード主義をめぐる社会的・政治的対抗 (後房雄)

トヨタ生産方式と労働の変容 (千田忠男)

戦後日本経済研究の新潮流 (長島修)

予定討論 戦後日本の社会システムの変容と現在 (青木圭介)

トヨタシステムの正確な評価のために (湯本誠)

阪神大震災特別シンポジウム

セッション報告

アジアの成長と変貌 (柳ヶ瀬孝三)

共同性と社会科学の論理 経済民主主義研究会 (大野正和)

エンゲルス没後100年 (石川雅博)

先進資本主義国の変容 (井内尚樹)

現代の企業批判 (増田和夫)

グラムシ研究のアキュアリティー 京都グラムシ研究会 (松田博)

丸山真男論の今日の意義 政治学基礎文献研究会 (立石芳夫)

ロシアと中国の体制転換 比較経済体制研究会 (小西豊)

戦後歴史学の50年 大阪若手歴史家グループ (堀地明)

戦後50年と日本の福祉社会 (福島利夫)

マルクス経済学と近代経済学 経済学研究会 (藤本義昭)

地域管理政策と地方自治 財政研究会 (只友景士)

戦後50年の美学と芸術 JSA大阪支部芸術論研究会 (花房無限)

社会主義崩壊後の資本主義超克の展望

伏見唯物論研究会 (高岸正司)

座談会 戦後50年・社会科学の課題と研究共同の展望

(磯崎修治 井内尚樹 大西広 岡崎祐司 小野満 神谷章生

森岡孝二 柳ヶ瀬孝三 司会: 森岡真史)

誌面批評 No.79 (角田知生)

●第81号(1996年6月) 1200円

論文

住専・不良債権問題と不動産金融

ー土地問題論の視角からー (大泉英次)

研究者群像(第20回) 田口富久治先生にきく

特集 岐路にたつ社会福祉

社会保障の制度改革と「国民負担率」 (福島利夫)

民活福祉と社会保障の再編 (横山寿一)

公的介護保険の基本的性格と問題点 (岡崎祐司)

医療経営の変容と健康・医療保障論の課題 (大松美樹雄)

人間発達の社会福祉理論の構想 (武元煦・中井健一)

社会福祉の技術論体系の再検討ー人間発達の社会福祉理論の構

想覚書Iー (中井健一)

追悼 島恭彦先生

島恭彦先生と基礎研 (柳ヶ瀬孝三)

島恭彦先生の思い出 (重森暁)

書評

森岡孝二編『激論!企業社会』 (加藤哲郎)

基礎経済科学研究所編『日本型企業社会と女性』 (渡辺峻)

基礎経済科学研究所編『日本型企業社会と家族』 (木田淳子)

西田達昭著『日米電話事業におけるユニバーサル・サービス』 (佐中忠司)

溝端佐登史著『ロシア経済・経営システム研究』 (小西豊)

井野隆一他編著『現代資本主義と食糧・農業』 上・下 (松原豊彦)

竹内貞祐著『システムと人間』 (山西万三)

坂本修・坂本福子著『格闘としての裁判』 (羽潤三良)

民主法律協会派遣労働研究会編『がんばってよかった』

(仲野²菊池²組子)

基礎研だより

●第82号(1996年10月) 1200円

TOPICS

ロシア大統領選挙の政治経済状況 (溝端佐登史)

北朝鮮ー亡命者急増の背景 (黒坂剛)

沖縄が聞かせているもの (徳田博人)

薬害エイズと厚生省 (松田亮三)

5%消費税と家計への影響 (土居英二)

株主総会の裏側 (大石直子)

権利を創る(6) 市民による企業の評価運動

松丸正弁護士（株主オンブズマン）聞く
特集Ⅰ インターネットの経済学
インターネットとマルクス・エンゲルス研究（赤間道夫）
インターネットの経済的意義（野口宏）
社会科学におけるインターネットの利用（吉田央）
政治学研究にインターネットは使えるか？（小堀眞裕）
特集Ⅱ 金融システム破綻
日本経済の現段階と金融システム破綻（向壽一）
金融恐慌は来るのか？（伊藤国彦）
書評
大谷・大西・山口編『ソ連の「社会主義」とは何だったのか』（西岡俊哲）
内橋克人・奥村宏・佐高信編『日本会社原論』（青木圭介）
十名直喜著『日本型鉄鋼システム』（阿部健）
藤井治枝著『日本型企業社会と女性労働』（黒田慶子）
二ツ森範子著『龍の子と生きて』（吉田省二）
有井行夫・長島隆編『現代認識とヘーゲル＝マルクス』（山本広太郎）
政治学入門 制度の政治学と比較政治学
一口ローワル・ターナーの方法（神谷章生）
誌面批評 No.81（佐藤卓利）
基礎研だより

●第83号（1997年3月） 1200円

TOPICS
『ノーといえる中国』と中国の知識人（孫仲清）
21世紀の食糧問題（江尻彰）
大阪府堺市O-157禍のなかで（黒田慶子）
知事の公告総覧応諾後の沖縄問題（野原全勝）
労金一合併で活性化は可能か（山西万三）
「重複立候補」を擁護する（神谷章生）
研究者群像（第21回）
大塚史学を超えて—尾崎芳治先生に聞く—
特集 企業・国家・市民社会
ボスト福祉国家政治と市民的自立（山口定）
市民・企業・国家をめぐる英国政治の動き（小堀眞裕）
企業活動の情報公開と市民監視（醍醐聰）
企業活動の市民監視と株式オンブズマン（森岡孝二）
大蔵省改革の課題（横田茂）
投稿論文
資本構成と利潤率低下法則（増田和夫）
文献案内
「戦略的」構造改革と中小零細企業問題（芳野俊郎）
政治学入門
企業の権力、企業の民主化（上田道明）
書評
松尾匡著『セイ法則体系』（山崎好裕）
和田幸子著『東南アジア経済社会論』（阪本将英）
十名直喜著『鉄鋼生産システム』（井上義祐）
兵庫県震災復興研究センター『大震災と人間復興』（友野哲彦）

●第84号（1997年6月） 1200円

TOPICS
ペルー人質事件考（河合恒生）
北朝鮮高官亡命を見る視点（萩原遼）
変貌するインド経済（泉谷晃）
重油流出事故の残したもの（岡下宗男）
劣化ウラン弾発射事件（田中三郎）
大学教員任期制法案、国会提出へ（若林靖永）
NNKの高炉再稼動（十名直喜）
権利を創る（7）731部隊研究の現在（太田紘志）
特集 中国の香港
香港返還の歴史的意義について（佐藤進）
香港返還と中国の行方（陳福波）

私の「香港」物語（山本裕美）
中国本土との「経済一体化」を進める香港（姚国利）
香港返還と「一国二制度」（山口正之）
21世紀の中国経済を予測する（大西広）
「西の香港」めざす新疆ウイグル自治区（アブリキム・ハサン）
構造転換に悩む瀋陽（松野周治）
世界資本主義のなかの中国（溝口由己）
政治学入門
「政治化された経済」の時代の政治学（高橋肇）
現代社会批評 女性の困難（黒田慶子）
書評
下谷政弘著『持株会社解禁』（前田定孝）
ルネ・レモン著『フランス』（中田晋自）
中村静治著『「資本論」と「論語」』（日野秀逸）
J.E.ローマー著『これからの社会主義』（松井暁）
関電人権裁判争議団『思想の自由は奪えない』（羽淵三良）
川瀬光義著『台湾・韓国の地方財政』（鶴田廣巳）
誌面批評 No.83（柳原克行）

●第85号（1997年10月） 1200円

TOPICS
1997年英國総選挙の結果と特徴（小堀眞裕）
1997年フランス総選挙（中田晋自）
NTTの民営化から12年（高橋幸雄）
底なしの腐敗—野村証券と第一勧銀（森岡孝二）
生協の危機と再生の課題（金山修）
臓器移植法—多くの疑問残したまま10月より施行（板井孝一郎）
特別寄稿
複雑性とはなにか（益川敏英）
香港返還の意味と問題（浅井基文）
特集 新国際分業とアジア
歴史的転換期の世界とアジア経済（和田幸子）
東南アジアの経済成長と農業・食糧問題（櫻原正澄）
国際化のなかの地域産業政策（鈴木茂）
日本と途上国の大労働者の競争関係について（小野満）
香川県東部の地場産業手袋業の歴史と課題（橋本了一）
日本のエアゾール産業と生産の国際化（高田好章）
書評
林毅夫・祭訪・李周 共著『中国の経済発展』（陳力陽）
富田宏治・神谷章生編『<自由一社会>主義の政治学』（碓井敏正）
下山房雄著『現代世界と労働運動—日本とフランス』（小越洋之助）
池田清著『神戸都市財政の研究』（北野正一）
木下滋著『産業構造の変化と都市』（平岡和久）
谷江幸雄著『ソ連経済の神話』
新刊紹介
川人博『いま人権を読む』『世界人権の旅』（森岡孝二）
政治学入門
「情報化」の進展と世論形成（立石芳夫）
現代社会批評
演劇的想像力と社会科学的想像力（竹内真澄）
投稿論文
医療保険改革と日本経済の構造改革（河野すみ子）
誌面批評 No.84（荒木武司）

●第86号（1998年4月） 1200円

TOPICS
新「日米防衛協力指針」を考える（戸田昌基）
金融ビッグバン（松本朗）
山一証券の経営破綻（野町直彦）
「子供の性」と刑罰的規制（佐々木光明）
「自由主義史観」の本質（碓井敏正）

授業料の有料化と揺れるドイツの大学（望田幸男）
権利を創る（8）地域自立発展研究所（神田浩史）
特集 規制緩和と労働
規制緩和と労働（佐賀一道）
労働の現場と規制緩和（千田忠男）
労働時間の規制はなぜ必要か（森岡孝二）
労基法改正と女子保護規制撤廃（中川スミ）
米国における規制緩和と労働市場の変容（仲野《菊地》組子）
ドイツにおける規制緩和と社会扶助（布川日佐史）
特別寄稿
資本主義の発展段階と統合資本主義（杉本昭七）
グローバリゼーションと地域経済（高原一隆）
書評
千田忠男編著『労働科学入門』（佐藤卓利）
北原勇・伊藤誠・山田銳夫著『現代資本主義をどう見るか』
(赤間道夫)
政治学入門 都市の政治学（柏原誠）
現代社会批評 グリーン・ツーリズムの発展可能性（棚山研）
誌面批評 No.85（小林世治）
基礎研だより

●第87号（1998年7月） 1200円

TOPICS
合衆連衡する日本の政党政治はどこへ向かっていくのか
(神谷章生)
大蔵省・日銀接待の経済学的分析（鶴田廣巳）
『ムカつく子ども 荒れる学校』と現代の教師（福井雅英）
世界の行政改革論議（堀雅晴）
風雲急をつげるMAI（多国間投資協定）交渉のゆくえ
(藤岡博)
特別寄稿
21世紀のオルタナティブな発展の道—「非営利・協同」セクターと地域共生の可能性をさぐる（藤田暁男）
特集 國際金融システムとビッグバン
日本の対外投資とドル高の構造（奥田宏司）
米国のお況をめぐる諸説（伊藤國彦）
タイの通貨危機（西口清勝）
アジア経済危機と中国の香港（佐藤進）
どうなる日本の金融システム（山西万三）
地域経済から見た金融ビッグバン（松本朗）
地域国民のための金融・経済改革の道（海野八尋）
政治学入門 フランス地方分権化の政治学（中田晋自）
現代社会批評 問題としての「男の子」（中村正）
書評
吉信肅著『国際分業と外国貿易』（板木雅彦）
佐々木雅幸著『創造都市の経済学』（藤岡博）
研究ノート
小森治夫著『日本型地域開発』の提起する諸論点—「日本型土地システム」概念の批判的検討を中心に—（高島嘉巳）
誌面批評 No.86（藤田実）
基礎研だより

●第88号（1998年11月） 1300円

TOPICS
「被災者生活再建支援法」の検証（池田清）
ユーロ・コインの表と裏（福田昭良）
北アイルランド和平—現在、過去、未来—（南野泰義）
調査開始後最悪の失業率（佐賀一道）
環境ホルモンの危険性（佐古井一朗）
中国ハルビンの洪水と財産保険（吉田元）
回帰2年目の香港（大西広）
特集 What's NPO?
福祉社会の形成と非営利協同組織（川口清史）
特定非営利活動促進法と企業社会変革の展望（池田直樹）
福祉国家の再建—企業中心社会を超えて（横山寿一）

福祉国家の光と影（碓井敏正）
福祉国家の再編とジェンダー（中川スミ）
福祉観の転換と社会経済システム
—アマルティア・センの発達概念をもとに—（吉川英治）
2000年代の人材育成戦略—公正・文化・環境を配慮した社会を目指して—（モンテ・カセム）
現代社会批評 映画鑑賞の弁証法（平野喜一郎）
政治学入門 「政治的なもの」への挑戦—フェミニズムから政治学へ（世登和美）
投稿 近代家族論と歴史の進歩（遠山日出也）
研究ノート 経済学の始まり（中谷武雄）
書評
基礎経済科学研究所編『地球時代の政治経済学』（関下稔）
大西広著『環太平洋諸国の興亡と相互依存』（浦坂純子）
小川紀著『後発国と国家資本主義—20世紀「社会主义」とは何だったか』（松尾匡）
基礎研だより

●第89号（1999年3月） 1300円

TOPICS
沖縄問題の現在（亀山統一）
議員立法による基本法制の改正と法制審議会（後藤雅貴）
生命保険契約の締結および給付金・保険金支払いの実際
(森井久美子)
「国益」とは何か—江沢民主主席来日発言の波紋（菅谷音）
台湾「三合一」選挙と「新台湾人」（陳綽）
98年秋、韓国をゆるがした「一事件」（中村福治）
イタリアの政局変動（岡林信一）
赤緑連立政権の船出—1998年ドイツ連邦議会選挙を振り返って
(中谷毅)

特集 不況のゆくえ
世紀末世界経済の深層と21世紀への曙光（関下稔）
アジア危機の原因と展望—回復は今年から—（大西広）
韓国経済の構造改革とその行方（趙容來）
ロシア金融危機と経済政策の動向（溝端佐登史）
平成不況に見る循環と構造（岩下有司）
百貨店業界に吹き荒れるリストラの嵐（落合修二）
世界大恐慌論の問題点（増田和夫）
投稿論文
資本主義の「極限の発展=未来社会への移行」について
(梅垣邦胤)
父子家庭における仕事と家事の両立問題
—経済的問題を中心に—（山田亮）
現代社会批評
メディア王マー・ドックの日本上陸とユニバーサルアクセス権
—スポーツ争奪戦の行方—（森川貞夫）
政治学入門
ドイツ政治学の最近の動向
—ラディカル派の議論を中心として—（北村浩）
書評
岩田勝雄編『21世紀の国際経済』（細居俊明）
角谷新一・西山賢一・御園謙吉『経済・経営系学生のためのエントリーパンフレット』（佐々木潤子）
森田成也著『資本主義と性差別』（青柳和身）
誌面批評 No.88（柳ヶ瀬孝三）
基礎研だより

●第90号（1999年7月） 1300円

TOPICS
「地域振興券」の動向と問題点（橋本了一）
'99年度税制改正の概要（増田晃一）
薬害再発の温床—厚生省の外圧利用の規制緩和策（尾内康彦）
徳島・吉野川第十堰問題の現段階（しおまねき）
非核港湾条例は違法ではない（太田紘志）
北朝鮮の人権問題が問いかけるもの（山田文明）

特集 中小企業の挑戦

- アメリカ経済における中小企業の役割（水津雄三）
不況打開に挑戦する中小企業のネットワーク化について
一大阪での小・零細企業の経験から一（井内尚樹）
ナニワ企業団地金属加工工場の現状（芳野俊郎）
ものづくりグループからの報告
(1) ナニワ企業団地協同組合 NUP（川合晴夫）
(2) 関西中小工業協議会 WIC（河村道男）
(3) きづがわグループネットワーク KGN（石倉昇）
(4) 東大阪金属加工グループ HIT（長谷川哲夫）
長島精工の技術移転とアジアの経済発展（木下英雄）

投稿論文

- 山田盛太郎『日本資本主義分析』の原像（中根康裕）
第二次世界大戦後の日本経済
—『国際経済計算年報』に見る日本経済（福永清二）
政治学入門
カナダの多文化主義(Multiculturalism)
—政策的発展と政治的・社会的インパクト（柳原克行）
現代社会批評
改革開放が生み出した中国新社会「エリート」（菅谷音）
書評
基礎経済科学研究所編『新世紀市民社会論』（石井潔）
井上義祐著『生産経営管理と情報システム』（十名直喜）
松村文武・藤川清史著『「国産化」の経済分析』（安藤哲生）
細井克彦・林昭・千賀康利・佐藤春吉編『大学評価と大学創造』
（高野良一）
関下稔・石黒馨・閔寛治編『現代の国際政治経済学』
（和田幸子）
三井マリ子著『男を消せ！』（世登和美）
誌面批評 No.89（小野満）
基礎研だより（高田好章 増田晃一）

●第91号（1999年12月） 1300円

TOPICS

- インドネシア情勢への視点（和田幸子）
日本の景気回復は本当か？（増田利夫）
「日の丸・君が代」法制化と「個性尊重」の「教育改革」
（森島涉）
革新足立区政の歴史的意義（宮下武美）
敦賀原発事故の意味するもの（永田忍、福永清二）
阪神・野村フィーバーの考察（宮崎幹朗）

特集 「市民社会」を問う

- 特集『「市民社会」を問う』によせて（森岡真史）
日本型企業社会論と新世紀市民社会論（大西広）
市民社会、国民国家、グローバリゼイション（碓井敏正）
サイド・エフェクトとしての市民社会化—意図せざる革命としての市民社会への課題設定—（神谷章生）
企業改革と市民—奥村宏氏の提起を受けて—（森岡孝二）
国家に依存した日本型企業社会を解体する2つの道（藤岡惇）
「新世紀市民社会」論とジェンダー（中川スミ）
市民運動に Yes! 「市民社会」論に No!（小林世治）
「市民社会」とは何なのか（高田好章）
「不法滞在」外国人と市民社会（山田亮）

討論 土地問題と日本再生

- 平成大不況・土地本位制からの脱出
—『日本再生トータルプラン』—（山本孝則）
「土地問題」解決とトータルな「日本再生」—山本孝則著「日本再生トータルプラン」の検討—（高島嘉巳）
超越的「資本主義批判」の帰結と教訓
—高島嘉巳氏の拙著批判を読んで—（山本孝則）
投稿論文
高度情報社会におけるWTO体制下での電気通信事業の国際提携—外資系事業者の日本市場への参入戦略—（永松利文）
政治学入門 シティズンシップの政治（岡野八代）
現代社会批評

保守勢力に対抗する戦略的要としての「シングル単位論」

（伊丹広行）

書評

- 鈴木茂著『産業文化都市の創造』（十名直喜）
伍賀一道著『雇用の彈力化と労働者派遣・職業紹介事業』
（長井偉訓）
八尾信光著『資本主義経済の基本問題』『再生産論・恐慌論研究』（後藤康夫）
後藤和子著『芸術文化の公共政策』（小森治夫）
今村仁司著『近代の労働觀』（北川健次）
誌面批評 No.90（鎌倉健）
基礎研だより（小野満 藤岡惇）

●第92号（2000年4月） 1300円

TOPICS

- 東海村臨界事故（福永清二）
国立大学の独立行政法人化（若林靖永）
中国のWTO加盟一米中合意が成立（中本悟）
チェチェン紛争とロシアの世論（溝端佐登史）
コソボ情勢（泉谷晃）

特集 「市民社会」の周縁

- 高齢者の福祉問題と「市民社会」論（横山寿一）
市場の中の「弱い個人」（佐藤卓利）
部落の変化と問題解決の到達段階（奥山峰夫）
今日における請負労働者の活用実態と問題点（白井邦彦）
浮遊化・棄民化する若者と日本資本主義の今日（宮内拓智）
変化の中の中学校（高村貢）
ドメスティック・バイオレンス問題の現状と課題（雪田樹理）
中国残留孤児と生活保護（中原雄一郎）
周縁から「市民」を問う在日朝鮮民族（笠井弘子）
特別寄稿 世紀末不況の本質とオルタナティヴ（金子勝）
政治学入門 量的分析の政治学（広本政幸）
現代社会批評 子供、青年の健康（千賀康利）
投稿論文 アジア金融危機の中国への影響とその教訓（趙國慶）
書評

- 鈴木茂・大西広・井内尚樹編『中小企業とアジア』
（多田憲一郎）
北村裕明著『現代イギリス地方税改革論』（川瀬光義）
バレッシュ・チャトバディヤイ著『ソ連国家資本主義論』
（大西広）
宮内拓智著『戦後流通のダイナミズム』（保田芳昭）
中本悟著『現代アメリカの通商政策』（田村考司）
高増明・松井暁編『アカリティカル・マルキシズム』（松尾匡）
誌面批評 No.91（青木圭介）

●第93号（2000年8月） 1300円

TOPICS

- 2000年総選挙—激動の予兆を感じた選挙結果（神谷章生）
日本の財政赤字と代替戦略（鶴田廣巳）
東京都の「銀行税」—その功罪（佐々木潤子）
有珠山噴火と防災研究（植田達郎）
沖縄とサミット（小出由美）
オーストリア情勢（馬場優）
援助という仕事—東ティモールから（泉谷晃）

特集 環境・市民・公共事業

- 21世紀の環境問題と社会経済システム（植田和弘）
長良川河口堰による環境破壊と建設省の責任（柏谷志郎）
徳島・吉野川第十堰問題その後
—住民投票からボスト住民投票へ—（K・U）
公害被害者とともに進める環境再生のまちづくり（傘木宏夫）
環境評価の方法—航空機騒音を対象に—（友野哲彦）
グリーン調達の進展とISO 14001認証取得の「ドミノ倒し現象」
（佐古井一朗）
遺伝子組み換え作物と地球環境問題（江尻彰）
環境の世紀における将来社会構想

一脱物質化革命で雇用と仕事が変わる—（佐々木建）
エゴからエゴへ—「自己」の拡張と人間の発達—（藤岡惇）
政治学入門 丸山眞男と「自己内対話」（富田宏治）
現代社会批評 新たな社会システムへむけて—愚か者の合理性—（藤山英樹）
書評 石田和夫・安井恒則・加藤正治編『企業労働の日英比較』（十名直喜）
大橋範雄著『派遣法の彈力化と派遣労働者の保護』（伍賀一道）
神野直彦・金子勝編『「福祉政府」への提言』（大松美樹雄）
松尾匡著『標準マクロ経済学』（越智泰樹）
武藤一羊著『ヴィジョンと現実』（松田和男）
誌面批評 No.92（赤間道夫）
基礎研だより（高橋信一）

●第94号（2000年12月） 1300円

TOPICS

憲法調査会（永田秀樹）
そごう問題の教訓とゆくえ（落合修）
ゼロ金利解除（伊藤国彦）
増税への動き（増田晃一）
介護保険を越えて「福祉を創る」（上掛利博）
医療事故と「安全性の考え方」（大松美樹雄）
少年犯罪について—学校側の視点（高村貢）
朝鮮半島南北首脳会談（山田文明）
特集 福祉国家の可能性
社会保障と税財政問題（藤岡純一）
NPMと福祉国家の変容
—イギリス地方自治体の実践例から学ぶ—（山本隆）
「福祉国家」と社会福祉をめぐる若干の考察—社会福祉の歴史
的的社会性格と現代の福祉改革—（岡崎祐司）
変化の中の福祉国家と市民社会
—家族主義的福祉国家をめぐる論点（神谷章生）
グローバリゼーションと福祉国家の展望
—イアン・ゴフの新著序文から—（柳ヶ瀬孝三）
貧困・社会的排除との闘いの新局面と21世紀「福祉国家」の
課題（小沢修司）

投稿論文
公害健康被害補償制度の改正について（阪本将英）
政治学入門 第13回
福祉の行政学
—介護保険制度をめぐる地方政府の動向—（水谷利亮）
現代社会批評 第11回
年金者組合の挑戦
—もう一つの高齢者運動団体—（水野喜志彦）
書評
仲野組子著『アメリカの非正規雇用』（伍賀一道）
梅本哲世著『戦前日本資本主義と電力』（渡哲郎）
宮田和保著『資本の時代と社会経済学』（今井祐之）
岩井浩・福島利夫・藤岡光夫編『現代の労働・生活と統計』
（佐藤卓利）
池上惇・森岡孝二編『日本の経済システム』（高田好章）
阪本将英・田坂節子著『こどもの経済学』（笠井弘子）
伊田広行著『21世紀労働論』（笠井弘子 藤岡惇）
大西勝明・井上照幸・山下東子著『日本のビッグ・インダスト
リー(2) 情報通信』（長島修）
誌面批評 No.93（池田清）
基礎研だより（柳ヶ瀬孝三）

●第95号（2001年4月） 1300円

特集 20世紀マルクス経済学：回顧と展望

特集 によって（森岡真史）
経済学の方法におけるヘーゲル主義と実証主義（角田修一）
ヒルファディングヒルカーチー20世紀マルクス主義における労

働論的認識批判原理の喪失—（有井行夫）
唯物論的歴史觀における意識の位置と意義
—所有と規範概念を中心にして—（宮田和保）
マルクス解説（揚武雄）
20世紀経済学の回顧—価値論論争史—（米田康彦）
数理マルクス経済学の到達点と課題（松尾匡）
20世紀マルクス経済学の軌跡と理論の現実性（関根猪一郎）
20世紀のマルクス経済学と新世紀の課題（大西広）
「政治の科学」の軌跡と遺産
—戦後マルクス主義政治学の一断面—（神谷章生）

●第96号（2001年8月） 1300円

TOPICS

「ユニクロ」快進撃の秘密（小野満）
USJは大阪経済の起爆剤になるか（斎藤彰英）
教科書問題の危険な動向（岩井忠熊）
生保の政治献金禁止を求める社員代表訴訟（野町直彦）
諫早湾干拓問題は何を訴えているのか（池田清）
中国の生態環境と植樹（北川秀樹）
大きく対立するアメリカ景気の見方（岩下有司）
特集 ポスト企業社会を探る
労務管理をめぐる動向と21世紀の課題（黒田兼一）
ポスト日本型企業社会とジェンダー—公平性・平等性を前提に
した新たな共同の枠組みへ—（石田好江）
男性中心社会をどう改革するか（森岡孝二）
福祉国家の内実：分権・自治・参画そして自己決定—デンマー
ク・ミュン市の高齢者福祉の聴き取り調査から—（佐藤卓利）
「IT革命」と、「企業社会」の解体と再編成（井上秀次郎）
コンピュータシステムの変遷とIT労働者（高野雅章）
こうすれば持続可能な日本ができる—アジェンダの提案
（藤岡惇）

討論

本誌94号 神谷論文についての疑問（森岡孝二）
森岡氏の批判に応えて（神谷章生）

投稿論文

韓国の住宅再開発事業と低所得住民支援政策
—ソウル市の事例を中心に—（朴赫緒）
政治学入門 第14回
政治哲学の復権と価値の多元性（伊藤恭彦）
現代社会批評 第12回
「IT革命」狂想曲（増田和夫）
書評
足立基浩・大泉英次・橋本卓爾・山田良治編『住宅問題と市場・
政策』（高島嘉巳）
碓井敏正・大西広編『ポスト戦後体制への政治経済学』
（宮田和保）
重森暉著『分権社会の政策と財政』（佐々木雅幸）
誌面批評 No.95（北村洋基）
基礎研だより（小野秀生）

●第97号（2001年12月） 1300円

TOPICS

同時テロと不況の「深刻化」（小谷崇）
大国主義・暴力をめぐる反グローバル化NGOの論争
（藤岡惇）
「民主化後」の東南アジアの難題
—インドネシアの事例によせて—（和田幸子）
タオル産業のセーフ・ガード発動要請が投げかける問題
（松本朗）
日本の警察は米国の一謀報機関か？（田中三郎）
安心と自由の学校を—附属池田小事件から考える（北川健次）
特集 環境の思想と実践
サステイナビリティの政治経済学（宮本憲一）
価値論のボテンシャル
—ジェンダー差別・環境問題・地域通貨—（梅澤直樹）

- 環境論と価値論**
- アマルティア・センを手がかりとして— (吉田文和)
 - アマルティア・センにおける環境と価値 (吉川英治)
 - 環境の倫理について
 - 人間—自然の対立から環境の社会的倫理へ (牧野広義)
 - 地域からサステイナビリティ社会を創る (藤井絢子)
 - ボン合意と資金供与メカニズム (大島堅一)
- 投稿論文**
- 『近代知地平の超克』論の批判のために (宮田和保)
 - 現代社会批評 第13回
 - 企業別労組と企業内専制の現代的日本の特質 (鈴木富久)
- 政治学入門 第15回**
- 「新しい政治」とエコロジスト政党 (畠山敏夫)
- 書評**
- 中村哲編著『「経済学批判要綱」における歴史と論理』 (梅垣邦胤)
 - 森岡孝二・杉浦克己・八木紀一郎編『21世紀の経済社会を構想する』 (松井暁)
 - 松尾匡著『はるかさんとラピート君の 入門今どきの経済』 (西淳)
 - 佐々木雅幸著『創造都市への挑戦 産業と文化の息づく街へ』 (金武創)
- Information Asian Business & Management (ABM) ジャーナルの発刊に寄せて (十名直喜)
- 誌面批評 No.96 (十名直喜)
- 第98号 (2002年4月) 1300円**
- TOPICS**
- WTOドーハ閣僚会議宣言と多難な新ラウンド (中本悟)
 - BSE (狂牛病) と日本の畜産業 (櫻原正澄)
 - 公的資金再注入の是非を考える (山西万三)
 - ダイエーの再建の今後 (落合修)
 - 青木建設の経営破綻 (野町直彦)
 - 新光美術の偽装倒産との闘い (長谷川長昭)
 - 市町村合併が自治体財政にもたらすもの (川瀬憲子)
- 特集 テロ・報復戦争後の世界**
- テロ・報復戦争と現代資本主義、社会科学の課題 (環洋一)
 - アメリカにとっての2001年9月11日 (森岡孝二)
 - 戦争が答えではない (小杉功)
 - 同時多発テロ以来の英国政治の動き (小堀眞裕)
 - 新疆、インドネシア、湾岸、アフガン
 - アメリカ霸権衰退の流れで捉える— (大西広)
- 投稿論文**
- 社会的費用論と制度について (阪本将英)
 - 現代社会批評 第14回
 - 少女たちのサバイバル — 少女たちはなぜ「浜崎あゆみ」に惹かれるのか — (黒田慶子)
- 政治学入門 第16回**
- 国際貿易のゲーム論的政治分析 — 途上国による対先進国貿易協調のモデル — (劉吟衡)
- 書評**
- 松尾匡著『近代の復権』 (森岡真史)
 - 大谷禎之介著『図解 社会経済学』 (宮田和保)
 - 後藤和子編『文化政策学』 (中谷武雄)
 - 渡辺治著『日本の大国化とネオ・ナショナリズムの形成』 (神谷章生)
 - 松本朗著『円高・円安とバブル経済の研究』 (伊藤国彦)
- 第99号 (2002年8月) 1300円**
- TOPICS**
- 有事関連法案 (永田秀樹)
 - メディア規制三法案 (青山賢治)
 - 株主提案の新しい動き (野町直彦)
- 北朝鮮脱出者の実情と中国政府への提言 (山田文明)**
- 2002年フランス大統領選挙 (中田晋自)
- アルゼンチン通貨危機の発生と「解決」の方向 (竹内勉)
- 特集 「構造改革」とは何であったか**
- 日本型企業社会と産業・企業システムの再編成 (十名直喜)
 - 地域経済における不況打開の試み
 - 一仕事おこし事例と地域再生軸の検討 (芳野俊郎)
- 戦後日本の金融システム—変遷と展望 (山西万三)
- 現代日本企業社会の歴史的位置 (長島修)
- 構造改革を経済的にみると (渡哲郎)
- 今次不況分析からの問題提起はなにか
- 一春季研究交流集会での報告をうけて— (松本朗)
- 現代社会批評 「文化の時代」について (中谷武雄)
- 政治学入門**
- 批判的政治学の可能性は見えたか?
 - 「政治学入門」16回の軌跡を振り返って (神谷章生)
- 研究ノート**
- 企業改革の経済学
 - 森岡孝二『日本経済の選択』を読む (鶴田満彦)
- 書評**
- 藤岡純一著『スウェーデンの財政 分権型福祉社会』 (伊藤正純)
 - 重本直利著『社会経営学説—企業経営学から市民経営学へ』 (稻木隆憲)
 - 小森治夫著『ゼミナール女性学+男性学』 (石田好江)
 - 三土修平、大西広編『新しい教養のすすめ 経済学』 (西淳)
 - 奥田宏司著『ドル体制とユーロ、円』 (横田綾子)
- 誌面批評 No.97 (友野哲彦)
- 第100号 (2002年12月) 1300円**
- 特集 「経済科学通信」第Ⅱ世紀へ**
- 民主主義的共同研究・学習をめざして 第0号～第10号 (重森曉)
 - 基礎研夜間通信大学院の発足をめぐって 第11号～第20号 (中谷武雄)
 - 学界状況を反映した論争中心の編集 第21号～第30号 (大西広)
 - 共同研究と編集のメッセージ性 第31号～第40号 (赤間道夫)
 - 「構造転換」の分析を通じて新たな理論構築へ 第41号～第50号 (横山寿一)
 - 編集局の裏方から 第51号～第60号 (梅原英治)
 - 労働過程研究から企業社会批判へ
 - ソ連・東欧崩壊を背景に 第61号～第70号 (森岡真史)
- 本誌の集団的討論から生まれた
- 日本型企業社会論 第71号～第80号 (森岡孝二)
 - 資本主義と市場の生命力、東アジアの
 - 明暗への注目 第81号～第90号 (藤岡惇)
- 市民社会論とポスト企業社会論の交錯 第91号～第99号 (神谷章生)
- 100号記念メッセージ
- 人間発達を保障する労働と自立支援ネットワーキング (池上惇)
- お祝いと期待 (柴垣和夫)
- 3つの課題 (菊本義治)
- 今後の経済学の課題 (小谷崇)
- 新たな発展を期待 (成瀬龍夫)
- 「生活資金(リビング・ウエイジ)」論の展開を (中川スミ)
- 「関係性の経済学」の構築を (福田善乙)
- 一度きりの人生を有意義に (小野満)
- 『通信』編集作業を経験して (佐々木潤子)
- 歴史の岐路で迎えた『通信』100号 (岡宏一)
- 表紙イラスト作成の思い出 (川本浩)

『経済科学通信』第1号－第100号および臨時増刊号執筆者一覧

1. 講演・インタビュー記録および座談会出席者を含む
2. 執筆者の後の番号は号数を指す（「臨」は臨時増刊号）

あ

| | |
|-------|---|
| 相葉洋一 | 33 |
| 青木圭介 | 8, 32, 45, 46, 51, 65, 77, 80, 82, 92 |
| 青水司 | 31, 37, 42, 49 |
| 青柳和身 | 89 |
| 青柳憲子 | 2 |
| 青山賢治 | 99 |
| 青山秀司 | 13 |
| 明石由紀夫 | 49 |
| 赤間道夫 | 28, 53, 68, 82, 86, 93, 100 |
| 秋間実 | 23 |
| 揚武雄 | 10, 95 |
| 浅井基文 | 85 |
| 筋昭三 | 59, 73 |
| 鰐坂真 | 43 |
| 芦田文夫 | 17, 63 |
| 芦田亘 | 6, 12, 15, 17, 25, 26, 27, 28, 31, 38, 42, 50, 66 |
| 葦名元夫 | 29 |
| 麻生公道 | 69 |
| 阿知羅隆雄 | 16, 37 |
| 阿部健 | 82 |
| 安部誠治 | 33, 36 |
| 安満弁吉 | 28, 36, 39, 56, 61 |
| 荒木武司 | 85 |
| 有井行夫 | 58, 74, 77, 95, 臨 |
| 有本均 | 54 |
| 安斎育郎 | 51 |
| 安藤哲生 | 90 |
| 安藤実 | 59 |

い

| | |
|------|-----------------------------|
| 飯田太郎 | 70 |
| 池上惇 | 4, 5, 7, 8, 10, 12, 13, 14, |

15, 16, 17, 18, 20, 23, 26, 27, 30, 32,

35, 37, 71, 100, 臨

伊ヶ崎暁生

今井祐之

今崎暁巳

今宮謙二

今村元

井村喜代子

岩井浩三

岩井忠熊

岩井浩

岩城穰

岩下有司

岩田年浩

池島正興

池田清

池田伸

池田直樹

井沢嘉之

石井潔

石上秀昭

石川雅博

石倉昇

石沢篤郎

石田和夫

石田好江

泉谷晃

磯崎修治

板井幸一郎

板木雅彦

伊田広行

一井昭

市川弘勝

市橋勝

伊藤国彦

伊藤憲章

伊藤誠

伊藤正純

伊藤恭彦

稻木隆憲

井上純一

井上秀城

井上秀次郎

井上英之

井上義祐

井内尚樹

今井幸二

江口英一

え

94

50

42

48, 57

28

22

96

16

79

89, 96

4

う

植田和弘

上田健作

上田慧

上田秋助

植田達郎

上田道明

上野俊樹

後房雄

碓井敏正

宇田綾生

宇多真揆也

内山昭

内山哲朗

姚国利

馬越洋一

梅垣邦胤

梅沢邦夫

梅澤直樹

梅原英治

浦坂純子

海野八尋

57

江尻彰 36, 39, 41, 43, 45, 54, 59,
66, 67, 83, 93
遠州尋美 79
遠藤宏一 63

お

大石直子 82
大泉英次 81
大沢真理 77
大島堅一 97
大島雄一 32, 35
大須正明 74
太田紘志 21, 25, 48, 84, 90
大西広 40, 45, 50, 57, 60, 62, 63,
64, 71, 73, 75, 79, 80, 84, 88, 89, 91,
92, 95, 98, 100, 臨
大野節夫 66
大野正和 80
大辺誠一 54
大松美樹雄 61, 70, 81, 93, 94, 臨
大和田敢太 46
岡崎祐司 60, 76, 80, 81, 94
岡下宗男 84
岡武祐史 18
岡田知弘 37, 41, 63, 66, 70, 79
岡野八代 91
岡林二郎 8
岡林信一 89
岡宏一 31, 35, 52, 100
岡本高廣 85
置塙信雄 33, 59
荻野嘉弘 4
奥田宏司 54, 57, 64, 65, 87
奥村宏 68, 臨
奥山峰夫 92
小越洋之助 85
オコンナー, ジェイムズ 76
尾崎芳治 15
小沢修司 43, 54, 94, 臨
小嶋昭道 43
落合修 94, 98

落合貞夫 71
落合修二 89
越智泰樹 93
音羽周 27, 41, 45
尾内康彦 56, 90
小野寺わたる 50
小野秀生 7, 15, 22, 35, 96
小野満 80, 85, 90, 91, 96, 100
大日方聰夫 66, 臨
折原ゆき 47

か

海田光平 79
柿沼昌芳 57, 68, 71, 臨
角田修一 14, 20, 41, 42, 52, 54, 59,
65, 67, 71, 72, 77, 95
角田知生 71, 80
角橋徹也 49
掛川孝 37
笠井弘子 92, 94
傴木宏夫 93
梶浦恒男 59
梶原聰子 51
柏原誠 86
檍原正澄 55, 57, 85, 98
粕谷志郎 93
カセム, モンテ 88
片桐正俊 2
片山一義 65
勝木吐夢 26
加藤一郎 4, 6, 7, 10, 14, 47, 48
加藤哲郎 81
加藤房雄 20
加藤義忠 18
金山修 85
金武創 97
金子勝 92
鎌倉健 71, 91
上掛利博 44, 50, 60, 94
上島武 44, 55
神谷章生 79, 80, 82, 83, 87, 91, 93,

94, 95, 96, 98, 99, 100
神谷明 36
亀山統一 89
河合恒正 84
川合晴夫 90
川北昭夫 28
川口清史 22, 45, 51, 88
川口民記 62, 64
川口弘 68
川瀬憲子 61, 98
川瀬光義 52, 55, 92
川妻千将 46
川原一行 62
川東崢弘 58
川人博 70, 76, 臨
河村道男 90
川本浩 100
神田健策 71
神田浩史 86

き

儀我壯一郎 23
菊地修平 41
菊本義治 50, 70, 78, 100
北川清子 78
北川健次 91, 97
北川秀樹 96
北川與司雄 46, 51
喜多源三郎 34
北島治 60
木田淳子 81
北野正一 85
北藤憲治 41
北村裕明 55, 60, 67
北村浩 89
北村洋基 32, 96
吉川顯麿 3
木津川計 52
木下武男 77
木下英雄 90
木原正雄 15, 43, 51, 61

| | | | | | | | |
|-------------|--|----------------|---|-------------------|------------------------------|--|--|
| 木村隆之 | 59 | 48, 50, 67, 91 | 柴田悦子 | 60, 67 | | | |
| 木村雅英 | 79 | 小山洋司 | 33 | 芝田進午 | 40, 55 | | |
| 木本喜美子 | 78 | 古来勝巳 | 71 | 島浩二 | 22, 69, 75 | | |
| く | | | | 島恭彦 | 5, 13, 42, 50, 51, 52, 74, 臨 | | |
| 日下三郎 | 44 | 近藤文男 | 43 | 清水克洋 | 58 | | |
| 草川昭 | 37 | 近藤学 | 67 | 下野克己 | 22 | | |
| 草野昭一 | 55 | さ | | | | | |
| 熊沢誠 | 68 | 斎藤彰英 | 96 | 下山房雄 | 59, 73, 74, 79 | | |
| 隈部紀彦 | 44, 56 | 斎藤勝弥 | 28 | シャピロ, ハーヴェイ | 56 | | |
| 久米弘子 | 67 | 斎藤久美子 | 76 | ショアー, ジュリエット .. | 74, 76, 臨 | | |
| 倉増寿幸 | 12 | 斎藤力 | 49 | 白井邦彦 | 92 | | |
| 黒川俊雄 | 67 | 斎藤雅通 | 44 | す | | | |
| 黒坂剛 | 82 | 坂井昭夫 | 6, 16, 21, 24, 43, 50 | 水津雄三 | 90 | | |
| 黒滝正昭 | 26 | 坂寄俊雄 | 54 | 末松三郎 | 60, 62, 64, 66, 68, 79 | | |
| 黒田慶子 | 82, 83, 84, 98 | 坂健二 | 44 | 菅谷音 | 89, 90 | | |
| 黒田兼一 | 71, 78, 96 | 阪本将英 | 83, 94, 98 | 杉浦正和 | 56, 62 | | |
| 二 | | | | 坂本悠一 | 35, 46, 47 | | |
| 小出由美 | 93 | 桜井香 | 35 | 杉原四郎 | 53 | | |
| 甲賀光秀 | 45 | 桜井幸男 | 53, 61 | 杉本昭七 | 18, 86 | | |
| 河野すみ子 | 85 | 佐古井一朗 | 88, 93 | 杉本末吉 | 24 | | |
| 越堂静子 | 76 | 佐々木建 | 53, 93 | 杉山悟 | 43 | | |
| 伍賀一道 .. | 18, 39, 46, 51, 56, 59, 70, 73, 86, 88, 91, 93, 94 | 佐々木潤子 | 89, 93, 100 | 鈴木秋洋 | 57 | | |
| 小杉功 | 98 | 佐々木秀太 | 24, 47 | 鈴木彰 | 49 | | |
| 小谷崇 | 97, 100 | 佐々木雅幸 | 27, 38, 44, 47, 57, 96 | 鈴木茂 | 18, 38, 50, 60, 69, 85 | | |
| 後藤和子 | 77 | 佐々木光明 | 86 | 鈴木章二 | 24 | | |
| 後藤雅貴 | 89 | 佐藤進 | 84, 87 | 鈴木富久 | 80, 97 | | |
| 後藤道夫 | 28 | 佐藤卓利 | 43, 45, 57, 74, 78, 82, 86, 92, 94, 96 | 鈴木文熹 | 34, 40 | | |
| 後藤康夫 | 11, 18, 26, 73, 91 | 佐中忠司 | 31, 32, 41, 81 | 須藤浩行 | 37, 38 | | |
| 小西一雄 | 49, 57 | 沢居紀充 | 36 | スマス, アイリーン | 79 | | |
| 小西和人 | 72 | し | | | | | |
| 小西豊 | 68, 80, 81 | しおまねき | 90 | 瀬川久志 | 57 | | |
| 小林世治 | 44, 45, 63, 70, 86, 91 | 重田晃一 | 71 | 関恒義 | 62 | | |
| 小林秀樹 | 27 | 重田澄男 | 29, 39 | 関下稔 | 41, 47, 64, 75, 88, 89 | | |
| 小林正人 | 46, 48, 58, 62 | 重本直利 | 37, 42, 49, 54, 61, 67 | 関根猪一郎 | 34, 37, 47, 95 | | |
| 小淵港 | 17, 20, 72 | 重森暁 | 2, 3, 4, 5, 7, 14, 17, 20, 30, 43, 48, 50, 54, 59, 62, 65, 75, 81, 100, 臨 | 千賀康利 | 92 | | |
| 小堀眞裕 | 82, 83, 85, 98 | 篠田武司 | 67 | そ | | | |
| 小松善雄 | 30 | 柴垣和夫 | 100 | 孫仲濤 | 83 | | |
| 小森治夫 | 23, 26, 27, 35, 38, 42, 43, | た | | | | | |
| | | 醍醐聰 | 1, 83 | | | | |

| | | | | | |
|-------|-----------------------|-------|--|----------|---|
| 田井修司 | 22 | 田比良敏夫 | 74 | 中井博敏 | 28 |
| 大麻南 | 40 | 環洋一 | 98 | 中江幸雄 | 58 |
| 高木彰 | 30, 38 | 田村考司 | 92 | 中尾茂夫 | 39, 41, 44 |
| 高岸正司 | 80 | ち | | 中川勝雄 | 36 |
| 高島拓哉 | 61, 72 | 千田忠男 | 74, 80, 86 | 中川スミ | 76, 77, 86, 88, 91, 100, 臨 |
| 高島嘉巳 | 61, 68, 87, 91, 96 | 趙國慶 | 92, 93 | 長沢高明 | 59 |
| 高須賀義博 | 24, 44 | 趙容來 | 89 | 長島修 | 23, 25, 80, 94, 99 |
| 高田好章 | 30, 41, 85, 91, 94, 臨 | 陳緋 | 89 | 中島哲郎 | 2, 3, 20, 36 |
| 高野雅章 | 96 | 陳福波 | 84 | 永田忍 | 91, 92 |
| 高野良一 | 90 | 陳力陽 | 85 | 永田秀樹 | 94, 99 |
| 高橋信一 | 66, 93 | つ | | 中田晋自 | 84, 85, 87, 99 |
| 高橋直樹 | 64 | 塚谷靜司 | 8, 36 | 中谷武雄 | 18, 25, 33, 34, 38, 50, 51, 55, 62, 69, 78, 88, 98, 99, 100, 臨 |
| 高橋肇 | 84 | 辻英太郎 | 5 | 中谷毅 | 89 |
| 高橋幸雄 | 85 | 津波古充文 | 27, 28 | 中根康裕 | 90 |
| 高浜介二 | 43 | 鶴田廣巳 | 19, 27, 29, 39, 51, 79, 84, 87, 93 | 仲野（菊地）組子 | 81, 86 |
| 高原朝美 | 54 | 鶴田満彥 | 29, 36, 69, 78, 99 | 仲野組子 | 62, 70, 79 |
| 高原一隆 | 50, 51, 76, 77, 86 | て | | 中橋幸二郎 | 21 |
| 高村貢 | 92, 94 | 寺西俊一 | 31, 39, 48, 55 | 中原優 | 23, 24, 27, 28, 31, 39 |
| 高山新 | 54, 68 | と | | 中原雄一郎 | 92 |
| 田口富久治 | 81 | 土居英二 | 36, 42, 82 | 永松利文 | 91 |
| 田口雅弘 | 63 | 遠山日出也 | 88 | 中村静治 | 11, 13, 21, 29, 33, 57 |
| 竹内貞雄 | 61 | 戸木田嘉久 | 22, 35, 58, 臨 | 中村正 | 87 |
| 竹内勉 | 99 | 徳田博人 | 82 | 中村達 | 54 |
| 竹内真澄 | 85 | 徳永盛一 | 40 | 中村寅四郎 | 23 |
| 竹田昌次 | 43 | 戸田昌基 | 86 | 中村暢宏 | 47, 58 |
| 武田宏 | 46, 60 | 十名直喜 | 55, 62, 63, 65, 67, 76, 79, 90, 91, 93, 97, 99, 臨 | 中村福治 | 89 |
| 竹味能成 | 31, 39, 49 | 戸名直樹 | 7, 8, 11, 12, 14, 20, 21, 26 | 中村雅秀 | 29, 37, 41, 56, 64 |
| 武元歎 | 22, 42, 48, 81 | 富沢賢治 | 34 | 中村淑子 | 38 |
| 竹本邦彦 | 41 | 富田宏治 | 80, 93 | 中本悟 | 49, 92, 98 |
| 田尻俊一郎 | 65 | 友野哲彦 | 74, 79, 83, 93, 99 | 中山久雄 | 44, 52 |
| 多田憲一郎 | 92 | な | | 永吉秀幸 | 32, 40, 42, 44 |
| 只友景士 | 80 | 長井偉訓 | 91 | 浪江巖 | 31, 48, 76 |
| 橋孝 | 32 | 中井健一 | 48, 56, 60, 81 | 奈良貞茂治 | 76 |
| 立石芳夫 | 80, 85 | に | | 成瀬龍夫 | 5, 6, 10, 14, 19, 25, 26, 28, 41, 50, 54, 56, 58, 62, 63, 68, 74, 100 |
| 田中三郎 | 97 | 新岡智 | 44, 51, 60 | | |
| 田中秀幸 | 39 | | | | |
| 田中宏 | 19, 27, 54, 63, 80 | | | | |
| 田中昌人 | 73 | | | | |
| 田中祐二 | 53 | | | | |
| 田中勇三 | 19 | | | | |
| 棚山研 | 86 | | | | |

- 新村聰 80
西岡俊哲 82
西口清勝 53, 87
西淳 97, 99
西田達昭 13, 21, 70, 臨
西谷敏 73
西野勉 64
西堀喜久夫 67, 80
西村貢 44
二宮厚美 15, 17, 19, 22, 24, 25, 26,
28, 31, 34, 43, 59, 73, 75, 77

ぬ

- 温井賢子 76, 臨
布村伸一 63
沼田延夫 臨

の

- 野口宏 64, 82
野崎律子 41, 49, 50
野澤正徳 22, 55
野原全勝 83
野町直彦 96, 98, 99
野村拓 23
野村秀和 22, 25

は

- 萩原遼 84
朴赫緒 96
ハサン, アブリキム 84
橋本直樹 60
橋本了一 50, 69, 85, 90
長谷川健二 53
長谷川哲夫 90
長谷川長昭 98
畠山敏夫 97
服部文男 26
初村尤而 13, 48
馬頭忠治 29, 31
花房無限 80
馬場優 93

- 羽淵三良 81, 84
浜林正夫 71
早川和男 60, 69
林堅太郎 6, 11, 15, 49, 51, 61, 64
林直道 20
林久和 45, 62, 臨
林弥富 21, 25, 79

ひ

- 日野秀逸 84
平井規之 30
平岡和久 85
平野喜一郎 52, 73, 74, 88
ヒロセ, ルイス 76
廣瀬幹好 52
広本政幸 92

ふ

- 布川日佐史 86
福井雅英 87
福島利夫 14, 50, 59, 70, 80, 81
福田昭良 88
福田利之 4
福田善乙 69, 100
福永清二 90, 91, 92
藤井絢子 97
藤岡惇 15, 16, 17, 18, 28, 30, 31,
34, 38, 39, 42, 48, 50, 51, 53, 56, 58,
59, 60, 61, 63, 75, 78, 87, 91, 93, 94,
96, 97, 100, 臨
藤岡純一 34, 59, 60, 72, 78, 94
藤木邦顕 臨
藤田睦男 87
藤田実 87
藤田安一 56
藤本武 47, 64
藤本義昭 80
藤山英樹 93
藤原貞雄 53
二神孝一 68, 69

ほ

- 北条豊 30, 32, 34, 42, 44, 52
細居俊明 53, 89
細川孝 50
堀地明 80
堀林巧 63
堀雅晴 56, 87
本田清春 41
本多三郎 19
本多潤一 58
本田洋一 19

ま

- 前田定孝 84
牧野広義 97
政田裕嗣 59
益川敏英 85
増田和夫 58, 62, 80, 83, 89, 91, 96
増田晃一 59, 90, 94, 臨
増田壽男 55
町田豊治 43
松井暁 84, 97
松尾匡 88, 92, 95
松尾光喜 25
松崎直敏 32
松下英爾 23, 68, 69
松田和男 19, 22, 26, 93
松田博 61, 80
松田亮三 82
松永佳子 64
松野周治 23, 47, 55, 84
松原豊彦 45, 63, 81
松丸正 82
松村文武 49
松本朗 75, 78, 86, 87, 97, 99
松本剛 64
松本学 72
的場信樹 33, 43, 56, 59
真部和義 79
真鍋能章 44

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|--|-------------|--|------------|--|-------------|---|------------|--------|----------|--|--|--|--|--|---------|---|------------|----|------------|----|------------|----|------------|----|-----------|----|-----------|----|------------|----|------------|----|------------|--------------------|-----------|----|------------|----|-----------|----|------------|------------------------|-------------|------------|-----------|--------|------------|----|------------|----|-----------|--------|-----------|--|------------|----|-----------|--------|----------|--|--|--|--|--|------------|----|----------|--|--|--|--|--|------------|--------|----------|--|--|--|--|--|------------|----|-------------|----|----------|--|--|--|--|--|-------------|----|
| 丸谷肇 | 48 | 森岡真史 .. | 64, 66, 69, 75, 77, 80, 91, 92, 95, 98, 100 | 湯本誠 | 27, 80 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| み | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 水谷利亮 | 94 | 森島涉 | 91 | 横尾邦夫 | 57 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 水田洋 | 77 | 森本載般 | 39 | 横田茂 | 83 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 水野正夫 | 29 | よ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 水野喜志彦 | 44, 51, 52, 56, 66, 71, 94, 臨 | 安井恒則 | 42 | 横田昌子 | 47, 59 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 溝口由己 | 84 | 保田芳昭 | 45, 92 | 横田綏子 | 18, 49, 99 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 溝手芳計 | 14 | 柳ヶ瀬孝三 .. | 3, 5, 14, 27, 28, 33, 37, 44, 54, 72, 76, 79, 80, 81, 89, 94, 臨 | 横山寿一 .. | 19, 40, 53, 56, 61, 72, 75, 81, 88, 92, 100 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 溝端佐登史 | 61, 75, 82, 89, 92 | 柳原克行 | 84, 90 | 吉川英治 | 88, 97 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 見田石介 | 6 | 柳幸夫 | 42 | 吉田昭臣 | 41 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 道旗一郎 | 68 | 矢野明人 | 43 | 吉田省二 | 82 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 光岡博美 | 22, 32, 65, 75 | 藪谷あや子 | 73 | 吉田元 | 88 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 三輪憲次 | 57 | 矢部恒夫 | 46 | 吉田秀明 | 18 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 南野泰義 | 88 | 山岸明 | 57 | 吉田央 | 69, 75, 82 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 宮内拓智 | 92 | 山口定 | 83 | 吉田文和 | 7, 12, 18, 21, 97 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 宮崎幹朗 | 91 | 山口正之 | 42, 53, 56, 84 | 芳野俊郎 | 68, 83, 90, 99 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 宮下武美 | 91 | 山崎好裕 | 83 | 吉村健二 | 12 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 宮地光子 | 78 | 山崎隆三 | 26 | 吉村民人 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 宮田和保 | 95, 96, 97, 98 | 山田昇 | 38, 39, 48 | 世登和美 | 88, 90 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 宮本憲一 | 5, 54, 65, 66, 97, 臨 | 山田博文 | 35, 37 | 米田康彦 .. | 30, 38, 54, 61, 72, 75, 95, 臨 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| む | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 向壽一 | 54, 82 | 山田文明 | 90, 94, 99 | 劉吟衡 | 98 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 向井喜典 | 12 | 山田誠 | 15 | り | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 村口信夫 | 68 | 山田正明 | 38 | 村田武 | 6, 20 | 山田亮 | 89, 91 | 若林靖永 | 84, 92 | も | | | | | | 山西万三 .. | 19, 20, 40, 42, 43, 49, 56, 67, 73, 81, 83, 87, 98, 99 | 毛利良一 | 73 | 山本健慈 | 78 | 若森章孝 | 76 | 望田幸男 | 86 | 山本隆 | 94 | 鶴谷徹 | 74 | 本宮正則 | 57 | 山本孝則 | 91 | 和田幸子 | 53, 85, 90, 91, 97 | 森可秀 | 52 | 山本久子 | 51 | 和田進 | 77 | 森井久美子 | 45, 58, 65, 70, 71, 89 | 山本広太郎 | 74, 80, 82 | 渡辺治 | 65, 77 | 森井淳吉 | 53 | 山本正夫 | 31 | 渡辺峻 | 62, 81 | 森岡孝二 | 4, 5, 7, 8, 10, 11, 14, 15, 16, 17, 19, 20, 23, 24, 25, 30, 31, 35, 39, 45, 47, 49, 50, 54, 56, 57, 58, 60, 62, 64, 67, 71, 75, 80, 83, 85, 86, 91, 96, 98, 100, 臨 | 山本裕美 | 84 | 渡哲郎 | 94, 99 | の | | | | | | 山本義彦 | 41 | K | | | | | | 湯浅良雄 | 46, 59 | I | | | | | | 雪田樹理 | 92 | K · U | 93 | の | | | | | | I K 生 | 23 |
| 村田武 | 6, 20 | 山田亮 | 89, 91 | 若林靖永 | 84, 92 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| も | | | | | | 山西万三 .. | 19, 20, 40, 42, 43, 49, 56, 67, 73, 81, 83, 87, 98, 99 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 毛利良一 | 73 | 山本健慈 | 78 | 若森章孝 | 76 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 望田幸男 | 86 | 山本隆 | 94 | 鶴谷徹 | 74 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 本宮正則 | 57 | 山本孝則 | 91 | 和田幸子 | 53, 85, 90, 91, 97 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 森可秀 | 52 | 山本久子 | 51 | 和田進 | 77 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 森井久美子 | 45, 58, 65, 70, 71, 89 | 山本広太郎 | 74, 80, 82 | 渡辺治 | 65, 77 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 森井淳吉 | 53 | 山本正夫 | 31 | 渡辺峻 | 62, 81 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 森岡孝二 | 4, 5, 7, 8, 10, 11, 14, 15, 16, 17, 19, 20, 23, 24, 25, 30, 31, 35, 39, 45, 47, 49, 50, 54, 56, 57, 58, 60, 62, 64, 67, 71, 75, 80, 83, 85, 86, 91, 96, 98, 100, 臨 | 山本裕美 | 84 | 渡哲郎 | 94, 99 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| の | | | | | | 山本義彦 | 41 | K | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 湯浅良雄 | 46, 59 | I | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 雪田樹理 | 92 | K · U | 93 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| の | | | | | | I K 生 | 23 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

投稿規程

下記の要項にしたがって、奮ってご投稿ください。

| | |
|-------|--|
| 種類と枚数 | 論文, 研究ノート: 200字詰 50枚以内 研究動向, 書評 : 同 20枚以内 いずれも, 図表, 注などを含む。 |
| 原稿 | 審査の迅速化のため, コピーを1部添えてください。 パソコン, ワープロをご使用の場合には, 本文のテキストのみを保存したファイルをお送りください。なお, お送りいただいた書類, フロッピー等は返却いたしませんので, ご了承願います。抜刷をご希望の方は実費にて作成可能です。 |
| 掲載料 | 下記の金額をお支払い願います(所員・所友・研究生を除く)。 論文・研究ノート 5000円, 研究動向・書評 2000円 |

編集後記

▼まずは『経済科学通信』が第100号公刊を迎えたこと、編集局員という立場ではありますが、これまで編集に携わってこられたすべての方に敬意を表する意味で、心からお喜び申し上げます。▼私が編集局の一員として活動させて頂くようになったのは、連載「政治学入門」が開始された81号からのことでありまして、「世紀」に輸えられている100号の歴史からいたしますと、ごく最近のことになります。その点で、この記念号の編集後記を私が執筆担当させていただくことに、やや不適任の感は否めませんが、それは次のような「別の事情」に起因するもののですので、どうかご了承ください。▼現代フランス政治(とりわけフランス第五共和政下における地方分権改革と都市コミューンの自治体改革)を専門としてまいりましたことから、これまで『通信』の書評・トピックス・政治学入門ではフランス政治に関する部分を執筆させて頂いておりました。そうした私にとっては大変幸運なことに、2003年度

から愛知県立大学外国语学部にフランス学科の政治学担当者として着任することになりました。出身地・名古屋で、また新たな生活を開始すべく、1990年4月、立命館大学法学部に入学して以来、大学院も含め13年にわたる京都での生活に一つの区切りをつけることになった訳です。▼名古屋と京都はいまや通勤圏といえるほどの「近さ」にあります。これまでのような編集局員としての活動は望めません。これまで6年間にわたり、『通信』の編集活動を通じて様々な知的刺激をいただきながら、十分な恩返しもできないまま、「持ち場を離れる」ことに心残りもありますが、私自身の今後の研究に生かしていくことで、何とかお返ししていきたいと存じます。これまでお世話になった研究所(とりわけ編集局)のみなさまに、この場をお借りしまして、お礼申し上げる次第です。ありがとうございました。

(中田 晋自)

福祉社会と社会保障改革

ベーシック・インカム構想の新地平

小沢修司著

戦後福祉国家体制下での社会保障制度のあり方を問い合わせし、最低限所得保障構想の可能性を明らかにする。

I 企業中心社会と社会保障改革

第1章 いま何故 社会保障改革か

第2章 国民から見た社会保障改革

II ベーシック・インカム構想と福祉社会の展望

第1章 ベーシック・インカム構想の新展開

第2章 労働の変容と所得保障

終 章 日本におけるベーシック・インカムの可能性

ゼミナール「女性学+男性学」

小森治夫著

2500円

社会福祉原論

岡崎祐司・藤松素子・坂本勉著

2667円

高齢者福祉論

永和良之助編著

2667円

日本福祉史講義

池田敬正・池本美和子著

2476円

まちづくりの中の精神保健・福祉

岡村正幸著

2286円

居宅型支援システムの歩みと思想

障害者福祉原論

植田章・岡村正幸・結城俊哉編著

2600円

生活保護法の挑戦

尾藤慶喜・木下秀雄・中川健太朗編著

2476円

介護保険・ホームレスの時代を迎えて

町衆企業とコミュニティ

三村浩史・リムボン編著

2619円

移動社会と生活ネットワーク

高橋伸一編著

8000円

元炭鉱労働者の生活史研究

四六判・208ページ・2200円

たかすか
高菅出版

▶表示価格は本体価格で消費税は含まれておりません。ご注文はお近くの書店または直接小社まで。
〒530-0041 大阪市北区天神橋1丁目13番15号 E-mail:takasuga@themis.ocn.ne.jp
TEL:06-6242-8421 FAX:06-6242-8934 郵便振替:00930-3-77434

経済科学通信 第100号 2002年12月15日発行

編集・発行

基礎経済科学研究所『経済科学通信』編集局

〒604-0934 京都市中京区麁屋町通二条下る尾張町225

第二ふや町ビル 603号

TEL/FAX (075) 255-2450

e-mail kisoken@mbox.kyoto-inet.or.jp

URL http://web.kyoto-inet.or.jp/people/kisoken/

振替 01080-8-1972 基礎経済科学研究所・編集局

森岡真史

大西広 神谷章生

岡宏一 木下英雄 佐々木潤子 中田晋自

中谷武雄 藤岡惇 増田和夫 中村美樹子

編集局長

副編集局長

編集局員

印刷所

北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町38-2

TEL (075)791-6125

購読料

一部 1,300円 定期購読 3号分前納 3,600円 (郵送料を含む)

桜井書店

東京都文京区本郷 1-5-17 三洋ビル <http://www.sakurai-shoten.com/>

TEL (03)5803-7353 FAX (03)5803-7356 値格税別表示

現代の労働と福祉文化

青木圭介著

グローバリゼーションのもとで危機に直面し再編を迫られる
日本の経営と労働——企業社会・日本はどこへ向かうのか?
文化を生活のなかに生かし、福祉を文化的創造的に実践する
試みに着目して、労働のあり方と新しい地域社会を考察する。

A5判上製・2600円

総説 現代社会政策

成瀬龍夫著

A5判上製・2600円

社会政策の過去と現状、そしてこれから——少子・高齢化など
社会経済の変容と市場優先・規制緩和への政策転換のもとでの
社会政策の存在意義と政策効果を再検証し、今後を展望する。

- 第1章 ○ 社会政策の原理
- 第2章 ○ 社会政策の公準
- 第3章 ○ 社会政策の歴史——初期立法から福祉国家体制まで
- 第4章 ○ 労働時間と社会政策
- 第5章 ○ 賃金と社会政策
- 第6章 ○ 労働市場と社会政策
- 第7章 ○ 社会保障の原理と制度
- 第8章 ○ 少子・高齢社会と社会政策
- 第9章 ○ 福祉国家と福祉社会
- 第10章 ○ 21世紀の社会政策

●好評の既刊書

日本経済の構造改革

佐藤真人・中谷 武・菊本義治・北野正一著 改革すべきは何か A5判・2500円

スウェーデンにみる個性重視社会 生活のセーフティネット

二文字理明・伊藤正純編著 福祉社会の最新事情を多角的に報告 46判・2500円

福祉国家の可能性 改革の戦略と理論的基礎

エスピング・アンデルセン著/渡辺訳 新しい福祉国家へのシナリオ・道筋 A5判・2500円

資本主義を見つけたのは誰か

重田澄男著 資本主義認識の深化の過程を追究する経済理論史 A5判・3500円

戦後の日本資本主義

長島誠一著 現局面に到る過程を検証して改革課題を考える A5判・3000円